

大菩薩峠

如法闇夜の巻

中里介山



お君は、やがて駒井能登守の居間へ通されました。

能登守の居間というのは、そこへ案内されたお君が異様に感じたばかりでなく、誰でもこの居間へ来たものは、異様の念に打たれないわけにはゆかないものであります。それは畳ならば六十畳ほどの広さを持った居間に、畳を敷いてあるのでなく、板張りにして絨氈じゅうたんのようなものが敷き詰められてあります。

その広い室の中央と片隅テールとに卓子が置かれて、その周囲には椅子が置かれて、四方には明るく窓が切つてあります。

長押なげしの上や壁の間には、いくつもの額が掲げられてあります。が、どの額も、軍艦や大砲やまた見慣れない風景や建築の図案

であります。それから書棚には多くの書物があります。その書物には洋式の書物が特にめだっているのみならず、書棚の隅や、本箱の上、また別に棚を作つて、見慣れないさまざまな武器の実物と模型とが、無数に陳列されてあります。

さまざまな武器といううちにも、ことに鉄砲が多く、ことに小銃にはいくつかの実物があり、大砲は模型として順序よく並べられてありました。

旧来の屋敷を、こんなに能登守が好みで建築をし直したものだ、お君はそのくらいのことはわかりますけれども、そのほかのことは、めまぐるしいほどで、なんと云つてよいかわかりません。

その卓子テーブルの近くの椅子の上へ腰をかけてよいのだか、また絨氈の上へ坐らねば失礼であるのだか、それさえお君にはわかり

ませんで、案内のあとに隠れてただポーツとして立ち竦すくんでしまつたようです。能登守はその時、片隅の椅子に腰かけて卓子に向つていました。

くろしや

黒羅紗の筒袖の陣羽織を着て野袴はを穿はいていました。門番の

さしず

足輕が言つた通り、今まで調練の指図さしずをしていたのが、それが済んでからここへ来て、書物を開いて何か書いているのでありません。その書物は、やはり見慣れない文字の書物であります。

それを見慣れた文字に書き直していたようであります。今まで広場で調練の指図をしていたという能登守は、それがために血色が活々いきいきとして、汗ばんだところへ黒い髪の毛が乱れかかつていました。

「よくおいでなされた、暫らくそれでお待ち下さい」

と言つて、筆を持ちながら、お君の方へ向いて莞爾かんじとした面おもてに

は、懐しいものがあります。

「はい」

お君は、やっぱり立ち場に困って、椅子へ腰をかけるのは失礼であろうし、そうかと言って、絨氈の上へ坐つて笑われはすまいかとの懸念^{けねん}で、真赤になつて立ち竦んでいるのみであります。

駒井能登守は和蘭^{オランダ}から渡つた砲術の書物を、いま自分の手で翻訳しているところであります。ちようどそれを程よいところでクギリをつけてから筆をさしおいて、その椅子から立ち上つて、

「お君どの、よく見えましたな、一人で……」

と言つて能登守は、真中にある方の大きな卓子^{テーブル}の方へ進んで、

「さあ、それへお掛けなさるがよい」

「はい」

能登守は、お君に椅子をすすめながら、自分も椅子に凭よりました。お君はようやく、その椅子へ腰を卸して、能登守と卓子を隔てて座にはつきましたけれど、恥かしいやら恐れ多いやらの感じで、胸がいつぱいです。

「先日は結構な下され物を、まことに有難う存じました」

やつとの思いで、お君はこれだけのお礼を、能登守の前へ申し述べたのであります。

「ナゼお前は、わたしのところへ来てくれない」

と能登守は碎けてこう言いました。その言葉の温かみは感じたけれども、その意味がお君には、よく呑込めませんでした。

「お礼に上ろうと存じましても、あまり恐れ多いものですか
ら……」

お君は、おどおどとして申しわけをしました。

「お前がわしのところへ来てくれると、わしは嬉しいけれども、伊太夫の家で、お前を放すことはできぬというからぜひもない」と能登守は、お君の横顔を見ながらこう言いました。この一語は、少なからずお君の胸を騒がせました。今までは身分の違う人の前と、見慣れぬ結構の居間へ通されたことから、気がわくわくしていたのですけれども、能登守の今の一言は、ひとことそれとは全く異つた心でお君の胸を騒がせました。

「わたくしは左様なことを、いつこう承りませぬ、主人からも、そのようなお沙汰のあつたことをお聞き申しませぬ故に……」

「ナニ、それを聞かぬ？ では、わしがお前の身の上について、伊太夫へ頼んでやったことが、お前の方へは取次がれんのじやな」

「はい、どのような御沙汰でございましたか……」

「それは不審」

能登守は美しい面を^{おもて}少しく曇らせました。お君はハラハラとした気持が休まりませんでした。やがて能登守はこう言いました。

「ほかではない、わしのところはこの通り女手のない家、それ故に伊太夫の方でさしつかえのない限り、お前にわしの家へ来て働いてもらいたいがどうじやと、家来をして申し入れたはず、それを伊太夫が断わって来た」

「まあ、そんな有難い御沙汰を……どうして旦那様が」

お君は当惑に堪えないのであります。御支配様からの御沙汰をお請^うけをしないと^{かかわ}に拘らず、左様な御沙汰があつたならば、一応は自分のところへお話がなければならぬはずだと

思いました。いくら主人だといつても、自分の身の上の御沙汰を、途中で支えてしまうというのは道理のないことだと思いました。さりとて、あの大家の旦那様が左様なことをなさるはずもなし……その時、はたと思い当つたのはお銀様のことであります。あ、それではお銀様の仕業しわざと、すぐにこう感づいてしまいました。

殿様から御沙汰があると、旦那様は必ずお銀様へその御沙汰のお伝えがあつたに違いない、それをお銀様が、あの気性で、わたしに話なしに御一存でお断わりなすつてしまつたに違いないと、お君はすぐにそう感づいてみると、お銀様に言われた言葉がいちいち思い当るのであります。お前が行けば殿様は喜んでお会い下さると、お銀様が断言したこと、そこに何かの確信があるような言いぶりがお君によく思い合わされると共に、殿

様はお前を好いている……と言ったお銀様の言葉、薔薇ばらのような甘い香と鋭い棘とげとが、ふたつながら含まれていたのも漸くわかつてくると、お君は我知らずポーツと上氣してまたも面かおが真赤になりました。そうして、お銀様の仕打ちが憎らしくなつてたまりませんでした。

「わたくしは初めて承りました、殿様からそのようなお沙汰のありましたことを、わたしは今まで存じませんでございました」
お君は自分の冤罪えんざいを申し開きするような態度でこう言いました。

お君が、自分の冤罪を主張するように熱心になつたのを、能登守は意外に思いました。

「お前がそれを聞かない——では伊太夫がお前に伝えることを忘れたのであろう」

と言いました。

「左様でございましょうか知ら」

とお君が本意^{ほんい}ないように言いました。

「伊太夫が承知をすれば、お前はここへ来てくれるか」
と能登守は頼むように優しい言い方であります。

「それは御主人の方さえ、お暇が出ますれば……」

とお君は、我ながら出過ぎたように思い直しました。

「それでは、もう一度、伊太夫に頼んでみよう」

お君は、やはりその言葉を有難いことに思いました。けれども、まだそこに一つの故障があることを同時に考えさせられないわけにはゆきません。その故障というのはお銀様のことです。旦那様は御承知があつても、お銀様が何というかとそれが心配であります。しかしそれとても、どうにか言いこしら

えることができるものと安んじておりました。

お君は、今この優しい言葉を聞き、これから始終、この殿様の傍に仕えることができるという嬉しさに、胸がいつぱいであり
ます。それがために胸がいつぱいで、己れの身分を考^{おの}える余裕^{よゆう}もありませんでした。また何のために自分がここに来たかという使命の程も忘れてしまっていました。やがてそれを考えついた時に、お君は悲しい心持がしました。悲しい心持が慌^{あわ}てる心持でせきたてられました。それで、幸内の行方不明になったことを逐一^{ちくいち}申し上げて、お頼みをしなければならぬと思ひました。

お君はようやく、そのことの一切を能登守に物語りました。幸内が伯耆の安綱といわれる刀を持って出て家へ帰らないこと、それがたにお嬢様がいちばん心配していらつしやること、幸内

はこの城内のどなた様かへお目にかけるつもりでその刀を持つて出たらしいこと、どうかお嬢様のために殿様のお力添えをお願い申したいということを、お君は嘆願したのであります。

能登守は黙つてそれを聞いて、何か考えているだけで返事をしません。しかし、それだけのお願いを申し上げておけば、お君のここへ来た使命は尽きたわけであります。

お君がお暇乞いをして帰ろうとする時に、能登守は立つて一方の机の上から、一つの小さな箱を取つて、

「まだ帰らんでもよからう、お前に見せたいものがある」

その蓋を取つて、お君の前に置きました。

「まあ、これは、殿様のお姿……」

と言つて立ちかけたお君は、この箱の中にあつた絵姿に見入つてしまいました。これは絵姿ではありません。けれども、お君

は、絵姿だと思つて、

「ほんとに、お生写いきうつし……どうしてこんなに上手にかけるものでございましょう」

と我を忘れて驚嘆したのであります。

「それはかいたのではない」

と能登守は微笑しました。けれども、お君にはその意味がわかりませんでした。

「恐れながらこちらのは、殿様、こちらのお方は……」

お君の見ている絵姿には、二人の人の姿が写し出されてある
のであります。その一人はこの能登守、もう一人は気高けだかい婦人
の像すがたでありました。

「それは、お前によく似た人」

この時のお君が写真というものを知らうはずがありません。

眼に見たことはおろか、話にさえ聞いたことはありません。

「それは、お前によく似た人」と言われて、お君の胸は何ということなしに騒ぎました。念を推してお尋ねするまでもなく、これは殿様の奥方でいらつしやるとお君は覚さとりました。

お君は奥方のお像をじつと見入つて、「お前によく似た」とおつしやつた殿様のお言葉が、おからかいなさるつもりのお言葉ではないと、お君は自分ながら、そう思いました。己おのれの容貌を買い被るのも女であるし、己れの容貌をよく知るのも女であります。

「それは写真というもので、筆や絵具でかいたのではない、機械でとつて薬で焼きつけた生しょうのままの像すがたじゃ、日本ではまだ珍しい」

絵姿だとばかり思つて、お君があまり熱心に見み慌とれているも

のですから、能登守が少しばかり説明を加えますと、

「これはかいたものではございませんか。まあ、機械で、どうしてこんなによくお像を写すことができるのでございましょう、
きりしたん切支丹とやらの魔法のようでございます」

「そうそう、最初はそれを切支丹の魔術と聞いていた、今でもその写真をとると生命いのちが縮まるなんぞと言うものが多い、けれどもそれは取るに足らぬ愚かな者の言い分じゃ」

「ほんとにお珍しいものでございます」

お君はその写真を飽かず見ておりました。自分は今お暇乞いをして立とうとしてゐることも忘れて、写真から眼をはなすことができません。

「それをお前が欲しいならば、お前に上げててもよい」

能登守からこう言われた時に、かお面を上げたお君の眼は狂喜に

かがやいて見えました。

こうしてお君は能登守から、箱に入れたまま紙取りの写真を
いただいて帛紗ふくさに包み、後生大事ごしょうだいじに袖に抱えてこのお邸を立ち
出でました。

それから御門まで来る間も、お君は嬉しきで宙を歩んでいる
ような心持です。その嬉しきのうちには、やはり胸を騒がせる
ような戦おのきが幾度か往来ゆききをします。その戦きはお君にとって怖
ろしいものでなく、心魂しんこんを慌とろかすほどに甘いものでありました。
「わたしは、あの殿様に好かれている、あの殿様は、わたしを
憎いようには思召おもしていない、たしかに——」

お君は身を揺ゆつて、そこから己おのれの心の乱れて行くことを、
更に気がつきません。

ましてや、お君は、お銀様に頼まれて来たことも、そのお銀様がお濠ほりの外で待ち焦こがれておいでなさるだろうということも、この時は思い出す余裕がありませんでした。さいぜん親切に案内された門番へさえも、一言も挨拶ひつじとをしないで門を通り抜けようとして、門番から言葉をかけられてようやく気がついて、あわててお礼を言つたくらいでありました。

橋を渡つて、お銀様を待たせた柳の樹のところへ来て見たが、そこにお銀様の姿が見えませんでした。

「お嬢様は……」

と言つて、お君はそのあたりを見廻しましたけれども、そのあたりのいずれにもお銀様らしい人の影は見えません。

その時に、お君は自分が能登守の前に、あまり長くの時を費ついやしたことを考えました。待たせる自分は嬉しさに包まれて時の

移るのを知らなかつたけれど、待たせられたお嬢様にとつては、ずいぶん長い時間であつたろうと気がつきました。

二

これより先、お濠の岸に立つてお君の帰るのを待つていたお銀様は、そのあまりに長いことに気をいらだちました。

役割の市五郎が傍へ寄つて来た時に、お銀様は振返つてそれを睨にらみました。市五郎はなにげなくそれを反そらして行つてしまつたが、お銀様がそれを忘れてやや久しいのに、お君はまだ御門から出て来る模様がありません。

お銀様はお城の方を睨にらんで、荒々しく足踏みをしました。それからお濠の岸を、あっちへ行つたりこつちへ歸つたりしてい

ました。

そうすると、問屋場の方から五六人かたまつて私語きながらこつちへ来る者があります。それは例の折助連おりすけれんであります。

自分で無理にすすめて廊の中くるわへやつておきながら、お銀様は焦じれて焦れてたまらなくなっていました。自分を平気でこんなに待たせておくお君を呪のろうような心持になつて、城の方ばかり睨にらんでいましたから、この五六人の折助連が私語ささやきながらこつちへ近づいて来ることも気がつきません。

そうしていると、折助の一人が、ふらふらと歩いて来て、お銀様に突き当るようにしてすれ違つて、

「危ねえ、危ねえ」

と言いましたから、お銀様も気がつくとその折助は酔つていて、足許も定まらないようであります。お銀様は驚いてそれを避けよけ

ました。それを避けるとその次に、また一人の折助が通りかかって、同じようにお銀様に突き当ろうとしました。お銀様は、また驚いてそれを避けると、第三番目の折助が、とうとうお銀様になぶつつかつてしまいました。お銀様は危なく足を踏み締めますと、

「やい、気をつけやがれ」

とその折助が言いました。わざとする乱暴さに、お銀様は口惜しがって折助どもを睨めて立っていました。お銀様の眼つきは、ことさらに睨めないでも、いつも怒気を含んでいるように見えるのであります。

「へへへへへ、これはこれは」

と言つて折助は急に、ふざけた声色こわいろを使つて、頭巾で隠してあるお銀様の顔をワザと覗き込むようにして、

「お女中のお方でいらつしやる、それとは知らず飛んだ御無礼」
なんぞと言つて、またまたワザとらしい声色と身ぶりでお辞儀をしました。

お銀様は、それを見ないでふいと向き直つて歩き出すと、
「兄弟、きょうでえどうしたんだい」

と言つてほかの折助が寄つて来ました。

「いや、このお女中に飛んだ失礼をしてしまつたんだ、ツイ足がよろめいたために、このお女中に突き当つてしまつたから、
今、あやま謝罪つているところなんだ、兄弟、なんとかとりなしてくんねえ」

と、前の折助がこんなことを言いました。

「そいつは悪いことをした。まあ、どちらのお女中さんか知らねえが、この野郎は、ふだん平常からかるはずみ軽佻な野郎でございますから、ナ

二、別に悪い心があつてするわけじゃございません、どうぞ御勘弁してやつておくんなさいまし」

ほかの折助が、これもまたワザとらしい身ぶりと声色で、揉手もみでをしながら、お銀様の方へとかたまつて来るのであります。

お銀様は腹を立てました。無礼にも無作法にも限りのないやつらだと、口惜しくてたまりませんでした。それだから黙つて彼等を振り払つて行こうとすると、その前へ廻り、

「どうか、御勘弁をなすつておくんなさいまし」

それを振り払つて、また進んで行くと、

「野郎が、あんなに謝罪あやまるんだから、どうか御勘弁をして上げておくんなさいまし」

お銀様は心の弱い女ではありません。どちらかと言えば気丈な女であります。それだからこれらの無作法な折助に一言も口

を利くことをいやがりました。それを振り払って避けようと思いました。

折助どもはそれを前後から取捲くようにして追いかけるのは、どうも何か計画あつてすることしか思われません。

「これほど謝罪^{あやま}つても、何ともお許しが出ねえのは、よくよく見倒された野郎だ」

と折助の一人が言いました。

「ナ―ニ、お女中さんが纏^{きりよう}緻がよくつていらつしやるから、それで気取つておいでなさるのよ、下郎どもとは口を利くも汚^{けが}れと思つておいでなさるんだ」

と、また一人の折助が言いました。

「違えねえ、折助なんぞはお齒に合わねえという思召しなんだから、それでお言葉も下し置かれねえのだろう。ああ、情けな

くなつちまわあ、孫子まじこの代まで折助なんぞをさせるもんじゃねえ」

と言つて、また摺すり寄つてお銀様の面かおを覗き込むようにしました。お銀様がついと横を向くと、乗り出してわざとまた覗き込んで、

「はははは」

一度に笑いました。お銀様は齒咬はがみをして彼等を押し退けて避けようとする、折助たちは、ゾロゾロと後をついて来るのであります。お銀様は、ついに立ち竦すくんでしまうよりほかはなくなりました。

そうすると、折助もまたその周囲に立ちはだかりました。

「お前たちは女と侮あなじつて、このわたしに無礼なことをする気か」
お銀様はこらえきれなくなつたから、声を慄ふるわして折助ども

を詰責きつせきしました。お銀様でなかつたら、ぜひはさて措おいて、一応この折助どもに謝罪あやまつてみるべき儀でありましたけれど、お銀様は口惜しさに堪えられないで、わが家の雇人を叱るような態度で嵩かさにかかりました。

「どう致しまして、無礼をするなんぞと、そんなことがござい
ますものですか、お女中がお一人では途中が案じられますから、
こうしてお送り申し上げようと言うんでございます」

折助はこう言いました。

「わたしは、ほかに連れの者がある、それを待っているの故、お
前方のお世話は要いらぬ」

お銀様は、やはり叱るような言いぶりであります。折助ども
は、お銀様が何か言い出すのを待っていたと言わぬばかりでし
たから、

「そんなことをおつしやらなくたっていいじゃあございませんか」

「無礼なことをすると許しませぬ」

お銀様は懷中へ手を入れました。その時に一人の折助が、横の方からお銀様の被っていた頭巾を引張りました。眼ばかり見えていたお銀様の面かおの口もとから額へかけて、斜めにその呪われた怖ろしい面が見えました。

「はははは」

と折助どもは声高く笑いました。齒をキリキリと噛み鳴らしたお銀様は、キラリ光るものを手に持っていました。

「やあ、危ねえ、刃物を持っている」

前後から五六人の折助が寄つてたかつて、お銀様の持っていた懷剣を奪い取ろうとして、怪我をしたものもありました。

「面倒くさいから引担ひっかついでしまえ」

彼等は寄いきなりつてたかつて無礼な振舞に及ぼうとする時に、妙詮寺みょうせんじの角から突然飛び出して来た強そうな男。

「この野郎ども、飛んでもねえことをしやがる」

折助どもをポカポカと殴り飛ばして、その一人を濠の中へ蹴込みました。

「やあ、役割！」

と言つて、折助はたあいもなく逃げてしまいました。この場へ来合せた強そうな男は、役割の市五郎であります。

「お嬢様、もう御安心なさいまし、ほんとにあいつらあ、悪い奴だ、お嬢様とも知らずに碌ろくでもねえことをしやがる」

市五郎がこんなことを言つて慰めているところは市五郎の宅

であります。

「市五郎どのとやら、お前が来てくれなければ、わたしはドノような目に会ったことやら。よいところへお前が来てくれたから、それで悪者がみんな逃げてしまいました」

お銀様は泣いていました。

「ナニ、たかの知れた折助どもでございますが、打捨うちすてつておく
と癖になりますから、少々大人げねえと思いましたが、二
つ三つ食くわしてやりました。御心配なさいますな、これからお
屋敷まで送らせて差上げますから」

「市五郎どのとやら、わたしには連れの者があつてそれを待つ
ていたところ、その連れの者に沙汰をして貰いたい」

「左様でございますか、そのお連れの方とおっしゃるのはどち
らへおいでになりました」

「御城内まで参りました、もう帰つて来て、あのお濠ほりの傍で、わたしを探していることと思います、早う、そこへ人をやって、わたしがここにいることを知らせて下さい」

「へえ、よろしうございますとも。そうしてそのお連れの方のお名前は何とおっしゃいますな」

「それは君といつて、年もわたしと同じ位、わたしと同じこのような衣裳を着ておりますわいな」

「なるほど、お君さんとおっしゃるのでございますな、へえ、よろしうございます、今、人をやってお迎え申して差上げますから、御安心なさいまし」

「この甲府にも、わたしの親戚はあるけれど、誰にも言わないように頼みます、わたしが悪い者に出会つて、あんな狼藉ろうぜきをしかけられたと、それを世間に知られては外聞になるから、内密ないしよ

に頼みます」

「へえ、もうその辺は心得たものでござりまする、人様の外聞になるようなことを、頼まれたつて触れて歩くような、そんな吝けちな野郎でもございせんから御心配なさいますな。まあ、なんにしてもお怪我がなくてようございました」

「あの、早く連れの者に沙汰をして」

「へえ、よろしうございます、いま使に出した野郎が、もう帰つて来ますから、帰つて来たらすぐに飛ばせてやりますでござい
ます、お乗物なんぞは、ここで一声怒鳴どなれば御用が足りるんです。
嬬かかあでもいるとお髪ぐしやお召物のお世話をして上げるんでござ
いますけれども、まあそのうちに嬬も帰つて参りますから」

「髪や着物などはかまいませんぬ、あのお君が帰つて来さえすれ
ば、直ぐにお暇いとまをして屋敷へ帰りたい、早くあの子へ沙汰をし

て」

「へえへえ。どうも困つたな、いつも二人や三人はゴロゴロして
いるくせに、今日に限つて嬬までが出払つてしまふなんて。と
言つて俺が出向いて行けば家は空になるし……野郎どもも大概
察しがありそうなものだ、ぐずぐずしていると日が暮れちまう
じゃねえか、日が暮れちまつた日にやあ、お嬢様をここへお泊
め申さなけりやなくなるんだ。そんなことにでもなつてみ
ろ、お屋敷でどんなに心配なさるか知れたもんじゃねえ」

市五郎は焦れ^じ気味で独言^{ひとりごと}を言つてゐるに拘^{かか}わらず、自分は長
火鉢の前へ御輿^{みこし}を据えて、悠々と脂下^{やにさが}つていました。

宇治山田の米友は、この時分に八幡宮の境内を出て来ました。

米友は油を買うべく、町へ向つて出かけたのであります。

町へ出る時にも、やつぱり米友は烏帽子えぼしを冠かぶつて白丁はくちようを着てお

りました。それから例の杖に油壺をくくりつけて肩に担かついでお

りました。今夜もまたでえだらぼつちの来襲に備うべく、燈籠とうろう

の番をする必要があればこそ、油を買いに行くのであります。

でえだらぼつちというのはそもそも何者であろうかというに、

これは伝説の怪物であります。素敵すてきもない大きな男で、常に山

を背負つて歩いて、足を田の中へ踏み込んで沼をこしらえたり、

富士山を崩して相模灘さがみなたを埋めようとしたり、そんなことばかり

しているのであります。

でえだらぼつちという字には何を当箝あてはめたらよいか、時によつ

ては大多法師と書きます。ところによつてはレイラボツチとも

言います。そんなばかばかしい巨人があるわけのものではないけれど、諸国を旅行したものは、どこへ行つてもその伝説を聞くことができます。今でも土地によつてはその実在をさえ信じているところもあるのであります。で、え、だ、ら、ぼ、つ、ち、が八幡様へ喧嘩を売りに来るといふ伝説の迷信が取払われないから、米友は今夜も燈籠へ火を入れなければなりませんでした。

「で、え、だ、ら、ぼ、つ、ち、も、で、え、だ、ら、ぼ、つ、ち、だ、が、八幡様も八幡様だ」

米友はブツブツ言いました。実際、米友の粗雑な頭でさえも、で、え、だ、ら、ぼ、つ、ち、の、実、在、を、信、じ、き、れ、な、い、の、で、あ、り、ま、す。わ、ざ、わ、ざ、眠い眼を擦こすつて、實際有るか無いかわからないものの来襲に備えているといふことは、かなりばかばかしいものだと思わないではありませんでした。

しかし、米友はいま宮仕みやづかえの身であります。ばかばかしいか

らと言つてそれを主張した日には、また追い出されてしばらくは路頭に迷わねばならないと思つて、これまでずいぶん追い出されつけていただけに、多少身にこたえがあるから、ばかばかしいはばかばかしいなりに辛抱して、その油買いにも行き、油差しもしようというものであります。

「油買いに茶買いに、油屋の縁で^{すべ}つて^{ころ}転んで、油一升こぼした」

と町の子供が、米友が油を買いに出たところを見て^{はや}囃しました。米友は、それに取合わないで澄まして歩きました。子供らにとつても大人にとつても、米友が油買いに行く形はおかしいものでありましたろう。

八幡の社を出て米友は三の堀を、^{くるわ}廊の中へと行きました。廊を抜けて町の方へ行こうとして、^{たてまち}豎町の正念寺の角を曲つて二

の堀の際を歩いて行くうちに、米友は、

「あつ」

と言つて立ち止まりました。

そうして猿のような眼を円くして、しきりに御門の橋のあたりを見つめていました。

「あつ、ありや」

と言つて吃どもりました。吃つた時分には、いま米友が見かけた人影は、御米蔵おこめぐらの蔭へ隠れてしまいました。その人影の隠れた御米蔵をめざして、米友は一目散いちもくさんに駆けて行きました。

その挙動は、かなり粗忽そそつかしいものであります。ついには油壺が邪魔になるので、その油壺を振り落して堀際を駆けました。米友の身にとつては油壺も大切ですけどもその油壺を抛り出してさえ、なお追い求めようとするものがあつたと見なけ

ればならぬ。ほかでもない、米友は今ここで計^{はか}らずもお君の姿を認めたからであります。

米友がその不自由な足を引きずってわざわざ甲州まで来たのは、一^{いつ}にお君を求めんがためでありました。米友にとってお君は唯一^{ゆいつ}の幼^{おさ}な馴染^{なじみ}であり、お君にとつても米友は唯一の幼な馴染でありました。米友は、今しばらく旅費に窮^たしたから八幡宮に雇われましたけれど、いくらか給金が貯^たまればそれを持って、お君を探しに行くつもりなのであります。

それだから、いま認めたそれがお君であつたとすれば、もう油壺などは問題にならないはずであります。

息を切つて米友が馳せつけたのは、例の役割市五郎の宅の裏手。

「こんにちは」

米友は、せいせい言つて、そこに庭を掃いていた折助に挨拶しました。

「何だ」

折助は米友を見て怪訝けげんな面かおをしました。

「少しお聞き申してえことがあるんだ」

米友は唾つばを飲んで咽喉うるを湿おしました。

「何だ何だ」

折助は米友が、あんまり一生懸命に見えるから笑止しょうしがつて箒ほうしを持った手を休めました。

「今、ここへ娘が一人、入ったろう、仲間ちゅうげんにつれられて娘が一人入ったろう」

「ふん、それがどうしたい」

「それを聞きてえんだ、あの娘はありや、この家に奉公してい

る娘かい、それともまたよそからお客に來た娘なのかい」

「それをお前が聞いてどうするんだ」

折助は突き放すように答えました。

「それを聞かなくちやならねえことがあるんだ、後生ごしょうだから教えてくれ」

米友は突き放されじと焦せき込みました。焦き込めば焦き込むほど、米友の調子が変わになりますから、折助などが嘲弄するに、よい材料であります。

「ははは、ずいぶん教えてやらねえもんでもねえがの、いったいお前はどこの何者で、あの娘つ子とは、どんな筋合いがあるんだ、それから聞かしてもらった上でなけりやあ骨が折れめえじゃねえか」

「うむ、俺おいらはいま八幡様に奉公しているんだ。名前か、名前

は米と言つてもよし、友と言つてもかまわねえんだ。今たしかにこの家の中へ入った娘は、ありや、国にいた俺らの幼な馴染とよく似ているんだ、よく似ているじゃねえ、あの子に違えねえのだから会いてえのよ、向うでもまた、そう言えばキット俺らに会いたがる」

「おやおや、こりやあお安くねえわけだ」

と言つて折助は、またおかしな面かおをして、米友の面をジロジロと見ました。

この問答が事ありげなので、そこへ屋敷の中から二三人の折助がまた面を出しました。

「どうしたのだ」

「ははは、この大將が、はるばる国許くにもとから女を追っかけて来たんだ、そうして後生だから一目会わせてくれという頼みよ。会

わせてやらねえのも罪のようだし、そうかと言って、会わせて間違えでも出来た日には、取返しがつかねえし、どうしたものかと、挨拶に困っているところだ」

「なるほど」

彼等は充分の侮辱を以て、米友の面をしげしげとのぞいて、

「は、は、は」

と嘲笑あざわらいしました。米友は勃然むっとして、

「何だ、何がおかしいんだ」

手に持っていた杖を取り直しました。

「まあ、兄さんや、そんなことを言わねえで帰りな。そりや、お前の眼で見ると、どの女もこの女も、みんなその国許にいた馴染の女とやらに見えるんだろうけれど、今ここを通った女はありや、ちつとお前には縁が遠いんだ。悪いことを言わねえから、

ほかへ行つて、もう少しウツリのいいのを探してみな」

お君のことを言い出すと、米友は必ず侮辱されてしまいます。前に両国の輕業かるわざの小舎こやへ訪ねて行つた時も、美人連のために手ヒドク嘲弄されました。

短氣の米友が、ここで折助連と衝突を起さなかつたのは不思議であります。しかし、米友もこのごろでは、短氣がいつでも自分に好い結果を来さないことを少しは悟さとつたのか、争つても到底、折助が自分の言うことを相手にしないのを見て取つたのか、口が吃どもつて利けないほどに憤慨しながら、悄悄しおしおとしてそこを引上げたのであります。

引上げるには引上げたけれども、確かに米友はお君を見たのです。お君が堀端をあちらこちら歩いている時に、一人の男が来てお君に何か言つて、お君を連れて行くのを見かけたから、

それで油壺を抛り出して追いかけて、この家へ連れ込まれたのを、確かに見たのでありますから、その場は立ち去ったけれども、到底この屋敷から眼と心とを離すわけにはゆきまずまい。

しばらくその屋敷の周囲を彷徨^{さまよ}うていた米友は、物蔭へ入っ

て烏帽子と白丁とを脱いでクルクルと丸めて懷中^{ふところ}へ入れました。

それからこの屋敷の前にあつた縄のれんの一ぜん飯屋の前を二三度往来^{ゆきき}しましたが、思いきつてその中へ入って空樽へ腰をか

けてしまいました。米友はここで一ぜん飯を食いはじめました。

一ぜん飯を食いながらも、役割の屋敷からちつとも眼をはなすことではありません。けれどもいったん入ったお君の姿は、この家のどちらからも外へ出た模様はありません。一ぜん飯を食い終った米友は、なお暫らく腰をかけて、縄のれん越しに市五郎の宅ばかりを見ていました。そのうちに日が暮れかかつて、

四方^{あたり}が薄暗くなりました。飯屋の親方は掛行燈に火を入れまし
た。

米友はようやく気がついたように、四方を見廻して、

「ああ、俺らも燈籠へ火を入れるんだった」

と急に考えて飛び上りました。

けれども、燈籠に火を入れることはもはや米友の責任ではあ
りません。ただ偶然、その責任に驚かされてこの一ぜん飯屋を
飛び出した米友は、役割の家の塀^{あたり}の辺をグルグルと廻っていま
した。

ちょうど、黄昏時^{たそがれどき}であることが、米友にとっては仕合せであ

りました。塀のまわりや壁の下に身を摺^すりつけて、中の様子を
伺っていると、数多^{あまた}の折助が、遠慮のない馬鹿話をしたり高笑
いをしたりするのがよく聞えましたけれど、女の声としては更

に聞えることがあります。

米友はついに泳こらえ兼ねて、その杖を塀のところに立てかけて、それに足をかけて飛び上りました。天性の敏捷な米友は易々やすやすと塀を乗り越えてしまいました。塀を乗り越えるとその杖を上から引き上げて、屋敷の中の井戸端からソツト忍びました。

ここは、折助どもの集まっている、いわゆる大部屋であります。昼のうちはそんなでもなかったのが、いつ集まったか、盛んな人集りひとだかで、一方の隅にかたまつて博奕ばくちに夢中なのもありました。真中どころにごろごろして竹の皮包みの餡あんころかなにかを頬張りながら、下卑げびた話をしてゲラゲラ笑っているのもあります。

博奕の方ではスポンスポンと烈しい音がしていました。今まで着ていた唐棧とうざんの着物を脱いで抛り出すのもあり、縮緬ちりめんの帯を

解いて投げ出すのもありました。

こちらで寝転んで、餡ころを頬張りながらゲラゲラ笑って下卑た話をしているのが、米友の耳によく入ります。米友は戸のふしあな節穴からそつと覗のぞいてみると、蜜柑箱みかんばこを枕にした折助が、

「はくしよッ」

と咳せきをしました。

「風邪かぜを引いちまった、飛んでもねえところで泳ぎをさせられちまったから、風邪を引いちやった」

と言いました。

「は、は、は」

と一人の折助が高笑いをすると、

「あつぷ、あつぷ」

と、もう一人の折助が水に溺れるような形をしました。

「笑いごとじゃあねえ、全く命がけの狂言よ、二朱じゃやすい」と風邪を引いた折助は、さのみ浮き立ちません。

「全く笑いごとじゃあねえ、親方にいいところを買って出られて、こつちはまるつきり儲もうからねえ役廻りだが、そのなかでも、兄いが儲からねえ方の座頭ざがしらだ」

「そりゃそうよ、手前たちは、痛くねえように二つばかり殴なぐられたんで事が済んだけれど、俺らときた日にゃあ御丁寧に、お濠の中で涼ませられたんだ」

「仕方がねえ、頼まれりゃ水火の中へも飛び込むということがある」

「そこが男だ」

「ふざけるない。そうして骨を折っておけば、骨を折っただけのものはあるだろうと思っていたら、何のことだ、手前たちと

同じように二朱の頭だ。結局、看板をだいなしにしたのと、寒い思いをしたのが儲けもんで、風邪を引いたのが利息だ、ばかばかしいっちゃあねえ」

「ははははは」

折助どもは、愚痴を言っている折助を笑いました。

「いったい親方は、あんな狂言をして、あんな化物娘を引張り込んでどうする気だろう、姉御の縹緞きりようだってマンザラではねえし、どうも役割の気が知れねえ」

「そりやお前、なんだな、あれはおトリ、というもののさ。あれをああしておトリ、にしておけば、それ案あんの定じよう、あとから音色ねいろのいいのがひつかかって来ようというものじゃねえか。けれどもこりゃ、役割が色に転んだ狂言じゃあねえ、慾にかかった仕事だよ」

「なるほど」

米友は、折助どもの話を聞いてギクリとしました。

米友は大部屋から奥の方へソロソロと歩み出します。今の話によつても、ぜひぜひこの家に突き留めねばならぬものがあることは、充分に合点してしまいました。

米友はそこやここをウロウロと歩いて、戸の節穴や壁の隙間を覗^{ねら}つていました。誰かに見つければまさしく泥棒の仕業であります。しかしもう心のいつぱいに張りきつてゐる米友は、更に疑^ぎ惧^ぐするところがありません。戸でもあいていたなら、そこから家の中へ入ってしまったでしょう。けれど、戸はよく締めであり、節穴もないことはないし、壁の隙間もあるにはあつたけれど、中は障子が立てきつてあつたり、真暗であつたりして、どうも思うように家の中を窺^{うかが}うことができません。

もしも、それらしい女の声でもしたらと、耳を戸袋へ密着けたりなどしましたけれども、それらしい声も聞えません。米友はこうして家の周囲を一通り廻つてしまいました。

今度は縁の下へ潜つてみようと思ひました。短軀にして俊敏な米友は、縁の下を潜るのにことに適當しております。

米友が縁の下へ潜ろうとした時に、表の方で人の声がしました。

「へえ、お迎えのお駕籠でございます」

縁の下へ潜りかけた米友は、その声を聞き咎めて耳を引立てたが、急に縁の下へ潜ることを見合せて、その声のした方へ出かけました。米友は立木の蔭から、今この家の表へ来た駕籠と駕籠舁とをじつと見ていました。駕籠が二挺釣らせてありました。人足は提灯を持ったり、息杖をかかえたり、煙草を喫んだ

りして、居たり立ったりしていました。これらの連中がそこへ暫く待つていると、家の中から、

「御苦労、御苦労」

と言つて出て来たのは役割の市五郎であります。米友はこの男を知らないけれども、多分、これがここの親方だろうと思ひました。

「親方、今晚は」

と言つて、駕籠舁どもは頭を下げました。

「さあ、お嬢様、これにお召しなさいまし、お女中さんはこちらのにお召しなさいまし」

市五郎が、あとを顧みてこう言つたから、米友は、

「ちえッ、提灯の火が暗えなあ」

米友は腹の中で業ごうをにやしました。米友が身体を固くして、

固唾^{かたず}を呑んで、その上に業をにやして待つてゐるのは、今、市五郎がお嬢様と呼び、お女中さんと呼んだその人の影^{すがた}をよく見たいからであります。まもなくそこへ現われたのは——一層口惜しいことに頭巾^{ずきん}を被^{かぶ}つています。頭巾を被^かつて面^{かお}の全部はほとんど見えないから、米友が身悶^{みもだ}えしているうちに、その頭巾を被^かつた若い娘は前の方の駕籠へ、市五郎が手を取つて乗せて垂^{たれ}を下ろしてしまいました。

「ちえッ」

米友は口惜しがつて地団太^{じだんだ}を踏みましたが、続いて同じような形^{なり}をして、同じ年頃の娘が、これも同じように頭巾で面を包んで出て来たのを見ると、

「おや」

米友は実にカッとしてしまいました。

「おつと待つてくれ」

こう言つて暗やみの中から飛び出してしまったのは、米友としてはぜひもないことであります。

「何、何だと」

はしなく米友がその場へ飛び出したことによつて、その場は大混乱を惹ひき起しました。

その混乱を聞きつけて折助どもが飛び出して来ました。折助どもが米友を支えている間に、市五郎は、差図してズンズン駕籠を進ませてしまいました。

ほどなく米友の姿は市五郎の家の屋根の上に現われました。彼は杖を持つて、いつのまにかその俊敏な身を屋根の上へと匆はねあ上あげてしまったものと見えます。

米友の姿が屋根の上に現われた時に、下では折助どもが喧けんけんごうごう々ごうごう囂ごうごう々ごうごう

として噪さわぎ罵りました。梯子はしごを持つて来いと怒鳴りました。俺は頭を三ツ四ツ続けざまに、あの棒で殴られたと言つて齒咬はがみをしているものもありました。眼と鼻の間を一撃の下に打ち倒されて、鼻血を出して頭の上げられない者もありました。博奕ばくちをしていたのも、無駄話をしていたのも、みんな馳せ集まつて来ました。

下では、こうして折助が芋を揉もむようにして噪いでいるのを、米友は見下ろしてハッハッと息を吐きました。

「ちえッ、口惜しいなア、こいつらに邪魔をされて、あの駕籠おつかを追蒐おつかけることができねえのが口惜しいなア」

屋根の上で足を踏み鳴らしつつ口惜しがりました。

四辺あたりを見廻しても、夜は真暗であります。真暗い中に甲府の城が聳そびえています。二の廓くるわは右手の方に続いています。前も左

もいずれも武家屋敷であります。

屋根へ上った米友は、いつぞや古市の町で宇津木兵馬に追い詰められた時のように、屋根から屋根を泳ぐつもりでありました。

米友は小躍り^{こおど}して屋根の瓦の上を走りました。

「ソレ、そっちへ行つた」

折助が噪ぎ^{さわ}ました。

「ヤレ、こつちへ来た」

梯子^{はしご}が飛び廻りました。ヒューと石が飛んで来ました。

「危ねえ！」

お手の物で米友は、その石を発止^{はっし}と受け止めました。

「竹竿で足を打払^{ぶっぱら}え」

折助は物干竿^{ものほしざお}を幾本も担ぎ出しました。跛足^{びっこ}になつた米友は、

その危ない屋根の上をなんの苦もなく走ります。市五郎の宅から大部屋の屋根の上を鼯いたちの走るように走って、武家屋敷の屋根へ飛び移りました。

折助は、いよいよ噪さわぎました。梯子と竹竿とが盛んに担ぎ出されます。今や噪ぐのは折助ばかりでなく、武家屋敷の者共が、みんな家々から飛び出して噪ぎました。担ぎ出されたのは梯子と竹竿ばかりでなく、水弾みずはじきや、槍、長刀ながなたまで担ぎ出されるという有様です。米友はよく屋根の上を走りました。或る時はこれ見よがしに直立して走りました。或る時はそつと身を沈めて走りました。

「ばかにしてやがら、手前たちをこつちは相手にしねえんだぞ、相手にするほどのやつらでねえからそれで相手にしねえんだぞ、俺らが逃げりゃあいい気になって追蒐おっかけて来る手前たちの馬鹿

さ加減の底が知れねえや」

こう言つて米友が立ち止まつて息を切つた。屋根の上から下を見ると、家やなみ並はそこで尽きて足許は二の廓の堀の水。屋根から垣へ足をかけた米友の姿は、これもどこかの闇へ消えてしまひました。

四

何事か起るべく思われて何事も起らなかつたのが、その夜の市五郎と、お銀様と、お君との一行でありました。

市五郎の挙動から推せば、この二人をどこへつれて行つて、どんな目に遭わせることかと思われたのに、案外にも、極めて素直すなおに駕籠に付添うて有野村へ入つてしまいました。

有野村へ入つて、お銀様の屋敷へ送り込んでしまいました。これでは尋常の上の平凡であります。

お銀様とお君とがその屋敷へ送り届けられた前後には、もちろん伊太夫の家は鼎かなえの沸くような騒ぎであります。前に幸内ゆくえの行方が今以て知れないところへ、今またお銀様とお君との行方が知れなくなつたということは、伊太夫はじめ、この大尽だいじんの家の一家と出入りの者を驚かせずにはおきません。

お銀様もお君も、出る時は誰にも断わらないで出て行きました。ほどなく帰るつもりでしたから黙つて行きました。お君は誰にか一言言ひとことい置いて出ようと言つたのを、お銀様が無下むげに斥しりぞけてしまいました。それだから屋敷では誰あつて、二人がいつごろ、どこへ行つたかを知るものはありません。召使の女のうちに、お銀様とお君さんとお対つひの着物を着て紫の頭巾を被つ

て、裏の林の中を脱けておいでなすつたのを見たというものがあつたというぐらいのものであります。

なかにはお君がお銀様をそそのか嗾して、一緒にかけおち駈落をしたのではないかと言っているものもありました。君ちゃんはそのんな子ではない、お嬢様があの通りの気むずかし屋だから、無理にお君さんを引きつれてお出かけになつたのだと弁護するものもありました。

人が諸方へ飛びました。そうして甲府の市中へ入つたということがわかり、甲府の市中へ入つて八幡様へ参詣をしたということもわかり、そこでお御籤をみくじ取つたということもわかりました。それまではわかつたけれども、それから後が更にわかりません。ところがその八幡様でもまた一つの騒ぎがありました。それは油あぶら注ぎの男が、油買いに出たまま帰つて来ないということこ

とであります。

それやこれやで、尋ねに行つた人は途方に暮れ、馬大尽の家の混乱はいや増しに増してきました。

そこへ役割の市五郎が、悠々として両人の駕籠を送り込んだのでありましたから、市五郎がここでもどうしても器量を上げないわけにはゆきません。実際、市五郎はこの時、馬大尽の一家一門の者からも、村中の者からも、神仏のように思われてしまいました。市五郎の身体から後光ごしょうがさすように見えてしまいました。

下へも置かないもてなしというのはこのことであります。これにお銀様が悪い折助にからかわれていらつしやるところを、この親方が通りかかつて助けて下さつたという物語りは、市五郎を武勇伝の主人公のように、村の人から崇拜させることになつ

てしまいました。

市五郎は、自分の手柄を自分からはあんまり語りませんでした。馬大尽うまだいじんの一家一門の人が、さまざまに待遇もてなすのを強たつて辞退して帰ることにしました。ぜひに一泊をすすめるのを断わつて帰る時分には、市五郎の駕籠が提灯で隠れるほどに見送りがついて参りました。

その翌日は釣台が幾台も市五郎の宅まで運ばれ、羽織袴で親類や総代が、市いちの立つたほどにお礼を述べに来ました。

市五郎はこうして馬大尽の家から感謝を受け、それから同家へしばしば出入りをするようになりました。そうして主人の伊太夫と親しくなりました。伊太夫は市五郎を信用し、市五郎はよく伊太夫の意を迎えることができました。

市五郎がその後、しばしば伊太夫の許へ出入りする間に、伊

太夫に向つて一つの内談ないだんを持ち込みました。内々で伊太夫が何
というか、それを聞いてみたいような口吻くちぶりであります。

それは意外にも縁談のことであります。

「お嬢様もお年頃でございますから」

と言ひ出した時に、さすがに伊太夫は苦にがい面かおをしました。

その苦い面を見て、市五郎も話しにくいのを強しいて一通り話
してしまふと、伊太夫の苦い面が少しく釈とけかかつてきました。

「お組頭で神尾主膳殿……」

と言つて腕組みをしました。伊太夫の顔色やわらが和やわらいだのを見て、
市五郎はその目をそらさぬように、

「もとはお旗本のお歴々でございます、お使い過ぎでこちらへ
おいでになつたくらいでございますから、苦勞人くらうじんでございます、
人間さばが捌さばけておいでなさいます、物の酸すいも甘あまいもよくわかっ

ておいでなさるお方でございます、もう御当家のこともお嬢様のことも万々御承知の上で……」

ばんばん
なこうどぐち

と言つて媒人口らしい口を利きました。さてはこの男の縁談というのは神尾主膳へ、この家の娘のお銀様を縁づけようという取持ちであることに疑いもない——人もあろうに神尾主膳へ、そして女もあろうにお銀様を——市五郎の内心は計りがたないものであります。しかしながら市五郎の口前は極めて上手であります。神尾主膳の人柄を、伊太夫の心へ最もよくうつるように言葉を尽して、ひなた蔭と日向から説きかけました。そうして苦勞ごきりようご人の神尾様は決して御縹緲好みをなさるようなお方でなく、お嬢様があんな不仕合せでおいでになつても、それがために愛情を落すようなお方でないということ、かえつてお嬢様のお身の上を蔭ながら同情をしているというようなことを言葉巧みに説

きました。その上に当地の有力者であるこの藤原家と縁を結ぶことが、神尾のためには有力なる後援であり、お嬢様のために生涯の幸福であり、且つまた若い神尾主膳はやがて甲府詰から出世をなさる人に疑いのないことなども話かけました。市五郎のこのごろの信用の上に、その口前によつて伊太夫の心がだんだん動いて来るのが眼に見えるようであります。

市五郎がこの縁談のことを話して辞して歸つた後で、伊太夫は一人でやはり腕を組んで考えていました。もとは何千石のお旗本、今は甲府勤番の組頭、それにあの娘が貰われて行くことは、家にとって釣合わぬことではないと思いました。しかしながら、あの娘———と思ひ出すと、さすがの伊太夫も自分ながら氣落ちがしてなりません。お旗本どころではない、どんな人でもあの娘を貰つて、生涯の面倒を見てくれる人があるなら大恩

人だと、日頃から思わせられないことではありません。娘もよくそれを吞込んで、つまらぬ男に侍くかしずよりは、いつそ独身で通す覚悟をきめているのを見て、親としての伊太夫が、不憫ふびんに思わぬということもありません。

伊太夫は、なお暫く考えた後に女を呼んで、

「お銀にここへ来るように」

と言つて、

「あれが何と言うか、あれのことだからウンとは言ふまい、たとえ少しは気があつても、はいと返事をするような女ではないけれども、もし承知したら……あれが承知をしたら、わしの方にも異存はないのだが、しかし、それがほんとうに当人のために仕合せかなあ。あれはああしておいた方が仕合せであるかも知れない。まあまありようけん了見を聞いてみての上で」

伊太夫はこんな独言ひとりごとを言つて考えながら、お銀様の来るのを待っていました。

父の許へ呼ばれたお銀様は、やがて自分の部屋へ歸つて来ました。

お銀様は、父から言い出されたことをだまつて聞いて歸りました。父が言い出したことというのは、神尾主膳への縁談の一件でありました。お銀様はそれを聞いてなんとも返事をしませんでした。

嘘うそにも縁談のことは若い人の血汐ちしおを躍おどらせねばならぬもので

あります。けれどもお銀様にあつては必ずしもそうでありません。お銀様がだまつて父の許おのから己が部屋へ歸つたのは、その

ことの恥かしさから返事ができないで歸つたものではありません。

いつも怒気を含んだようなお銀様の面かおが、一層の怒気で曇つ

て見えました。父のものやわらかな話半ばで、ついと立つて挨拶もなく立ちかえったその畳ざわりは荒いものでありました。父の伊太夫は、

「ははあ、また失策しくじった」

というような面をして、立つて行く娘の後ろ姿を空むなしく見送っているばかりであります。

お銀様が縁談を嫌うのは今に始まったことではありません。そのことを言い出されるのさえ、毒虫に触れることのようにいやがりました。お銀様は自分の身にかかる縁談のことを聞くのをいやがるばかりでなく、人の縁談のことを聞くのさえいやがりました。その話を聞くと、ジリジリと焦じれてゆくのが目に見えるのであります。それだからお銀様の前で縁談を言うものはありません。お君も近ごろ来て、その呼吸をよく吞込んでおり

ました。父の伊太夫ももとよりそのことを知っていたけれども、市五郎の口前を信ずるの余りに、つい口に出してしまつて、また娘の御機嫌を損ねたことに気がついて、氣まずい思いをして空しく見送るばかりでありました。

お銀様は縁談を持ち込まれることを、自分が侮辱されたように口惜しがります。それと共に自分に縁談を申し込んで来る男を、あくまで蔑むのであります。自分に縁談を申し込んで来るような男は、男のなかのいちばん意気地なしで恥知らずで、あるものは慾ばかりで人格も趣味もあつたものではない、男のなかの屑だと、口に出してまでそう言うことがあります。くだら

今、神尾主膳のことを聞いても、まずその蔑みで頭を占領されてしまつて、これから父が説き出そうとすることを、受入れ

る余裕はありませんでした。

お銀様は凄^{すご}い面をして自分の部屋へ帰って来て、

「お君、お君、お君や」

続けざまに呼んで、自分の部屋を素通りして、お君の部屋へ
駈込みました。

お気に入りのお君には、お銀様と同じような部屋が与えられて
ありました。このごろのお銀様は、居間から衣裳から、室内
の飾り、すべてのものをお君と同じようにしなければ納まらな
いのであります。お銀様はこうしてお君の部屋へ駈込んだけれ
ど、どこへ行つたかそこにお君の姿が見えません。机の上にお
銀様の好きな寒椿^{かんづばき}が一輪、留守居顔にさされてあるばかりです。
「どこへ行つたのだえ」

お銀様は、お君の坐るべき蒲団の上に坐つて机に向いました。

その一輪挿しの寒椿を取つておもちゃにしようとした時に、机の上に見慣れないものが載せてあるのを見ました。お銀様は一輪挿しの寒椿の方はさしおいて、その見慣れないものを手に取りました。

「まあ、これは珍らしいもの」

と言つて、つくづく眼を注いだのは一枚の写真そそでありました。

その写真は、先日お君が駒井能登守からいただいた来た、何よりも大切にしている二人立ちの写真なのであります。

最初はただ物珍らしげに取り上げたお銀様が、それをつくづくと見ているうちに、体がワナワナ震えてきました。眼がキラキラと光つてきました。

「アア、口惜しいッ」

鬼女きじよが炎をふくように言い捨てました。

その写真には前に言つた通り、二人の人が写されているのであります。

その一人はお銀様もよく知っている駒井能登守の像すがたでありました。それと並んだ一人は女の像でありました。

「いつのまに、こんなことに……ああそうだ、この間、お城の前で、わたしを待たせている間に、わたしは、あんな恥かしい目に遭っている時に、お君は城の中でこんなにしていたのか。それとは知らなかった」

お銀様は、その女の方の像を見ながら齒を咬鳴かみならしました。

「この若い御支配の殿様と、あの奥方かんざし気取りで……憎らしいッ」
お銀様は頭を自棄やけに振って、銀の簪かんざしを机の上へ振り落しました。振り落したその簪をグイと掴んで、呪いの息を写真おもての面に吹きかけました。

お銀様の呪いの的まととなつてゐる写真の中の女の像、それはうちかけすがたうちかけすがたの氣高い奥方でありました。美男の聞えある能登守と並んだこの氣高くて美しい奥方。お銀にとつてそれは、骨を削つてやりたいほどに呪わしいものでなければなりません。

ことに、あのお濠ほりの外で、折助どもからあんな無礼な仕打をされている時に、城の中で二人にこんなことをされては……それが口惜しくて、嫉ねたましくて、腹立たしくて、呪わしくて、お銀様の銀の簪持った手がワナワナと慄ふるえて慄えてたまりません。

お銀様はその写真を左の手で持ち直して、右の手で銀の簪を取り直して、

「エエ、覚えておいで」

と言つてズブリ——その女の像すがたの面をめがけてつきとおそうとしました。

「お嬢様、まあ何をなさいます」

あわてて入って来たお君は飛びついて、銀の簪を持ったお銀様の手をしかと抑えました。

「お放しなさい」

お銀様はお君の抑えた手を振り切つて、なおもその写真につきとおそうとするのであります。

「このお写真は、大切のお写真でございます、お嬢様、そんなことをあそばしては」

「それはお前には、お前には大切なお写真であらうけれども……」
「このお写真に間違いがあつては、私が殿様に申しわけがありません」
「ませぬ」

「そりや、そうだろう、お前は殿様に申しわけがあるまいけれど、わたしはばかにされたのが口借しい！」

「何をおつしやいますお嬢様、そのお写真ばかりはどうしても御自由におさせ申すことはできません」

お君は日頃に似にげ気なく争いました。お銀様はほとんど狂氣の体ていで写真を遣やらじとしました。一枚の写真を争う両人ふたりは、ほとんど他目よそめからは組打ちをしているほどの烈しきで揉み合いました。

そうしてお君は、やつとお嬢様の手からその写真を取り上げて、太息といきを吐つきながら、

「お嬢様、こんな乱暴をあそびしますなら、もうもう、わたしはお嬢様のお側にいるのはいやでございます、今日限りお暇をいただきまする」

「ああ、それがよい、わたしも、もうお前がいなくてもよい、お前はその可愛い殿様のところへおいで、わたしもお嫁に行くと

ころがあるのだから、ええ、わたしはお嫁に行くようにきめてしまつたのだから」

お銀様がこう言つてその両眼から留度とめどもなく涙を落した時に、お君は何と言つてよいか解らない心持になりました。

いつもならば何でもないことでしたらうけれど、その時はそれで、二人のなかが割さかれてしまいました。お君が、もうお嬢様のお傍にいないと言つたのは一時の激した言い分のようにあつたが、実は本心からその氣で言つたのであります。

お銀様が、自分もお嫁に行くところがあると言つたのは、どういうつもりだかお君にはわかりませんでした。

しかし、その場は氣まづくなつて、今までになかつた張合あやまいの心持がおたがいに募つつたけれど、すぐにあとでお君が謝罪あやまりました。お銀様もうちとけました。

謝罪つたあとで、お君は改めてお銀様にお暇乞いを申し出でました。お銀様は冷やかに、それでも快くお君の暇乞いを承知しました。それにお銀様はお君に対して、身の廻りのものやらお金などを多分に分けてやりました。お君はそれを有難く思つて、なんとなくこのお嬢様の傍を離れたくない心持もしましたけれど、自分の行く先のことを考えれば、その心持も忽ち消えてしまうのであります。

お君がこのお嬢様の許を辞して行こうとする先は問うまでもなく、それは駒井能登守のお邸であります。

主人やお銀様からいろいろの下され物をお伴ともの男に馬につけてもらつて、お君は愛するムク犬と共に藤原家を離れました。みんな機嫌よくお君を送ってくれました。

有野村から甲府まで行く間に、お君は一足毎に春の野原へ

近づいて行く心持でありました。駒井の殿様のお情けというものが嬉しくて、心が溶とけてゆくばかりでありました。それでも釜かまなしが無河原へ来た時分に振返つて有野村を見ますと、小高い丘の下に一面に黒くなつた森、そこが今まで世話になつていた馬大尽の藤原の家の構えだと知つた時に、なんとなく四辺あたりの光景が物悲しくなりました。

幸内に助けられてあの家へ厄介になつたかり、その縁が、思ひ出にならないということはありません。その幸内は行衛ゆくえが知れないし、それよりもひとり残つたお嬢様が、「わたしもお嫁に行く」と言つた一言は今でもお君にとって、何の意味だかよくわからないのであります。

いったいにお銀様の心持というものは、お君にはよくわかりませんでした。駒井様で所望する自分の身の上をお銀様が途中

で、水を注^さそうとするような仕打がわかりません。そうかと思えば、そのお暇乞いをした時に冷やかではあつたけれど、不快な色を見せないで承知をして下すつたこともわかりません。

自分をすすめて御城内の殿様のところへやりながら、その殿様のお写真に向つて、あんなことをなさるお嬢様の気心はなおさらにわかりませんでした。

いろいろと、わからないことはありましたけれども結局、お君はお銀様の同情者でありました。お銀様がああして焦^じれておいでなさる心持も、お君には我^{わがまま}儘だとばかりは思われませんでした。お銀様と幸内との間は知らないけれど、幸内がいなくなつてお銀様が一層焦れ出したことは、側について手に取るようにわかるのであります。その後お銀様がお君を愛するため、怖ろしいような挙動をなさることも度々ありました。今や

そのわたしもお側を離れてしまう。お銀様はお一人。どうかこの上ともお仕合せにお暮しなさるようにと、お君は目に涙を持つて、心のうちに祈りました。

五

神尾主膳の邸ではこの頃普請ふしんが始まりました、建増しをしたり、手入れをしたりするために、大工や左官が幾人も入りました。

表の方では鑿のみや鉋かんの音で景気がいいし、奥の方は奥の方でまた、箆たんす筒、長持、葛籠つづらの類を引き出して女中たちが、虫干しでもするような騒ぎであります。

正月が近いから、それで御普請をなさるのだらうと表の方で

は言っていましたけれど、奥の方はそれだけでは納まりません。

「近いうちにお慶めでたいことがおありなさるんですとさ」

早くも女中たちの口から、こんな噂うわさが立ってしまいました。

その女中たちの中にはお松がいました。お松は今、箆へら笥しから掛物の一幅を取り出して塵ちりを掃はらっていました。

「お慶めでたいこととはどなた」

「お松様はまだ御存じないの」

と言つて、ほかの女中たちは面を見合せました。

「いいえ、存じません」

「そのお慶めでたいことで、あんなに御普請が始まつたり、こちらではまた御宝物のお風入れがあつたりするのでありませんか」
女中たちはお松の迂闊うかつを笑うような言いぶりです。

「それでも、わたくしは存じませんもの」

「それはね」

「はい」

「つい、この近いところよ」

「近いところとは……」

「近いと言つてもこの甲府に近いところ、それはこれから三里ばかり離れた有野村というところの大金持のお家から、近いうちには殿様へお興こしい入れがあるんですとき」

「それは結構でございますねえ」

お松は手に持つていた掛物の塵を掃つてその紐を解きました。なにげなくあけて見ると、それは山水でも花鳥でもなく、一枚の絵図面を仕立てた横幅よこぶくでありました。

神尾主膳の家に慶めでたいことがあるといつても、それはお松が知つたことではありません。

けれども、このたびの慶事の噂が、お松の耳にはあまりに突飛とつびに聞えたものですから、多少考えさせられないわけにはゆきませんでした。

今まで放蕩無頼に身を持ち崩して、いったん持った奥方を去つたという主膳が、今になって女房を迎えようとする心持がお松にはわかりませんでした。それから、この殿様を夫に持とうという女はどういう人であろうか、その人の気も知れないように思いました。

慶めでたいことだから祝わねばならぬけれども、お松の常識で考すえたのえては、この結婚がどうも末頼もしくは思われません。どうしても一時の権略のための結婚であると思われないのであります。

どうしても、お気の毒なのは、こちらへ貫われて来る嫁御寮よめごりょう

だと思わないわけにはゆきません。

このお屋敷の殿様が、どうい^うお方であるかまるきり知らずに、ただお殿様という名前に惚^ほれて、可愛い娘を手放す親御たちをもお気の毒と思わないわけにはゆきません。

人の慶^{めで}たいことを呪うような心を起すのは浅ましいとは知りながら、お松はこの慶たい噂を慶たからず思いました。

それはそれとして、お松がいま持つて出た掛物は甲府のお城の絵図面であります。今日、宝物の風入れに、お松はそれとな^{あまた}くこの絵図を心がけていました。塵を掃っている数多の書物や掛物のなかにはそれがあるだろうと思っていました^が、幸いにそれを見つけました。

仕事^が済んでから、お松はその絵図を持つて自分の部屋へ帰りました。部屋へ帰ってそれを拡げて、つくづくとながめてい

ました。

お松のながめている絵図には、甲府城を真中にして、その廓くるわの内外の武家屋敷や陣屋、役宅などが細かに引いてありました。

お松の眼はお城の濠に沿うて東の方の一角をじつと見ていました。ほかのところはさしおいて、その一角ばかりを見つめていました。お松の見つめている一角というのは、お濠を隔ててお城と、お代官の陣屋との間に挟まれたところで、そこには罪人を囚とらえる牢屋があるのであります。聞いてもいやな感じのする牢屋、お松はそれを見たいばかりに、わざわざこの絵図をそつと持ち帰ったのであります。牢屋を見たがるお松は、牢屋の中に見たいと思う人があるからであります。

その人のために、お松はどのくらい心を痛めているか知れません。お絹を通したり、自分で遠廻しに頼んだりして神尾に縫すが

りました。ここへ来る道中では駒井能登守にさえも訴えてみました。

けれども、その証拠が歴然たる上に、御金蔵破りのことが重いので、ともかくも本当の犯人が挙げた上でなければ、冤罪えんざいが晴れまいということを聞かされて、お松の失望落胆は言うべくありません。

せめて牢屋の模様でも知っておきたいと、お松はその道筋を幾度か指で引いてみました。けれどもそれは徒事いたずらごとで、お松の力でどうしようというのではありません。自分の力でどうしようというわけにはゆかないものであると知りながら、お松は人の力の恃たのみにならないことをもどかしがって思案に暮れました。

ここは神尾の本邸とは別に一棟をなしているところの別宅であります。その一間に、お絹は取澄まして一人の男のお客を前

に置いて話をしました。

お絹の前に坐っている男の客というのは役割の市五郎です。

「御別家様、まず以て滞りなく運びましてお慶めでとう存じまする。
ごゆいのう

御結納はこの暮のうちに日を択えらんでお取交とりかわしなさいますように。

お婚礼は来春になりまして花々しく」

市五郎が言葉を恭うやうやしくこう言いますと、お絹も喜ばしそうに、

「お前さんの橋渡しで都合がよく運びました、これでわたしも
ワザワザ甲府へ来た甲斐かいがあると申すもの、主膳殿もこれから
身持ちが改まって出世をすることでしょう、三方四方慶めでたいこ
と」

と言つてお絹は市五郎の労をねぎらいました。市五郎は額ひたいを叩
いて、

「まことにハヤ慶たいことで。なにしろ、先方が聞えた旧弊の

家柄でございますのに、当人がまたばかに気むずかしいものでございますから、どうなることかと心配しておりましたが、幸いなことに、その当人が乗気になりました、それで話がズンズンと進んで参りました……しかし御別家様」

市五郎が吞込んで話しているのは、例の縁談の一件であります。

「御別家様」

市五郎はお絹を呼ぶのに御別家様の名を以てして、

「お媒^{なこうど}灼人はどなた様にお頼みあそばしますおつもりでござい
ますな」

「それは……あの御支配のお二方のうち、筑前様と能登様とい
ずれかにお頼み致すよりほかはなかりうと思っております。
また別に組頭や奉行衆のうちにしかるべきお方があれば、その

方へお頼みすることにしてもかまいませんぬ」

「左様でございますな、お組頭やお奉行衆のうちで……それも結構でございますが、御当家様のお媒妁としては、やはり御支配様をお頼みになるのが順当でございますよう。その御支配様と申しまして、能登様は御新任の上に、お年もお若いし、それに奥方様をお連れになりませぬ故、やはりお年と申しお二方のお揃いと申し、筑前様をお頼みあそばすが至極よろしいことのように存じまする」

「わたしもそう思いまする。それに主膳殿は能登様とは合いませんぬ」

「左様……」

「もとは同じぐらいの格式の旗本、それで同じところへ勤めてみると、若い同士でどうもきまず氣拙くなつて困ります」

「けれども能登様へも、一応のお話は申し上げませんと」

「それは筑前様の方を、よくよくお頼み申しておいて、お話をきめた上で能登様へは一通りの御挨拶だけにしておきたいと、主膳殿も申しておりました」

「左様でございますな……あれで能登様もなかなか肯かぬところがおありなさるから、万一、この縁談に……そんなこともございまずまいが、能登様から故障が出るようなことがございすると……」

「それだから、最初に筑前様の方を纏めておけばよいではありませぬか。その筑前様へのお使は、わたしが行つて、きつと纏めて参りましょう」

「左様ならば大丈夫でございます、御別家様から懇ろにお頼みになりますならば、大丈夫でございます」

市五郎はそこへ仰山^{ぎょうさん}らしく保証をおいて、お暇乞いをして帰ろうとすると、

「まあ、よいではないか、前祝いに何か差上げたいもの……お松や、お松はおらぬかいな」

お絹は市五郎を引留めてお松の名を呼びました。

お絹から呼ばれてお松はその席へ出ますと、

「こつちへお入り」

お松はしとやかに座敷の中に入りました。

そこでお絹はお松を市五郎に引合わせる、市五郎は遽^{にわ}かに膝を揃えて座を下り、

「これはこれは初めまして、わたくしが市五郎めにござりまする、どうぞお見知り置かれて」

と非常に低く頭を下げましたから、お松はそれに準じて丁寧に

挨拶をし、

「行届かぬものでござりまする、なにぶんよろしく……」

と両手を揃えて言いました。

近づきが終つてから市五郎は卑下^{ひげ}と自慢とをこき交せて、自分がこの土地に長くいることだの、折助や人足、それらの間における自分の勢力が大したものであること、御支配をはじめ重役の間にて自分の信用が多大であるということ、そんなことを、それとなく言っているが、お松には聞き苦しいほどであるのに、お絹は上機嫌で、

「お松や、お政治向きのことは別にして、そのほかのことならこの人が何でも心得ているから、お前、何か頼みたいことがあるなら、遠慮なくこの人に片肌脱いでおもらい」

とまで言いました。

お松が自分の部屋へ帰った後も市五郎は、お絹の許を辞して
帰る模様がありませんでした。しばらくたつと、その座敷が陽
気になつて、盃のやりとりになで進んでいったようであります。
根岸へ引籠つた時分には一層慕わしく思われたお師匠様が甲府
へ来ると、またがらりと変つたように思われるのがお松には浅
ましい。誰とでも容易く懇意になつてしまつて、ああして気を
許すお師匠様の挙動がお松には歎かわしい。

六

甲府の牢屋は甲府城の東に方あたつてお濠と境町の通りを隔てて
相對し、三方はお組屋敷で囲まれている。そのお組屋敷の東は
御代官の陣屋になつていたのであります。

宇津木兵馬の囚とらわれているのは、その牢屋の中の一番室で、それは六畳敷でありました。その六畳の中には兵馬と、そのほかに一人の奇異なる武士が囚とらわれています。

この室の中の南と北は格子であります。東と西は羽目はめであります。

宇津木兵馬はその羽目の方の一隅に寝ています。もう夜が更けているから牢の中は真暗であります。兵馬は寝入っている様子だけれども、同室のもう一人の奇異なる武士は、まだ起きていて暗い中で何をかしているようです。

その武士は三十前後の歳で、総髪にして髪を結んで後ろへ下げています。

「うーん」

というて苦しげに呻うなるのは寝ている宇津木兵馬の声で、それと

同時に寝返りを打とうとするらしい。

「宇津木、苦しいか」

奇異なる武士は声をひそめてこう言いますと、

「いや、別に」

と兵馬は、これも、ひそかに答えました。けれどもその返事は、苦しさを耐^{こら}えている返事です。

「もう一服、飲んでみるか」

と言って奇異なる武士が、兵馬の枕許まで来て、蒲団^{ふとん}の下を探ります。

「うーん」

と兵馬はまた苦しげに呻りました。

蒲団の下から一包の紙、それは薬と覚^{おぼ}しいのを取り出して、奇異なる武士が兵馬の口許へ持つて来ました。

「まだ熱が高いな」

片手では薬の包を持ち、片手では兵馬の額を押えました。

兵馬は寝ていながら、口を開いてその紙包から薬を飲みました。

「ソレ水」

枕許の碗を取って水を兵馬に飲ませました。兵馬は少しばかり起き直って、コクリコクリとその水を飲みました。

「気をつけて寝ておれ」

奇異なる武士は、じつと兵馬の面を見つめています。かお

火の気のない牢屋の中の夜のことであるから、尋常ならば、なにもかも見えないのであろうけれど、この奇異なる武士は暗い中でも、よく物が見えるようであります。

兵馬もまた相当に暗い中で物が見えるようです。暗い牢の中

に居つけたために、おのずから眼がそういうふう慣らされたものでしょう。

兵馬が寝ついたのを見て奇異なる武士は、また以前の座へ立戻り、何をしているのかと思えば、紙を裂いて、しきりに紙撚こよりをこしらえているのであります。

自分の蒲団は兵馬に着せてしまっているから、この武士の横たわるべきものはありません。半畳ほどの汚紙をしいてその上で、紙撚をこしらえて、眠いということを知らないもののようなのです。

何十本かの紙撚をこしらえてしまうと、そこにはもはや紙撚にすべき紙がありません。その時この人の座右ざうの書冊、それは「安政三十二家絶句」というのを手に取ると、その中の紙をメリメリと引き破り、幾枚か引き破つてそれをまた細かにし、細か

にしてまた紙撚をこしらえはじめたのであります。

この人がこうして一心不乱に紙撚をこしらえていると、この室の一隅、兵馬の寝ている隅とは違つたところの羽目板が、微かな音でトントンと二つばかり鳴りました。

羽目をトントンと叩いた音は、到底そのつもりでいなければ聞けないほどの微かな音でありました。けれども、紙撚をこしらえていた奇異なる武士は直ぐにそれを聞きつけて、坐つたま耳をその羽目の合せ目の透間すきまへ着けてしまいました。

「まだ起きてか」

これが次の室から聞えた小さな声でありました。

「起きてる、起きて一生懸命に内職じゃ」

こつちの奇異なる武士は、そう答えてニヤリと笑いました。

「そうか、病人はどうじゃ」

「熱は高いけれど、生命いのちにかかわることはあるまい」

「大事にするがよい」

「せっかく養生中じや」

「それからな、今日は重大な音信たよりを聞いたから、知らせる」

「左様か」

「今日は、おれの方に一人の新参しんまいがあつた、それは、贖金にせがねづか遣いとやらの罪で、この牢へ送られた男だが、その男から聞いた話だ」

「なるほど」

「長州では、いよいよ三人の家老を斬つて、幕府にお詫わびをする事になつたげな」

「ナニナニ、長州で三人の家老を斬つて幕府へお詫まことびをすると？ そりや夢のような話だ、真実まこととは聞かれぬ」

「どうも、拙者においても信じきれぬのだが、その男の言うこ

とを聞いてみればマンザラ嘘うそとは思われぬ、まあ聞いてくれ、
こういうわけじゃ。長州藩では去年の八月、入京を禁ぜられて
から、その許しを願うことと、それから例の七卿の復任を許さ
れたいということ、さまざまに建言をするけれど更に御採用
がない、この上は兵力を以て京都へ推参して手詰てづめの歎願をする
ほかはないと、久坂玄瑞くさかげんずい、来島又兵衛、入江九一の面々が巨魁きょかい
で、国老の福原越後を押立てて、およそ四百人の総勢で周防すおうの
三田尻から、京都へ向つて出帆したというものだ」

「うむ、うむ」

「そのほかに、久留米の神主で、あの慷慨家こうがいの真木和泉まきいずみが加わ
る、それから中山卿のお附であつた池、枚岡ひらおか、大沢の三人――
中山卿は長州で亡なくなられたそうじゃ。大和の十津川から浪華なにわ
を経て、長州へおいでになつたが、そこで亡くなられたという

ことじゃ。まだ十九か二十のお歳であろうに、お痛わしいことな」

「そうか、中山侍従は長州で亡くなられたか」

「御病気で亡くなられたか、または不慮の御災難であつたか、その辺は更にわからぬ。してその中山卿のお附であつた池、枚岡、大沢の三人も加わつてよ、浪華へ着くと、同藩の仲間や諸藩の脱走が走せ^は加わつたから、兵を二手に分け、一手は船で山崎から、一手は陸を伏見へのぼつて行つた。何しろ兵器を携え^{たずさ}、旗を立て、隊伍を乱さず上つて行くのだから、京都も騒がずにはいられないのじゃ」

「なるほど、なるほど」

「それにまた国司信濃や益田右衛門介らが鎮撫^{ちんぷ}を名として馳^はせ加わつて、とうとう御所へ押しかけてしまった、そこで会津、

一橋、薩州の兵を相手に、かしこ 畏くも宮闕きゆうけつの下を戦乱の巷ちまたにしてしまつた」

「うむ、うむ」

「しかし、さすが命知らずの長兵も諸藩の矢に攻められて、来島又兵衛は討死する、久坂玄瑞も討死する、福原、国司、益田の三家老は齒嚙みをしつつ本国へ引上げるということになつて、その後が長州征伐の結末は、毛利公の恭順と、例のその三家老の首を斬つて謝罪するということで納まつたそうじゃ」

へいだんぞくご これらの話し声は、極めて小さい声で行われましたけれども、平談俗語の通り、尋常に聞き且つ答えることができました。

話をしている間も、見廻りの来る心配はありません。こここの牢番もよく見廻りをするよりも、よく眠りたい方です。

「ははあ、それは一大事じゃ」

と言つて、こちらの奇異なる武士は考え込みました。

「これで長州も寂滅じやくめつ」

えたいの知れない話し相手も、絶望したような声で言いました。

「いやいや、そう容易たやすくはいくまいよ」

こちらの奇異なる武士は、存外、平気で答えました。

「どうして」

「長州の中にも、二派あるはずじゃ」

「左様」

「そうして幕府に恐れ入つてしまうのもあるだろうが、なかなかそれで承知のできぬ奴もあるはずじゃ」

「左様」

「例の高杉晋作しんさくがこしらえた奇兵隊というのが、あの辺の

ところが黙つて引込んではいまいよ」

「なるほど」

「君は高杉を知っているか」

「知らん」

ろうぶつ

「老物は知らん、若手では、あれが第一の男よ。あれのこしらえた奇兵隊というのは、他藩には、ちよつと類のないものじゃ」

「うむ、うむ」

さきには向うが話の主でこつちが聞き手でありましたが、今度はこつちが話し手で、向うが聞き手になりました。

「長州には奇兵隊があり、薩摩には西郷吉之助のようながある、長州が本気で立てば薩摩が黙っていない、薩摩と長州とが手を握れば天下の事知るべし」

「面白くなるのだな」

「それは面白くなるにきまつているけれど、おたがいに籠の鳥だ」

「南条——」

ここで両人の話が暫らく途切れしました。話が途切れると獄舎ひとやのうちは暗くありました。こちらの室では兵馬の寢息、あちらでは同じ室に、また幾人いるか知らん、鼾いびきの声を立てているのさえあるが、それをほかにしては、いよいよ静かなものであります。

こちらの奇異なる武士は、いよいよ近く羽目の透間すきまへ耳をつけた時に、

「南条——南条」

と向うから呼びましたが、

「手を出せ」

「うむ、うむ」

こちらの武士は、耳を着けていたところより一尺ばかり下の透間へ手を当てる^{やすり}と、その透間からスーッと抜き取ったのは、柄のない一挺の鑢やすりのようなものであります。

「これはどうしたのだ」

「今いう贗金遣い^{にせがねづか}という男が、そつとおれにくれたのだ、同じやつがまだ一挺ある、鋸のこぎりと鑿のみと小刀と三様に使える」

「エライものを手に入れたな」

「それこそ天の与え」

「有難い、有難い」

と言つて、こちらの奇異なる武士は、その鑢やすりを推戴おしいただきました。

この時に牢番の小使が咳をしました。もう大抵、話すべき要領は尽きたと見えて、それを機し会おに話は切れてしまいました。

牢屋の形式は嚴重でありましたけれど、中の見廻りはさほど嚴重なものではありません。

牢番の小使の老爺おやじに金をやって頼めば、大抵のものは調ととえてくれます、羽目の間から物のやりとりや、小さな声で話をする
ことなどは、ほとんど自由です。

宇津木兵馬は、ここへ囚とらわれて来る時に金を持って来ませんでしたけれども、その後、誰ともなく金を差入れてくれるものがある見え、その小づかいが二両三両と兵馬に手渡されます。それも五両差入れたものがあるとすれば、そのうち二三両ずつ、誰か頭を刎はねる者があるらしくありました。

誰が差入れてくれるのだから知らないけれど、兵馬はそれがために、大へんに便宜を得ました。望みの物を買ってもらふこともでき、同室の人に融通することもできました。多分、七兵衛

の仕業しわざでありましょう。

その兵馬は不幸にして、このごろ熱に冒おかされています。そうして枕が上らないでいるのを、例の同室の奇異なる武士が介抱していました。この奇異なる武士は、兵馬よりは先にこの室に入れられていました。それと同室して語っているうちに、兵馬はこの奇異なる武士の奇なることを感ぜずにはいられません。

今日は少し快よかったから起きてみました。夜は早く床に就きましたが、よく眠れました。夜中になって、ふと妙な音が耳に入りましたから目を覚まして、音のする方を見て、我知らず身を起しました。兵馬は半身を起して、怪しげな音の耳ざわりになるところを見ると、同室の奇異なる武士が、格子によりかかつて仕事をしているのを認めました。

その奇異なる武士は、何かを以て、極めて小さな音を立てながら、牢の格子を切っているとししか見えません。言葉を換えて言えば、牢破りを企てくわだつつあるとししか見えません。

あまりのことに兵馬は、蒲団ふとんを蹴けつて、よろめく足を踏みしめて立ち上りました。

「南条殿」

兵馬はよろめきながら近寄つて、牢の格子を切っている奇異なる武士の手を押えました。

「宇津木、起きてはいかん」

奇異なる武士は、兵馬に押えられても、別段に驚きはしませんでした。

「南条殿、何をなさる、軽々しいことをなさるな」

兵馬はたしなめるように言いました。

「君の知ったことではない、身体に悪いから寝て居給え」

南条と呼ばれた奇異なる武士は兵馬の手を取って、牢の格子の角の隅をさぐらせました。兵馬はそこへ手を当ててみると、何かの刃物でズーツと横に筋が切り込まれてあります。その切込みはまだそんなに深くはありませんでしたけれど、退引のつびきならぬ破牢の極印ごくいんであることは確かであります。

「ああ、大胆なこと」

と言つて兵馬は嘆息しました。

「二番の室でも、これをやっている、成敗せいはいともに我々が引受けるから、まあまあ安心して寝て居給え」

奇異なる武士は騒ぐことなく、兵馬をなだめて、またも静かにその切込みへ刃物を入れました。その刃物というのは、前夜隣室の羽目の隙間から手に入れた鑢やすり様のようものであります。兵馬

は、その上にかれこれと言いませんでした。それは余人ならぬこの人が、かく決心して事をはじめた上は、いまさら自分が是非を論じても駄目だと思つたからであります。

「世が世ならばこんなことはしたくはないが、時勢を聞いてみると、どうしてもここに安んじてはいられぬのじゃ、ぶんてんしょう文天祥が天命に安んずるこそ丈夫の襟懷きんかいではあるが、盗人の屋尻やじりを切るような真似をせにやならぬのも時節。宇津木、君だからとて、そうそう正直に冤むじつの晴れるのを待つてもいられまい。上に名判官ある世には、獄屋ひとやのうちにも白日の照すことはあろうけれど、ここらあたりでそれを望むは、百年富士川の流れが澄むのを待つのと同じこと」

南条と呼ばれた奇異なる武士は、こう言いながら静かに、格子の角を引いているのであります。

兵馬はぜひなく寢床の方へ退きました。兵馬は蒲団を引被ひきかつぎながら、格子の角に引かれる鑪ちいの微ちいさな音を聞いていました。

兵馬は正直な心で、今まで待つていました。己おのれの疚やましいことさえなければ、泰然として待つているうちに、天は必ず己れを助くるものだと思しじていました。非法に囚こわれたけれど、自分自分は法を犯してそれを逃れようとはしませんでした。しかし今という今、その心に動揺が起らないわけにはゆきません。

七

駒井能登守は例の洋風に作つた一間に籠こもつて、このごろは役所へもあまり出勤せず、また訓練も暫らく他の者に任せておき

ました。

この一間に籠った能登守は、人を諸方に遣わして土を集めさせています。自分もまた、思い立ったように外へ出ては土を集めて来るのであります。

集めた土を分析ぶんせきしたり、また火にかけたりして験ためすことに、ほとんど寝食を忘れるくらいの熱心でありました。

能登守が預かつて、城内の調練場で扱こほうっている虎砲ポンドほう十二磅砲ポンドほうというようなのは、伊豆の江川の手で出来たものであります。伊豆の江川は能登守と同じく、高島四郎太夫を師とするものがあります。能登守は甲府へ赴任の最初から、ここへひとつ、江川と同じようなものを建てたいと思っていたのであります。それは自身で研究して自身で造り出した砲でなければ満足のできないほどに、能登守の砲術の愛好心は嵩こうじているのであります。

す。

江川太郎左衛門が伊豆のにらやま韮山に立てたのは有名なる反射炉であります。江川がその反射炉を立てる時に最も苦心したのは煉瓦れんがでありました。煉瓦を作る土でありました。当時、外国から取り寄せることのできないために、江川はまず煉瓦から焼いてかからねばなりませんでした。その高熱に耐える煉瓦を焼くべき、土から求めてかからなければなりませんでした。

江川はようやくにしてその土を、あまぎさん天城山の麓と韮山附近の山田山というところから探し出して、煉瓦を作りました。その煉瓦は立派なものでありました。今日の進歩した耐火煉瓦に劣らぬほどの煉瓦を、当時、独創的に作り出したものであります。耐火試験によつて、千七百度の高熱に耐えるということであります。千七百度の熱度は、白金の溶解度であります。

能登守は江川のその苦心を見もし聞きもしました。土を集めてそれを調べていることは、やはり同一の目的のためと見てよいのであります。その研究の間は誰人をもこの室に入れることを避けて、眠ることも、ほとんどこの椅子と卓子テーブルとに凭よつたのみでありました。疲れた時は夜となく、昼となく、うつらうつらと眠るのであります。覚めた時は書物と実物とを向うに首つ引きでありました。

今も疲れて能登守は、椅子に深く身体を埋めて眠っていました。その時に扉が静かにあいて、

「殿様」

扉の前に立っているのはお君でありました。

お君は、大名や旗本の家へ仕える女中のように拵こしらえています。お松とは年の頃合いは同じくらいでありましたけれど、お松は

肉附のよい、どこかに雄々しいところのある娘でありました。お松に比べると、お君はもういつそう色白で、きやしや纖細で、沈んだ美しさを持っていました。

「殿様」

と言つて、そつと扉をあけたお君は、椅子に凭よつてスヤスヤと眠っている能登守の姿を見て、にっこり嫣然として、音を立てないようにその傍へ近づいて行きました。

能登守はよく眠つていて、お君の入つて来たのに少しも気がつきません。お君は、能登守の椅子に近いところまで来て、主人の寝顔の前に立つていました。

この数日、主人の髪も乱れているし、それに寝おもてている面にも窺やうれが見えていました。心配そうに見ていたお君は、

「殿様」

やや大きい声でふたたび呼んだ時に、能登守は眼を覚まして、

「あ、お前か」

と言つて莞爾^{にっこり}として、敢^あえて咎^{とが}めることをしませんでした。お君が給仕としてこの室に入ることを許されている唯一の者であります。

「よく、お寝^よつておいであそばしました」

お君はこう言いました。

「あ、ついうとうとと寝入つてしまった」

能登守は椅子に埋めた身体を、少しばかり起そうとしました。

「あの、お客様でございますが」

とお君が言いました。

「客？」

能登守は小首を傾^{かし}げて、

「言うておいた通り、この仕事をはじめてからは、来客に会いたくない」

「強^たつてお目通りを致^{いた}したいと、そのお客様からのお願いでございます」

「それは誰じゃ」

「女の方でございます」

「女の……」

「はい、神尾主膳様の御別家のお方と申すことでございます」

「ははあ」

駒井能登守は、直ぐにそれと領^{うなず}くところのものがありました

が、

「どのような用向か知らん、わしは会いたくない、誰か会ってもらいたい」

会うことを多少迷惑めいわくがるようであります。

「それでも殿様に、直じかにお目通りを致さねば申し上げられないことなのだそうでございます。それがため、小島様も服部様も、わたしにお殿様へお取次ぎ申してみるように、お頼みでございました」

「はてな」

能登守は、その晴れやかな面おもてを少しく曇らせました。

「ともかく、あちらへお通し申しておくがよい、暫らくの間お待ち下さるようにお断わりをして」

「畏かしこまりました」

「それから、お前は、わしの羽織だけをここへ持って来てくれるように」

「畏まりました」

お君は旨^{むね}を受けてこの一間を出て行きました。能登守はその後で腕を組んで考え込んでいましたが、

「ははあ、そうじゃ、忘れていたわい、例の神尾が嫁を貰いたいということであろう、あの一件で例の婦人が出向いて来たものと見ゆるわい——筑前殿からも内談があつたのだが、あれは、まだ拙者には解^げせぬことがある故に、なんとも返事をせずにおいた。事実、神尾があゝの縁組みを本気でするか、それとも一時的策略か、その辺を、もう少し確めてみぬことには……」

駒井能登守は、こんなことを思いつきました。そうして独言^{ひとりごと}のように、

「しかし神尾は小人じゃ、まんいち拙者が故障を言えば、きつと拙者を恨むに違いない、恨まれるのは苦しくないが、何も知らぬ処^{おとめ}女が、悪い計略に落ちるようじゃと気の毒の至り」

こんなことを胸に問い答えている時に、お君が羽織を入れた黒塗りの箱を捧げて来ました。能登守が筒袖の羽織の紐を解くと、お君はその後ろに廻りました。それを黒の紋付の羽織と着替えさせて、お君はその筒袖の羽織を畳みかけました。

能登守は着替えた羽織の紐を結ぶと、お君は、
「殿様、あの、お髪が乱れておいであそばしまする」

と言いました。

「うむ、それもそうじゃ」

お君は、筒袖の羽織を畳んでいた手を休めて、鏡台を卓子テーブルの上に立てました。その鏡は隅の棚の上に置かれてあつた、これは洋式のものではなく、磨き上げた丸い鏡でありました。

お君はこうして能登守のために乱れた鬢びんの毛を撫でつけながら、その鏡にうつる殿様のお面かおを見ると、恥かしさで手先がふ

るえて、自分の面が火のようにほてるのに堪えられません。

駒井能登守は客間でお絹と対坐しております。

それは日本式の客間で、二人の間には桐の火桶が置いてありました。お絹は、いつぞやの甲州道中のお礼などを述べました。そうして後に、お絹が言い出したことは案の如く、神尾主膳のこのたびの縁談のことでありました。

「神尾も、ああして置きますと我儘わがままが募つつて困りまする、わたくしが参りましたのをよい折に、ぜひこの縁談だけは纏まとめて帰りたいのでございます。筑前様にも、このことを大へんおよろこび下さいました」

こういう話でありました。能登守はそれを聞いて、

「それは慶めでたいこととござる、左様な慶めでたいことを何しに拙者

において異議がござりました。して、先方のお家柄は？」
穏かにこう尋ねたのでありました。

「先方は、有野村の藤原の伊太夫の一の娘にござりまする」

「有野村の伊太夫の娘？」

「左様でござりまする」

「なるほど」

能登守は暫らく考えている風情ふぜいでありましたが、言葉をつい
で、

「あれは聞ゆる旧家でありましたな」

「仰せの通り、家柄では多分、この甲州に並ぶ者がなかうと
のことでござりまする」

お絹はやや誇りがおに答えました。

「その通り、伊太夫は拙者もよく存知の間柄、その家柄もよく

承っているが、その息女にはまだお目にかからぬ」

「常には、あまり人中へ出ることにさえ嫌うような娘でありましたが、このたびの縁談は、その本人が進みましたものでござりまする」

「それは何よりのこと。この縁談の仮親かりおやはどなたでござりまするな」

「仮親と仰せられまするのは？」

「神尾家と藤原家とは聊ちやうか家格に違いがござるようじゃ、藤原家の息女が神尾家へ御縁組み致すには、仮親をお立てなさるが順序と考えられるが」

「恐れながら、家格の違いと仰せでござりまするが、あの伊太夫が家は、御承知の通り、葛原親王かつらはらしんのういらいの家柄と申すことでござりまする、それに権現様以前より苗字帯刀みょうじたいとうは御免、国主大

名の系図にも劣らぬ家柄でござりまする故に、神尾家にとつて釣合わぬ格式とは存じませぬ」

お絹は、こう言つて能登守から、家格の相違ということを言われたのに弁解を試みました。

「いやいや、そのことではない。およそ旗本の家が縁組みをするには、同じ旗本のうちか、或いは大名の家よりするか、さもなき時はしかるべき仮親を立てるが定め、その辺は御承知でござりましたような」

「それは……」

と言つてお絹は、ややあわてました。

「まだそれまでには運んでおらぬのでござりまする……」

お絹が、それについてなお何かを弁明しようとする、その言葉の鼻を押えるように、能登守が、

「左様ならば取敢とりあえず、そのことをお取定とりきめあつてしかるべく存じまする」

と言つてしまいましたから、お絹は二の矢が次つげないようになりました。

「御親切のお心添えを有難く存じまする、よく主膳にも申し聞けました上で……」

お絹はこう言つて辞して帰るよりほかはありません。能登守の言い分は正当であるにしても、せつかく使者に來たお絹にその言い分が快い感じを与えることができませんでした。ましてやこれが神尾主膳の耳に伝わる時は、憎悪となり怨恨えんこんと變ずることは目に見えるのであります。

神尾主膳はその晩、一人で躑躅つづじヶ崎さきの古屋敷を訪ねました。酔っているもののように足許がふらふらしています。

「机氏、机氏」

いつも竜之助のいる屋敷へ、そのふらふらした足どりで入つて来たけれども、そこに竜之助がいませんでした。

「竜之助殿、どこへ行つた」

と言いながら、そこへドカリ坐つてしまい、それから酔眼を据すえて室内を見廻まわしました。

例の通り、丸行燈まるあんどんに火が入っているにはいたけれども、それは今や消えなんとしているところであります。

「いやに暗い火だ、明るくない燈火ともしびだ、もつと明るくなれ、明るくなれ」

主膳は燈火に向つて、こんなことを言いました。その舌の縛もつれ塩梅あんばいを見れば、かなりに酔つてゐることがわかります。

「誰もおらぬか、誰ぞ来い、あの燈火をもつと明るいように致せ、こんなにして燈心を掻かき立てるがよい、燈心を掻き立てさえ致せば、火はおのずと明るくなるのじゃ、早う致せ、誰もおらぬか、誰ぞ来い来い」

怪しげな呂律ろれつで取留まりもなく言いました。そうして酔つぱらい並みに頭をグタリと下げたり、怪しげな手つきをして、その手をすぐに膝の上へ持つて来て、狢犬こまいぬのような形をしたりしていました。

「うむ、よし、誰も来ないな、来なければこつちにも了見がある、お松、お松、いや女中共、女中共はおらぬか、其方共は主人そのほうの言いつけを聞かぬな、其方共までこの主膳を侮あなどると見ゆるな」

神尾主膳は、また酔眼を据えて室内を睨め廻したが、

「はははは」

と高笑いをしました。

「違った、違った、ここは古屋敷であつたな、なるほど、ここは躑躅ヶ崎の古屋敷じゃ、ここには誰も召使はおらぬのじゃ、屋敷の中には無暗に物を斬りたい奴が一人いて、屋敷の外には法性狐ほつしようぎつねがいる、そのほかには誰もいない、いないところへ物を

言いつけた、これは拙者が悪い、どれどれ、大儀ながら御自身に立って、あの燈火を掻き上げにやならぬ、燈火は暗し数行すうこう虞氏よしが涙なんだ——」

こんなことを言いながら神尾主膳は、ふらふらと立つて行燈の傍へ来て、燈心を掻き上げて火影ほかげを明るくして、覚束おぼつかなくも油をさえ差加えましたから、四辺あたりは急に明るくなりました。

「はははは、現金なものじゃ、燈心を掻き立てて油を差したらば火が明るくなつたわい、火が明るくなつたから四辺の物がよく見えるわい、よく見えるけれども机はおらぬわ、竜之助が姿を見せぬわい、はて、この夜中に、どこへ行つた、眼の見えぬくせに、はははは、眼が見えぬから夜と昼の区別がつかず、どこぞへ彷徨^{さまよ}い出したかな」

神尾主膳には酒乱の癖があります。しかしこちらへ来てからは酒乱の癖が出るほどに酒を飲みませんでした。主膳もこれだけは多少謹慎の心があつたのであります。それにどうしたものが今宵は、その酒乱に近いほど酒を過して来たもののようにあります。

室内が明るくなると共に、主膳は四辺をまた見廻しはじめました。

「刀もある、槍もある、敷物もある、屏風びょうぶもある……茶道具もあれば煙草盆まである、襖ふすま、唐紙からかみ……」

こんなことを言つて室内を見廻した主膳の酔眼がトロリとして、室の片隅の長持の上へ落ちました。

「あ、あれだ、誰もおらぬと思うたのはこれも間違い、あの中に一人の男がいる、口の利けない男がいる、今それを引き出して玩弄おもちゃにするのだ」

主膳は、またふらふらと立つて長持の傍へ行きました。

「幸内、長持の中にいる幸内、これへ出ろよ、そのように長持の中に隠れてばかりいては窮屈であろう、貴様も若い身空みそらじゃ、そう長持の中に隠れていずと、ちつとは広いところへ出てこいよ、壺中こちゆうの天地ということもあるから、それは長持の中もよからうけれど、若いのにそう隠れてばかりいては命の毒じゃ、そ

れこそ長持ちがないぞ」

主膳は刀を提げて長持の中へ片手を入れました。その長持には蓋がふたしてありません。蓋をしてない長持の中へ主膳は手を入れて、鼠を吊し出すような手つきをして、その襟髪えりがみを取って引き立てたのは幸内であります。

かわいそうに幸内は、いまだにこの長持の中へ入れられてあつたのであります。袋は被かぶせられていないけれども瘦やせきつておりました。両手は前に括くくられていました。両足は揃えて固く縛られてありました。争うにも力は尽き果て、物を言おうにも声が立ちません。

ズルズルと長持の中から幸内を引張り出した神尾主膳は、それを燈火に近いところへ持つて来て、

「ははははは」

主膳は幸内をそこへ引き倒して置いて、

「幸内、そちに窮命をさせて、拙者は氣の毒に思う、そちには怨みも憎みもないのじゃ、これというのは名刀の祟りたた、小人罪なし珠を抱いて罪ありということがある、幸内罪なし刀を抱いて罪ありというのじゃ、ほうき伯耆の安綱が悪いのじゃから不祥せい……それからまたお前の主人の伊太夫の娘、氣の毒ながらお化けのような娘、あれを拙者が嫁にしたいと言うのは、抱いて寝たいからではないぞ、いとしい恋しいと思うからではないぞ、恥かしながら拙者はいま手許がてもと不如意ふによいじゃ、伊太夫の財産に惚れたのじゃ、娘には恋なし、財産があるから恋ありと言わば言うものよ、はははははは」

主膳は憎らしい毒口を吐きかけました。幸内の口は声の立てられぬように菓を飲ませられてしまったけれど、その耳は、こ

の毒口を聞き取ることに不足はないと見えます。

幸内は主膳の言葉を聞くと、その首を烈しく振って苦しげな表情をしました。その有様を、主膳は、やはり酔眼を張って見ていましたが、

「まあ聞けよ、悲しいことに九分まで運んだこの縁談が、きわどいところで壊れそうじやわい、ほかでもない、それは駒井能登めが為す業^{わざ}じゃ、あの小賢^{こざか}しい駒井能登が邪魔をして、惜しい縁談が壊れかかったわい、残念じゃ、腹が立つてたまらぬわい」ここに至って神尾主膳は、正銘^{しょうめい}の酒乱になつてしまつたようであります。

「癩^{しやく}に触つて腹が立つてたまらぬ故、これからそちを駒井能登めに見立てて、この腹が納まるほど、弄^{なぶ}つて弄つて、弄りのめしてやるからそう思え」

神尾主膳はブルブルと身を慄^{ふる}わして、突然、幸内の襟髪を取つて引き立て、

「やい、駒井能登守、この神尾主膳をなんとするのじゃ、主膳をなんと心得て、どうしてみようというのじゃ、えい、小癪^{さか}な」力を極めて前へ突き倒しました。突き倒されて幸内が突んのめるのを直ぐにまた引き起して、

「瘦^やせこけた駒井能登守、口の利けない駒井能登守、突き倒されて直ぐに突んのめる駒井能登守、この神尾主膳をなんとするのじゃ、えい、腹が立つてたまらぬ、見るも胸が悪くなるわ、やい」

それをまた、力を極めて横へ突き転がしました。突き転がしておいて直ぐにまた引き起し、

「前へ突き倒せば前へ倒れる駒井能登守、横へ転がせば横に転

がる駒井能登守、さあ、この次はどうしてくれよう、水を食くらわ
せてくれようか、火を浴びせてくれようか、どうすればこの腹
が癒いえることじゃ、やい」

こんなことをしているうちに、神尾主膳の酒乱がだんだん嵩こ
じてきました。残忍性が増長してきました。

幸内の襟髪をもつてズンズンとこの座敷を引きずり出しまし
た。

座敷を引きずり出して戸をあけると縁側であります。その縁
側から裏庭へ、主膳は幸内を引き下ろしました。自分は足袋たびはだし跣足
で、庭へ飛び下りていました。

今度は土の上を引いて引いて、古井戸の傍まで引張つて来ま
した。

おそらく酒乱が、こんなふうに嵩じると、もはや自分で自分

の為すことを知らないものでありましょう。野獣のような残忍性が、加速度を以て加わつて来るものと思われません。

古井戸の流しへ幸内を引摺つて来て、そこへ突き放すと、神尾主膳は車井戸の綱へ手をかけてキリキリと水を汲み上げました。

「^{おの}汝れが、汝れが」

主膳は汲み上げた水をザブリと幸内の上から浴びせました。手を縛られ、足を縛られた幸内は、水を浴びせられて二尺ばかりも飛び上りました。飛び上つてまた倒れました。

神尾主膳は、心持よかりそうに高笑いして、また二杯目の水を汲みにかかりました。

「はははは」

二杯目の水を汲み上げて、またザブリと幸内の面^{かお}のあたりか

ら浴びせました。幸内は一尺ほど飛び上りました。

広い古屋敷のことで誰もいませんから、この場へ来るものはありません。ここにいる人のために衣食の世話をする人は、この近所の農夫の家族でありましたが、それは一定の時をきめて来るほかには、ここへ寄りつきませんでした。

どんな目に遭わされても幸内は、ついに一語をも発することができません。主膳はこの残忍性の面白味を帯びた遊戯のために、三杯目の水を汲み上げて、

「はははは、これは信玄が軍用に用いた用水じゃ、なかなか冷たい水だ、指を入れると指が切れるような水だ、信玄はこの水の底へ黄金を沈めて置いたとやら、それで水がこんなに冷たい、さあ、この冷たい水を、もう一杯飲め」

釣瓶つるべを抱いて、さあ三杯目の水を幸内の頭から浴びせようと

して、神尾主膳はよろよろとよろけました。幸内に浴びせようとした水を三分の一ばかり、自分の懐ろの中へ浴びせてしまいました。

「あッ、冷たい」

主膳は釣瓶を取落すと、釣瓶は井戸の中へ落ちました。やり損^{そこ}なつた主膳は、まだ釣瓶の綱の手を放さないで四杯目の水を汲みにかかりました。諸手^{もろて}をかけてウンウンと力を入れて手繰^{たぐ}つた時は、自分のしている残忍そのものの興味をも忘れているようであります。

かわいそうに幸内は、主膳が酒乱の犠牲となつて、弄^{なぶ}り殺^{ころ}しにされなければ納まらないでしょう。弄^{なぶ}り殺^{ころ}しにした上に、その屍骸を粉々にしなければ納まりそうにはありません。

主膳は悪魔のうなるように、ウンウンと力をこめて綱を引き

ました。力余つて釣瓶を井戸車の上まで刎^はね上げてしまいました。井戸の水は、滝が岩に砕けるように一時にパツと飛び散りました。

「うーん」

その途端に神尾主膳は、どうしたハズミか二三間後ろへ挫^{どう}と尻餅を搗^ついてしまいました。釣瓶の縄が切れたのです。釣瓶は凄^{すさま}じい音をして単^{ひとり}独で井戸の底へ落ちて行きました。ハズミを喰^くつて尻餅を搗いた神尾主膳は、暫らく起き上がることができません。

「神尾殿、神尾殿」

やや暫らくして神尾主膳は、何者にか呼び醒^さまされました。

「あ……」

主膳は気がついた時に、自分の面^{かお}の上へ小田原提灯を差しつ

けている者があることと、また自分の身体を後ろから抱き上げている者があることを知りました。

「神尾殿、氣を確かにお持ちなさい、拙者は小林でござる、小林文吾でござる」

後ろから抱き上げているのがこう言いました。それはすなわち剣道の師範役小林文吾であります。小林はやはり仲間ちゅうげんのような扮装なりをして、看板の上には半合羽を着て、脇差を一本だけ差しておりました。

「別に怪我をしているわけじゃねえんだ、ただ釣瓶つるべの縄が切れたから、それで尻餅つを搗ういて氣を失っただけなんだ」

小田原提灯を差しつけてこう言ったのは、それは宇治山田の米友でありました。

やつと氣がついた神尾主膳、もとより別段に斬られたという

わけでもなし、突かれたというわけでもないから、すぐに正気に返つて、

「これはこれは、小林文吾殿か」

この時には、主膳も酒乱の狂いから醒めていました。そうしてみると、なんとなくきまりの悪いような心持にもなり、また今ごろ小林師範が、どうしてこんな扮装なりをしてここへ来合せたかということも、疑問にならないではありませんでしたけれど、

「面目ないことじゃ、実は少々酔いが廻つたものだから、酔醒めの水を飲もうと、水を汲みかけてこの状さまじゃ——して貴殿方はどうしてここへ」

「我々はちと尋ねる人があつて、その人を尋ねてこのあたりまで来たところ、ついその人を見失うて……」

「それはそれは、ともかく、あれまで」

神尾主膳は立ち上りました。先に立つて小林を屋敷のうちへ案内しようとする、

「こりやどうしたんだ、エ、ここに男が一人縛られて倒れてるが、こりやどうしたんだ」

と言つて、けたたましく叫んで提灯を振りかざしたのは米友であります。

「ああ、そりやあきちがいじゃ、養生のためにそうして水を浴びせてやるのじゃ」

神尾は憎そうに言い捨てました。

「いくらきちがいだつてお前、この寒いのに井戸側いどばたへ、水をかけて置きつ放しにしたんじや凍え死こごんでしまふじやねえか」

米友は同情しました。神尾は米友の方を、じつと見ただけで取合わずに、小林に向い、

「貴殿方が尋ぬる人というのは、そりや、いかなる人でござるな」

「ほかではござらぬ、このごろ市中に評判のある辻斬の曲者くせものを尋ねんがために」

「なるほど」

「夜更よふけから暁方あけがたへかけて、こうして扮装みなりを変えて毎夜のように

尋ねてみるが、ついぞ出會でつくわし申さぬ。しかるに今夜という今夜、

柳小路で見かけた怪しの者、見えがくれに後をつけると、要法

寺の墓地へ入って行衛が知れず、引返そうとした時に、かねて

謀しめし合せておいたこの男、同じような怪しい者が、たった今、古

城の方へ行つたと申す故、二人で後追いかけて、たしかに姿を

認めたのが当屋敷の裏手。喜び勇んで駈けつけて見れば、それ

は尋ねる曲者ではなくて、御主人の神尾殿がこの体ていたらく」

小林文吾は一通りの事情を話して苦笑いしました。

「それは、それは」

神尾はそれを聞いてなんとなく腑に落ちないような心持で、例の座敷の傍へ来て縁側から覗いて見ると、さいぜん、さんざん問題にした丸行燈の火は消えてしまっていましたから、中は真暗でありました。

幸いに米友は小田原提灯を持っていました。頼まれもしないのに、幸内を担いでその縁側のところまでやつて来ていました。主膳と幸内とを座敷の中へ送り込んで、小林文吾と米友とはそこを辞して外へ出てしまいました。

そのあとで、主膳は座敷の中で寝転んで、詩を吟じてみたり、新内しんないを語ったりしてみましたが、やがて思い出したように起き直りました。米友が提灯からうつした行燈には火が入っていま

した。その行燈の下に幸内は、水を浴びせられたまままで放つて置かれてありました。主膳はその傍へ寄つて来て、

「幸内、お前にもだいぶ苦しい思いをさせたな、どれ、許してやろう、縄をゆるめて遣つかわすぞ」

と言つて、縛つてある幸内の縄の結び目を解きにかかりました。酒乱は止んだらしいけれど、酔いはまだ醒さめていないようです。

ついに面倒になつたものと見えて、主膳は小柄こづかを抜きました。その小柄でブツリブツリと縄を切つてしまいました。

こうして手首の縄を切られたけれど、幸内はグツタリとしていました。

「ははははは、おとなしいな」

と主膳は笑いました。それから同じ小柄をもつて足首の縄をブ

ツリブツリと切りかかりました。

縄は足首の中に食い込んであつたのを切つてしまうと、幸内の両足も自由になりました。

両手も両足も自由になつたけれど、幸内はグツタリとして動きません。それはそのはずです、三杯目の水を浴びせられようとする時分から、幸内は絶息していたものでありましたから。

「ははは、永らく窮命させた、これで許して遣わす、どこへなと勝手に出て行け」

神尾主膳はこう言つて、暫らく幸内の姿をながめていたけれど、幸内は更に動くことをしませんでした。

「ははははは」

と主膳はまた発作的に笑つて、そのままゴロリと横になりました。横になると新内の明烏をしんない あげがらすところまんだらつま摘んで鼻唄はなうたにして

いるうちに、グウグウと寝込んでしまいました。

主膳の軀いづきがようやく高くなつた時分に、幸内の身体が少しばかり動きました。絶息していた幸内の眼に白い雲のようなものがかかりました。幸内は夢のように手を振りました。それが気のついたはじめで、それから自分のことを覚さとるまでには、なお幾分かの時間がかかりましたけれど、結局、幸内は我に返りました。

我に返つた最初に、行燈の光がボンヤリと眼へ入りました。それよりも幸内が嬉しくて嬉しくてたまらなかつたのは、いつのまにか、わが手が自由になつていたことのわかつた時であります。

それがわかると勇氣が一時に十倍百倍し、さほど弱つていた身体で這はい起きたのが不思議なくらいでありましたけれど、這

い起きて見るとこれも嬉しや、足も自由になっていました。

見れば行燈の影に一人の侍が寝ています。

幸内はゾツとしてしまいました。永らく己れを苦しめて苦しめ抜いた極悪人ごくあくにんという憎悪ぞうおがむらむらと起りましたけれど、その憎悪は復讐ふくしゅうというところまで行かない先に、恐怖を以て占領されてしまいました。

何事を置いてもこの場を逃げなければならぬ、逃げ出さなければならぬという考えが、前にも後にも犇々ひしひしと迫つて来たから、幸内は縁側の方の戸を押し開きました。一生懸命で戸を開いて縁側へ出て、縁側から転げ落ちて、やっと起き直つて、庭を駈け出してまた転びました。また転んでまた起きました。その有様は後ろから鬼に追われて、足の竦んだ夢すくを見ているような形でしたけれど、別に何者も追いかけるものではありません。

神尾主膳が寝込んでしまつて、幸内が転がり出して、いくらもたたない時に、机竜之助が帰つて来ました。

例の通り宗十郎頭巾を被つていましたが、いつも蒼あおざめている面かおが一層蒼ざめていました。

「神尾殿、神尾殿」

行燈の下へ来て寝ている神尾を呼び起した時、竜之助は胸のあたりを氣にしております。

「やあ、机氏、どこへ行つていた」

神尾主膳はやつと起き直りました。

「夜遊びに行つて来た」

と言いながら竜之助は、片手で長い刀を横に置いた時に、神尾主膳は竜之助の例の胸のあたりを見て、

「や！」

神尾は悸^{ぎよつ}として少しく身を退^{しりぞ}かせました。

胸のあたりを気にしていたという竜之助は、その羽織の少しく下の方にぶら下がっている白い物を右の手に持つて、左は羽織を押えて、無理にそれをもぎ取ろうとするのであります。

神尾が見て悸^{ぎよつ}としたのは、その竜之助のもぎ取ろうとしている白い物が、人間の手のように見えたからであります。

人間の手のように見えたのではない、まさに人間の手に違いないからであります。

「竜之助殿、いったいそりや、どうしたのだ」

主膳も、ほとほと身の毛がよだつようでありました。

「固く……むしりついて……どうしても取れぬ」

竜之助は、そう言いながら人間の手を羽織の襟からもぎ取ろうとして、なおも力を入れたのであります。

「どうしたのじゃ」

主膳は再びたずねました。

「これが……この手首が……」

竜之助は、自棄^{やけ}に力を入れてその羽織にぶらさがった人間の手を引きました。

「斬ったのか、人を斬ったのか……」

主膳は面を突き出して、その手首を篤^{とく}と見届けようとして、

「取れないのか」

「取れない」

「どれどれ」

「斬った途端にここへ飛びついたから、また斬った、手首だけ残して倒れた、その手首が、ここに密着^{くっ}いて離れない」

「拙者が離してみてもやろう」

神尾主膳は竜之助の胸の前へ来て気味悪そうに、その手首にさわりましたが、

「こりや女の腕ではないか」

「ああ、女の腕よ」

「女を斬ったのか」

「うむ、女を斬った」

「なぜ斬った、どこで……」

それから、やや暫らく古屋敷の中は寂然ひっそりとしていましたが、

「はははは、拙者にその駒井能登守とやらを討てと言われるのか」

机竜之助のこう言った声が、低いけれども座敷の隅に透とおりました。

「叱しッ、静かに」

それは神尾主膳が怖れるように抑えたのであります。

それから小さい声で話が続きました。時々は声が高くなつたけれどよくは聞き取れません。暫らくして神尾主膳の、

「や、幸内がいらない。幸内が逃げた」

と叫ぶ声が聞えました。

幸内を逃がしたのは自分が逃がしたのである。主膳は今まで自分のしたことに気がつかないでいたと見えます。

それから急に騒ぎ立って雨戸をあけて見たり、庭へ出て見たりするようでありましたけれども、結局、逃げた幸内の行方ゆくえがわからない。そうなると神尾主膳はじつとしていられないほど、
狼狽ろうばいをはじめましたようであります。

主膳は周章あわただしく帰りました。主膳が帰つてのあとは竜之助が一人でありました。

「神尾主膳はおれに向つて、駒井能登守とやらを討つてくれと
いう、神尾の頼みを聞いてやらにやらぬ義理もなければ、駒
井能登守を討たにやらぬ怨みもない、おれは人を斬りたいか
ら斬るのだ、人を斬らねばおれは生きていられないのだ——百
人まではきつと斬る、百人斬つた上は、また百人斬る、おれは
強い人を斬つてみたいのじゃない、弱い奴も斬つてみたいのだ、
男も斬つてみたいが、女も斬る、ああ甲府は狭い、江戸へ出た
い、江戸へ出て思うさまに人が斬つてみたいわい。ああ、人を
斬つた心持、その時ばかりが眼のあいたような心持だわい。助
けてくれと悲鳴を揚げるのをズンと斬る、ああ胸が透く、たま
らぬ」

竜之助は座の左を探つて、てがらやままさしげ手柄山正繁の刀を取り上げました。
「今宵もこれで斬つた。女だ、まさしく女の声で助けてくれと

泣いた。若い女であつたか、年を取つていたか、そりやわからぬ。綺麗な面かおをしていたか、醜い面をしていたか、それもわからぬ。若い女であつたら何とする、また美しい女であつたら何とする、おれはただ斬ればよいのだ、斬りさえすれば胸が透くのだけ。声をしるべに斬つた途端に、縋すがりついて泣いたからまた斬つた、それでこの片腕がおれの羽織にしがみついたなりに残つた」

竜之助はその刀に残る血の香に顫ふるえつくようでありました。身体もまたブルブルと顫えて、手に持った刀から水が飛ぶようであります。

「以前は強い奴でなければ斬りたくなかつた、手ごたえのある奴でなければ斬つてみようと思わなかつた、このごろになつては、弱い奴を斬つてみたい、助けてくれと泣く奴を斬るのが好

きになつたわい。ああ、咽喉^{のど}が乾くように人が斬りたい。あの幸内とやらは逃げたそうな、長持の中の窮命人は逃げたそうな、せめて彼でもいたら斬つてみたい、一人では斬り足らぬ。どうしてまた、今宵はこれほどに人が斬りたいのだ」

竜之助はほんとうに乾いた咽喉を鳴らしているのでありました。それは血を飲みたいがために乾いた咽喉であります。

「ああ、甲府は狭い、一夜のうちに二人と人が斬れぬ、江戸へ出たい、江戸へ出れば、好みの人間を好むように斬ることができるのだ——今宵斬れば明日の晩は遠慮せにやならぬ。甲府の土地にはおられぬ、江戸へ出る工夫はないか。江戸へ出て思うままに人を斬らねば、おれは生きてはおられぬのだ」

彼は狂する者のように、刀の血の香いを嗅いでいるのでありました。

九

その翌朝、甲府の市中がまた沸き立ちました。それはまたしても辻斬があつたからであります。

その騒ぎ方と驚き方と怖れ方とが、今までよりも一層甚だしかつたのは、斬られたのが女であつたからであります。今まで斬られた者のうちに女は一人もありませんでした。昨夜斬られたのは女でありましたからです。

それは八日市ようかいちへ呉服屋を出して、いくらもたたない若夫婦でありました。その女房が良円寺の門の前で斬られました。それはこの暁方あけがたのことでありました。

この呉服屋の小店こだなの若い夫婦の間には、今年生れの可愛い男

の子があつて、虫のせいとその夜中に苦しがつて氣絶してしまつたのを、若い女房は、その夜中であることも、このごろ辻斬が流行るといふようなことも知っておりながら、考え直す余裕がなく、良円寺の内に住んでいるお医者を迎えに行きました。

夫なる人もまた、自分が女房に代つて医者を迎えに行くことさえ気がつかなくなつたくらいでしたから、氣絶した子供を抱えて、前後を顛倒して為すべき業を知らなかつたものであります。そのうち隣家の人も来てくれましたけれど、女房は歸らないし、医者も駈けつけてくれません。

隣家の人たちが提灯をつけて、良円寺まで迎えに行つた時から、この騒ぎが始まつたものであります。

女房は歸らないはず、医者も来てはくれないはず——その若い女房は良円寺の門前に斬られておりました。

思慮のない人々は、その驚愕と戦慄と恐怖とをそのまま生なまで
持つて来て、若い亭主の前へブチまけたからたまりません、若
い亭主はその場で即座に発狂してしまいました。

抱いていた子を投げ出してゲラゲラと笑い出しました。

来てくれた人々を見てもゲラゲラと笑いしました。釣台で運ん
で来たその女房の無む惨ざんな亡骸なきがらを見た時もゲラゲラと笑いしました。

幸いにしていったん気絶した子供は、医者 of 来てくれたこと
によつて蘇生して、無邪気な笑い顔を見せるようになりました
けれど、親なる人のゲラゲラ笑いは無制限に放縦なものになつ
てしまいました。人が騒いでいる間に、若い亭主はゲラゲラ笑
いながら、フイとどこへか姿を見せなくしてしまいました。

これで小さな八日市の呉服店はつぶれてしまいました。地廻
りの若い者たちに岡おか焼やきをさせた愛嬌のあるおかみさんと、お世

辞のよい御亭主と、その間の可愛らしい子供から成り立つた平和な家庭が、根柢から摧くだけてしまいました。

市中の上下は、その惨虐さんぎやくなる殺人者の何者であるかを揣摩しまして、盛んに役向やくむきを罵りました。役向を罵るばかりでなく、おのおの進んで辻斬退治のために私設の警察を作ろうとしました。

その晩は幸いに何事ありませんでしたけれども、その翌日になると、町の人は気の毒とも悲惨とも言い様のない一つの光景を見せられることになりました。

発狂して親戚に預けられた呉服屋の若い亭主が、その子供を背に負うて何か言いながら、当途あてどもなく町を歩いていることがあります。

その若い亭主は、どこを目当ともなく歩いていましたけれど、時々休んではゲラゲラと笑います。そうすると背中にいる子供

は、それを喜んで、またキャツキャツと笑い興じているのであります。

それらのことを知るや知らずや机竜之助は、ちようどそれから三晩目の夜中に、そつと躑躅ヶ崎つっじ さきの古屋敷を抜け出しました。頭巾ずきんを被りかぶ、羽織を着、刀を差して、竹の杖をつくこと例の通りにして、いつのまにか愛宕町あたごちようの東裏へその姿を見せましたが、そこへ来ると境町の方からズシズシと数多あまたの人の足音が聞えました時に、竜之助は、時の鐘の櫓やぐらの下へ蜘蛛くものように身を張りつけて、その足音をやり過すごしました。

「こんなところが剣呑けんのんじや」

と言つて過ぎ行く一隊の中で、六尺棒を突き立てて暫らく時の鐘の櫓の下に立っている者もありました。

「斬る方では、こんなところが究竟くつぎようだけれど、わざわざこんな

ところへ斬られに来る奴はあるまい」

そんなことを言つて行き過ぎてしまいました。これは辻斬を警戒するために組織された一隊の足軽たちと見えます。これをやり過ぐすと竜之助は、また静かに櫓の下から出て来ました。

濠^{ほり}を渡ると境町の通りであります。甲府の城を右に、例の牢屋を左に、その中の淋しい通りです。そこをズツと市中の繁華な方へ歩んで来るうちにも、竜之助の勘^{かん}が驚くべきほどに発達していることがわかります。一町二町先から人の足音を聞き取つて、高塀や木蔭に身を忍ばすことの巧妙なのは、さながら忍びの術の精妙から出でたものかとも思われます。

通り過ぐる人を物蔭から測量して、斬つて捨つべきか否かを吟味した後、やり過ぐして物蔭から身を現わす時は、幽霊がでて来るようであります。

三の廓くるわまで出たけれども竜之助はまだ、しかるべき相手を見出さないようであります。三の廓の留まりを直角に廻つて、竜之助は東に向きを変えて歩みました。東に向きを変えらるとお城が背になつて、牢屋が左になつて、行手には長禪寺山そびが聳そびえてゐるのであります。

「ゲープ、寒いなア」

めつぽうかい
「滅法界寒い」

折助が五人ばかりかたまつて来ました。

「芋で一杯飲んで来たが、ここへ来るといやに寒くなりやがつた」

「それ、辻斬！」

「やい、嚇おどかすない」

ここで黙つてしまいました。言い合せたように身ぶるいをし

て、

「はははは」

つけげんき

附元氣らしく高笑いをして、牢屋の方へ曲つて行きました。

それをもやり過ごして、なおも廊の縁ふちを歩んで行つた竜之助が、いつしか足を留めたところは、とあるお寺の門の前でありました。

竜之助は小首を傾かしげて杖で大地を突いてみました。大地は別に異様な音を立てるではありませんでした。ただこの時分になつて、町も廓も一面に霧のようなもので包まれてしまったことでもあります。さきには聳えて影を見せた日本丸の櫓やぐらも、それがために見えなくなつてしまいました。いま立っているお寺の門も、その前の竜之助も同じく、その霧のような靄もやで包まれてしまいました。

その霧のような靄に包まれた甲府の町の夜は、この時静かなものでありました。その静かなうちに、町の辻々は例によつて辻斬警戒の組の者が六尺棒を提げてのっしのっしと過ぎて行くのであります。ただ一つ不思議でならないことは、その静粛にしてしかも物騒なる甲府の町の夜の道筋のいずれかを、子供が泣いて歩いてゐるらしいことであります。

机竜之助が如法によほうあんや闇夜の中に一人で立ち尽していたのは、その子供の泣く声を聞いたからであります。子供の泣く声が、だんだん自分に近く聞えて来たからであります。

「モシモシ」

と言つて、霧のような靄の中から、不意に言葉をかけたものがありました。

それは、竜之助を見かけて呼んだものとしか思われないので

あります。ナゼならば竜之助のほかにもこの夜中に、ここらあたりを歩いている人があろうとは、竜之助自身も思い設けぬことでありました。

「モシモシ、少々お伺い致したいものでございますがねえ」
こう言いながら近寄つて来るのであります。

近寄つて来るところによつて見れば、その背中で子供が泣きじやくつてゐるらしいことであります。竜之助は、ただ黙つて立つていました。

ここにおいても竜之助は、その自身すら、自分に近寄つて来る者の心のうちを推^{すい}するに苦しみました。

ことにまだ乳呑児^{ちのみご}らしいのを背にして、この夜中に、人もあらうに、自分と呼ばかける人の心は計られぬのです。

「モシモシ、少々お伺い致したいものでございますがねえ」

竜之助は近寄つて来る者の足音に耳を傾けましたけれども、その足音は一人の足音です。その背に負うた子供のほかに、何者をも引きつれて来たとは思われません。況んやこの男をオトリにして、あとから与力同心だの、足輕小者だのいう者が覘ねらい寄るといふような形勢は更にありませんでした。

「モシモシ、少々お伺い致したいものでございますがねえ」

なんらの怖れることと、憚はばかることがなしに、竜之助の刀の下

へ、身を露出むきだしに持つて来る者があります。

「何を聞きたいのだ」

竜之助は無然ぶぜんとして、返事をしてしまいました。

「あの、ほかではございませんがね、少々お尋ね申したいと言いますのはね、それは私の女房のことなんでございますよ、私の女房はまだ若くつて、なかなか愛嬌があるおかみさんなんで

「ございますよ」

惘然とした竜之助は、ここに至つて啞然あぜんとしました。あ、きちがいだ！ 道理で……

「その私の女房でございますがね、それはどこへ行つたんでございましょう、どうもあの女房に出られては、私も困るんでございですがね、なかなか愛嬌があつて人好きのする女でございますものですからね、近所の人もみんな賞ほめてくれましたんでございますよ、それで私との仲も好かつたんでございますよ、それが急に見えなくなつてしまつたものでございますから、私も心配なのでございますよ、それに坊やがこうやつて泣くものでございますからね、どうかしてモウ一ぺん帰つて貰いたいと思ふんでございますよ」

ついに竜之助の傍まで来て、その袂たもとを持つてグイグイと引き

ました。

「わしは知らない」

「左様でございますか、なんでも人の話では、良円寺前で斬られたというところでございますが、そんなことがあるものでございますか、ねえ、旦那、そりや嘘でございますねえ」

続けざまに袂をグイグイと引いてこう言いかけられた時に、竜之助は身ぶるいして、見えない眼でその男の面を見下ろしました。かお

甲府に徽典館きてんかんというものがありました。これは士分以上の者、または農商のうちでも相当の身分の者の子弟が学問をするところであります。その晩のこと、この徽典館へ多くの子弟が集まりました。多くは前髪立ちのものばかりであります。

この集まりは別段、今ごろ騒がしい辻斬問題と交渉があるわけではありません。ただ時々こうして集まって、青少年の気焰と談話とが賑わしく、また勇ましく語り合われるものでありました。

今、ここで話題になつてゐることを聞いても、それがこのごろの天下の形勢や、市井しせいの辻斬の問題とは触れておりません。彼等の間の話題は、近いうちおたがいに結束して山登りをしようといふことの相談でありました。その山登りをすべき山は、どこにきめたらよからうかといふことにまで相談が進んでいたのであります。甲斐かいの国のことから、山に不足はありません。多過ぎる山のうちのそのどれをえら択んでよいかという評議であります。

「富士山に限る」

と言つて大手を拡げたのがありました。それと同時に、富士山は甲斐のものである、それは古えいにしの記録を見てもよくわかることである、しかるに中世以来、駿河の富士、駿河の富士と言つて、富士を駿河に取られてしまったことは心外千万である、甲斐の者は奮つてその名前を取戻さねばならぬ、などと主張しているものもありました。

けれどもこの説は、事柄が壮快であるにかかわらず、事実において問題が残つてありました。

「しからば天子ヶ岳へ登ろう」

と主張する者もありました。名前が貴いからそれで、若い人はそんなことを言い出したものと見えます。

それらを最初にして、いろいろの説が出ました。御岳みたけの奥、金峰山がよかろうというものもありました。或いは天目山を推

薦するものもありました。少し飛び離れて駒ヶ岳を指定するものもありました。

その山々の名が呼ばれるに従つて、いちいちその山の地勢だの、その山から起つた伝説だの、そんなことが青少年の口から口へ泡を飛ばして語り合われるから、なかなか山の相場がきまりません。

そのうちに、流鏑馬^{やぶさめ}をやろうじゃないかという説も出ました。この説がかなり有力な説になつていきそうでありました。八幡宮で行われる流鏑馬が久しく廃^{すた}れているから、それを起そうじゃないかという説は、これらの子弟の説としては根拠もあり理由もある説なのであります。

また一方においては、我々でお能の催しでもしようではないかという温雅な説も出て来ました。それは大した勢力はなかつ

たけれど一部のうちには、なかなか熱心な面付かおつきをしている者が
ないではありません。

議論百出で、容易になんらの決定を見ませんでしたけれども、
大体において、近いうち徽典館きてんかんの青少年らしい催しをして、大
いに元気を揚げようじゃないか、ということに一致したのであ
ります。それで今宵こよい出て来たいろいろの議論を参考として、次
回の集まりまでに成案を立てるというだけはこのできまりまし
た。

それから各自になるべくその主張するところに多くの賛成者
を求めようとして、雑談の間に遊説ゆうぜいを試みているのもありまし
た。それで夜の更けると共に、席はいよいよ興が乗ってゆくば
かりです。

この連中が解散を告げて徽典館の門を出た時分に、黒闇くらやみの夜

に例の霧のような靄もやがいつぱいに拡がつていました。後なる人は前の人の影をさえ見ることができません。前の人はまた後人の名を呼んで門の前から三々五々、その志す家路に帰ろうとする時に、はじめてこの青少年たちに警戒の心が起りました。もう夜が更けている。暗い上に靄もやがかかっている。こういう晩に門外へ出ると、そぞろにこのごろの世間の噂の中の人とならないわけにはゆきません。

彼等は言い合せたように、三人五人かたまつて行きました。空身からみであるのもあつたけれども、竹刀しなと道具なとを荷につているのもありました。お能をやりたいた言つた少年たちのうちには特に得意の美音で、謡うたいをうたい出したのもありました。ましてや間近き鈴鹿山、ふりさけ見れば伊勢の海……なんぞと口吟くちずさんだ時は、いかにも好い気持のようでありました。

どこかで太鼓の音がしています。それは近在の若い者たちが
囃はやしの稽古をしているものらしい。大胴おおどうを入れる音と、笛を合せ
るのと、シャギリの音までも手に取るように響いて来たもので
あります。

「あの連中は根気はいいな、寒稽古といつて夜徹よじおしやつている
ことがある。太鼓を叩いて笛を吹いて、馬鹿面ばかめんを被つて踊るこ
とでさえも、あの通りの根気がいる、それで、十年二十年と苦
しんでもなかなか上手にはなれぬそうじゃ、況いわんや我々の武芸
学問においてをや」

囃の稽古を聞いても、こんなことを言い出すものがありまし
た。

「一生苦しんでも出来ぬ奴は出来ん……と言つて一心を籠こめて
精を出せば僅かの間にも上達する。拙者はこのごろ、ふと或る

人の話を聞いた、歳は僅かに十七、我々とそう違わぬけれど、この甲府城の内外には及ぶものはなかうとの剣術の達人があるという話を聞いた」

彼等少年軍の多くは足駄を穿^はいておりました。凍^いてついた大地をその足駄穿きで、カランコロンと蹴りながら歩いていました。

「そんな人がどこにいる」

前へ進んだのが後ろを振り返りました。振り返ったけれど、やはりおたがいの姿は見えないのです。

「この甲府にいるにはいる」

「ナニ、左様な人が甲府にいると？ それならば教えを受けたものだ、ぜひ」

やはり前へ進んでいた剣術の道具を荷つたのが踏み止まりま

した。

「甲府にいるにはいるけれど、居所が變つてゐるから、お紹介ひきあわせをするわけにはゆかんのじゃ」

「居所が變つてゐると？ およそこの甲府の附近であつたなら、どこでも苦しくない、行つて教えを受けようじゃないか」

「それは我々には行けないところ、先方もまた我々に来られないところだから仕方がない」

「そのようなところがあるはずがない」

「畢竟つまり、この甲府の牢屋の中にゐるのだから我々には会えん、また先方も出て来られんのだ」

「甲府の牢屋の中に、まだ少年でそしてそれほど剣道の達者つながいると？ いったいそれは何という者で、何の罪で牢獄に繋つながれたのじゃ」

「それは宇津木兵馬といって、御金蔵破りの嫌疑があつて、牢から出られない。聞くところによれば、江戸で島田虎之助という先生の門人で直心陰じきしんかげを学び、それから宝蔵院の槍の極意に達し、突つきにかけては甲府城の内外はおろか、お膝元へ出て前立つ者は少なからうとのこと」

「それほどの人が、御金蔵破り？ そりや冤罪えんざいであろう、我々の力でどうかしてその冤罪を晴らしてやる工夫はないものかな」
彼等は靄もやの中を歩いてゐるのだから、立ち止まつてゐるのだから、わからないほどであります。

徽典館きてんかんの少年たちの一組は、こんなことを話し合いながら靄の中を歩いて行きました。

闇がいよいよ黒くなるところへ、靄がいよいよ濃くなつてゆくのであります。靄というけれども、やはり霧といった方が

よいかも知れませんか。或いは雲という方が当っているかも知れませんか。天地が墨の中へ胡粉ごふんを交せて塗りつぶしてゆかれるようです。

彼等の一組が御代官陣屋の方を指して行くと、

「あ、赤児の泣く声が聞えるではないか、諸君」

と言うものがありました。

「なるほど」

と言つて耳を傾けました。なるほど、赤児の泣く声がするのであります。それも家のうちで泣いているならなんのことはないけれど、家の外、町から町を泣き歩いているものようであります。

だから少年たちはまた一かたまりになつて、

「ハテ、この夜中に子供が泣きながら道を歩いていようとは……」

「モシモシ」

その厚くて濃い闇と靄の中から、不意に言葉がかかりました。それは子供の言葉ではなく、

「少々承りとうございますがね、わたしの女房はどこへ行つたんでございましょう、わたしのおかみさんはどこへ参りましたろう、まだ帰つて参りませんよ」

少年たちは、そのあまりに不意の言葉に驚かされてしまいました。それは寧ろ怖ろしいくらいで、

「誰じゃ、どなたでござるな」

と誰何すいかしましたけれども、それを耳に入れる様子はなく、それとは相反あいそれた方へ行つてしまひながら、

「もしもし、少々物を承りとうございますがね、わたしのおかみさんがまだ帰つて参りません、女房はどこへ参りましたろう」

そこで少年たちは、

「狂人きちがいだろう」

「狂人きようじんじゃ」

と言つて気の毒がりました。

その狂人とおぼ覺しい男は暫らくして足音も聞えなくなりましたが、やがて前の子供の泣く声が異なつた方向で、町から町を筋を引いて歩くように聞え出します。

「危ないものだ、子供を背負うて夜中にああして歩いている、さだめて女房に死なれて、気が狂うたものと見ゆる」

「それに違いない。しかし、このごろのように物騒な時に、あしてこの夜中を歩くのは、薪を背負つて火の中へ駆け込むのと同じことじゃ、怪我けががなければよいが」

「ここへ来れば取押えて家まで連れ戻してやろうものを、向う

へ行つてしまつたから仕方がない」

「あの男のことばかりではない、我々もまた用心せんと……」

彼等是这样言つて、また歩き出しました。もとよりこの一組の少年たちのうちにも、勇なるものと怯きようなるものとがあります。けれどもこうかたまつてみれば、勇なる者にも守る心が出来、怯なるものは勇なる者に同化され、勇怯合せて一丸となつた別の心持に支配されるのであります。

例の子供の泣く声が糸を引いたようにして絶えることしばし。その時、忽然こつぜんとして耳を貫く物の響が起りました。物の響といううちに、やつぱりそれは活いける物のなせる声でありましたけれど、前のとは違つて人の腸はらわたにピリピリと徹こたえるような勇敢にして凄烈せいれつなる叫びでありました。

「や、あの声は？」

「狼ではないか」

「熊ではあるまいか」

少年たちはまたも足をとどめたが、その吠え落す^ほ声をじつと聞きとめて、

「やつぱり、犬のようじゃ」

いま吠え出したそれはまさに犬の声であります。犬の声ではありませんけれども、尋常の犬の声とは思われません。

それはさておいて、このおつ、そろ、しい、闇と靄の晩にも泰平無事なのは、甲府のお牢屋の番人の老爺^{おやじ}であります。

小使の老爺は貰いがたくさんあります。牢の中にいても金を持つてゐる奴は、小使に頼んでいろいろの物を買ってもらふことができます。最初に持つていた金は役人のところへ取り上げられて、必要に應じて少しずつ下げ渡される制度であつたが、そ

の少しずつ下げ渡された金で、小使の老爺に頼んで、内々でいろいろの物を買ひ調ととのえるのであります。

しょうが によつてこうとうがらし

生姜や日光蕃椒を買つてもらうものもあります。紙の将棋盤

と駒を買つてもらつて勝負を楽しむものもあります。武鑑を買つ

てもらつて読むものもありました。お菜かずが無いので困る時には、

生姜や日光蕃椒のほかに、ヤタラ味噌や煮染にしめなどを買つて仲間

おおばんぶるまい

へ大盤振舞をするものもありました。また大奮発で二両三両と

出して毛布の類を買ひ込んで、寒さを凌しのぐような贅ぜい沢なものも

あわせ

ありました。裕あわせを一枚買ひ足して重ね着をする者もありました。

酒は固く禁じてありましたけれども、それとても小使に頼め

ば薬を買うというなだいで、焼酎しょうちゅうや直しなおを買つて来てくれます。

その度毎に小使はコンミツションが貰えます。コンミツショ

ンが貰える上に更にその代金の頭をは刎ねることもできます。こ

のごろ贖金にせがねづか使いというのがこの牢へ入ってから、この小使のう
るおいがまた大きくなりました。それですからこのごろの小使
は成金で、天下はいよいよ泰平です。

午後の四時から九時までの間に、お役目だけの役人の見廻り
があります。その時は小使と番人とが、

「お見廻りでござりまするぞ」

と先触さきふれをして各牢を廻つて歩くと、牢内の一同が、

「御苦労さまでござりまする」

と言つてお礼を申し上げるのがきまりになつておりました。

この成金で、そうして天下泰平であつた甲府の牢番も、勤め
に在る以上、やはり相当の責せめを尽さねばなりません。

「はははは、二番の贖金使いの弥兵衛たらいふ奴は、さすがに
贖金でも使つてみようというだけあつて話せる奴だわい、お寒

いに御苦労さまでございますなんかと言つて、袂の裾をふんわりと重くさせる奴さ。それに比べると武士上りさむれえあがは、いやに見識が高くつて薬の利き目が薄いのは癩しやくだが、それにしても御方便に、おれの持場はみんな客種が上等で仕合せだ」

ちようちん 提灯を持つて、眠い眼をこすりながら立ち上り、

「いるかな」

ごじようれい 御定例に提灯をかざして、一番の牢の内を覗のぞいて見ました。

返事がしないのは、よく寝ている証拠でありましょう。牢番はうなず頷いて第二番室の前、

「いるかな」

また御定例に提灯をかざし、格子の中を覗いて見ましたが、ここでもやつぱり返事がありません。

天下もあまり泰平過ぎると気味が悪くなるものです。いつも

一人や二人返事をするはずのが、一番二番を通して一人も返事をする者がありませんから、牢番もあまりの泰平に拍子抜けがして、なおよく格子の間から覗いて見て、

「おや？」

と言つて仰天しました。

この時分、牢屋の外も、同じように墨と胡粉ごふんで塗りつぶした夜の色で包まれていました。

「破牢はろう、破牢、牢破り！」

この声が牢屋の中のすみから起ると共に、牢の内外の泰平は一時に破れてしまいました。

「スワ！」

という騒ぎ。高張たかはりがつき提灯がつき、用意の物の具が、物すさまじい音をして牢屋同心の人々の手から手に握られました。

けれども靄もやが深いから、高張も提灯もその光が遠く及ばないのであります。人々の騒ぐのも、ただ電燈の消えた湯屋の流し場の中で騒ぐのと同じことで、おたがいの姿を見て取ることができません。況いわんや破牢の者共は、どの道をどの方向に逃げたのか、サッパリその見当もつきません。

「出合え、出合え」

という声が北の方の外まわりの高塀の下で聞えましたから、同勢はその声をしるべに、同じ方向へ駈けて行きました。

「待て！」

と言う声が聞えました。

「うーん」

とうなる声と共に、ドサリと人の倒れる音がしました。

「どこだ、どっちへ逃げた」

同勢はその唸る声と、人の倒れる音を目当として靄の中を進みます。

「捕つた！」

「小癩な！」

そこで喧々濤々として一場の大格闘が起つたようであります。

「提灯を！ 高張を！」

同勢が叫びました。提灯と高張とは一度にそこへ集められました。その光で、あたりの光景が紅を流したように明るくなりました。そこに一箇の囚徒が阿修羅のように荒れています。

その荒れている囚徒というのはすなわち、宇津木兵馬と室を同じうした、かの奇異なる武士でありました。仮りにその名を南条と呼ばれていた武士でありました。

南条は左の小脇にまだ病体の宇津木兵馬を抱えながら、右の

手と足とを縦横に働かせて、組みついて来る同心や手先や非人を取って投げ、蹴散らして、阿修羅のように戦っているのであります。

南条は外まわりの総高塀そうたかべいを背にして、寄り来る人々を手玉に取りながら、一步一步と高塀の方へ押着けられて行くのであります。いや押着けられて行くのではない、自分からジリジリとさがって行くようであります。

いよいよ南条はその塀際へいぎわまでさがった時に、手早く塀の一端へ手をかけました。その手をかけたことによつて気がつけば、見上げるような高い塀の上から、一条の縄梯子なわぼしどが架け下ろしてあります。

この縄梯子は尋常の梯子よりは大へん狭いものであります。狭いものであつたけれども、かなり丈夫に見えました。

それは尋常の縄ではありません。このとき思い当るのは、手内職こよりというてこの奇異なる武士が、暇にまかせて拵こしらえておいた紙撚であります。その紙撚がここに梯子となつて利用されているものとしか見えません。

片手と片足とをその縄梯子にかけた時、

「捕つた！」

もうその前後から蝗いなごのように捕方とりかたが飛びつきました。

この時、どこから来たか一隊の人が闇と靄との中から打つて出でました。

彼等は物をも言わず牢屋同心や牢番や小使や非人の中へ打つてかかりました。手には丸太や板片いたぎれを持ってゐるものもあれば、同心や牢番を叩き伏せてその得物えものを奪うて働くものもあります。言うまでもなくこれは第二番室の破牢の一組で、先に立つて

指揮するのは武士体さむらいていの屈強な壮者でありました。

「弥兵衛殿、お前は南条と一緒に宇津木君を助けるがいい、あとは我々が引受ける」

「それではひとつそういうことをお願い申します」

弥兵衛と呼ばれた男の駆け出すのを認めた非人が、

「やい、貴様は贗金使いの野郎だな、逃すこつちやあねえ」
前後から組みついて来たのを、

「邪魔しやがるな」

贗金使いは二人を投げ飛ばしました。

「南条様、兵馬様を私にお渡しなさいまし、私の方が身軽でございますから、さあお出なさいまし」

贗金使いは絡からみつく奴を蹴飛ばして、奪い取るように兵馬の身体を南条という武士の手から受取って、一本いっぽんじよ背負いに背中へ

引っかけて、それと同時に片手を懷ろへ入れるやヒューと塀に向つて投げたのは一筋の細引であります。その細引が弓の弦つるのように張っているのを伝わつて矢のように早く、見上げるような高塀を上つて行つたその身の軽いこと、業わざの早いこと。

それを見届けてホッと息を吐いた南条という壮士は、多勢の中へ躍り込んで、非人の持つていた六尺棒を奪い取り、

「五十嵐！」

と一声叫ぶと、

「おうー！」

ほど遠からぬところで勇ましい返事。

徽典館きてんかんの少年たちが家路へ帰りがけに、猛然たる犬の吠え声

に驚かされたのは、牢内にこの騒ぎが起つたのと前後しての時

であります。

暫らくして町々を縦横無尽に人が走りました。彼等がいま帰つて行こうとする方向から夥しき人が走つて来て、ただでさえ霧中に捲かれてゐる彼等をひきつつんでしまいました。

「ど、どうしたのだ、何事だ」

「破牢、破牢、破牢」

少年たちは丸くなって、そうして自分たちを取囲んだ慌しい人々に詰問の矢を放ちながら、おのおのその帶刀へ手をかけました。その理由はすぐ判明し、嫌疑はたちどころに晴れてしまいました。

取囲んだのはお組番や牢屋同心。彼等を取囲んで仔細に検分したのは、もしやと破牢の罪人を取調べのため。

そこで少年たちは、今夜という今夜は、いよいよ容易ならぬ

晩であることを知りました。これは片時も早く家路に帰った方が無事だとの考えを起しました。しかしながら、遠くもあらぬお代官陣屋の方まで帰るには、これから、また幾度も改められ調べられることであろうと聞かされて、飛んだ迷惑なことだと、一同は苦笑いをしながら、またも例の靄もやの中を泳ぐようにしてその場を歩き出しました。

彼等はどうして無事に、それぞれの家へ帰るには帰ったけれども、帰って見ると家の方の騒ぎはまた一層であります。

彼等の父兄というのは、牢屋に關係を持ったお組屋敷の者が多かったから、帰って聞くとその騒ぎは容易なものではありません。

破牢は一番二番の室で、逃げ出したものは一番室で二人、二番室で八人、都合十人ということです。その計画はズット前か

ら企たくらまれていて、両室共に牢の格子が鋭利なる鋸のこぎりの類で挽き切られていたのを、飯粒で塗りつぶして隠しておいたということ。そうしておいて今夜のような靄かの深い晩を待っていたらしいということ。その首謀者かは予て東北の方からこの甲州へ入り込んで、甲州の地勢を探っていたために囚とらわれた二人の怪しい浪士であつて、それに力を添えて、刃物を供給したりなんぞしたのは、近ごろ入った贋金使いの男であるということ。幸いに牢番が発見した時分には、一の構内から外まわりの高塀を乗り越えようとして、まだその辺にうろついていたということ。不幸にして彼等の手が利あいていて、人数の気の揃あい方が上手であり、捕方の方が狼狽あてて、それにこの通りの靄であつたから、とうとうみんな取逃がしてしまったということであります。

多分逃げた先は長禅寺山の方に違いなからうというので、そ

の方へ追手が向いました。しかし廓くわくの内、町の中とても油断がならないというので、その方へも追手が廻まわりました。

お組屋敷の人たちは総出でその追捕方ついはかたに向っているために、家庭においては出陣の留守を預かるような心持で、眠るものとは一人もありません。

少年たちも父兄のあとを追うて出かけようとする者もあつたけれど、それは差留められて、その代りに附近の警戒をつとめることになりました。

逃げた先はたいてい山の方だろうとは誰も想像するところでありますが、この通りの闇のことですから、たとえ御城内へ逃げ込んだところでその姿を認めることはできません。たとえばまた廓内の武家屋敷の方へ走つたにしろ、または市中へ走つたにしろ、やはり人影を見て追跡するというわけにはゆきません。

右往左往に人は飛んだけれど、たまたま行会えばこの少年たちのようなのや、かの子供を背負うたきちがいのようなのや、そうでなければ御同役の鉢合せのようでも更に手ごたえがありません。

「いつたい、こりや何というもんだ、煙のようでもあるし、霧のようでもあるし、靄がかかったようでもある、行く先行く先がボヤボヤとして、前へ出ていいんだか、後ろへ戻っていいんだかわかりやしねえや、大方、雲が下りて来たんだろう、ここは山国なんだからな、四方の山から雲が捲いて来て、甲府の町を取りこめたんだ。暗^{くれ}えなら暗^{くれ}えで、我慢の仕様もあるけれど、暗^{くれ}えところへこんなものが舞い込んで来た日にゃあ、てんで提灯の火も見えやしねえ、お城の櫓^{やぐら}がどの辺にあつたんだか、そ

の見当もつかねえんだ。こんな晩に牢破りをするなんというのは考えたもんだ、暴風雨あらしの晩よりまだ始末が悪いやな、大手を振って眼の前を歩かれたってわからねえやな、逃げられる方もわからねえから逃げる方もわからねえんだ。こうして歩いて行くうちに、犬も歩けば棒に当たるといふことがあるから、なんでもかまわねえ、ドシドシ駈けろ、駈けろ」

宇治山田の米友もまた、こんな口小言くちこごとを言いながら、闇と靄の中の夜の甲府の町を、例の毬栗頭いがりあたまで、跛足びつこを引いて棒を肩にかついで、小田原提灯を腰にぶらさげて走って行く一人であります。

狂人走れば不狂人もまた走るといふのが、この晩の甲府の町ちまたの巷ちまたの有様でありました。段々だんだんの襟えりのかかった筒袖すはだを一枚素肌すはだに着たばかりで、不死身ふじみであるべく思われる米友はまた、寒さ

の感覚にも欠けているべく見受けられます。

「やつしし、やつしし」

米友はこういう掛け声をして極めて威勢よく駈け出して行きました。どこへ行くのだからその見当はつかないながら、その口ぶりによつて見れば、いま破牢のあつたことを彼は心得ているのであります。

こうして駈けて行く米友が、途中で不意に、

「あ、あ、あぶねえ！」

と言つて、弁慶が七戻りななもどりをするように後ろへ退すさつて、肩に担い

だ棒を斜めに構えて立ちはだかつたのは、奇妙であります。

もちろん、そんなような晩でありましたから、先に何の敵が現われて、何のために米友が不意に立ちどまつたのだからわかりません。ただ立ちどまつて棒を構えた米友の権幕けんまくを見ると、そ

れは冗談でないことがわかるのであります。

担いだ時は棒であるけれども、構えた時は槍でありました。宇治山田の米友はこの時、冗談でなく槍をとつて、それを中段に構えて待の位まちに附けたのは、正格にしてまさに堂に入れるものであります。一口に米友と言つてしまえば、お笑いのようなものだけでも、ひとたびこうして本氣になつて槍を構えた時の米友は、また尋常の米友ではありません。しかしてこの米友は、曾かつてこういう正格な構え方を、咄嗟とっさの間に見せたことは幾度もありませんでした。

東海道の天竜川のほとりの天竜寺で米友は、心ならずも多勢を相手にして、その盗人ぬすびとの誤解から免れのがようとししました。その時は遊行上人ゆぎようしやうにんに助けられました。

甲州街道の鶴川では、雲助どもを相手に一場の修羅場しゆらばを出し

ました。その時は彼等をばかにしきつて、乱雑無法なる使い方をして荒れました。この間は折助と、あわや大事に及ぼうとした途端に、屋根へ上つて巧みに逃げてしまいました。

今や、その時のような放胆な米友ではありません。

待まちの槍やりには懸かの槍やりが含こんでいるのであります。その両面には磐石ばんじやくの重きに当る心が籠こもつているのであります。不思議なる哉かな、ほとんど師伝に依ることなき米友は、三身三劍の奥の形かたが、立ちはだかつて棒を構えたところ、そのままにおのずと備わつているのであります。こうして見ると、運慶きんぎの刻きんだ十二神將の形をそのままであります。

不思議なのはそれのみではありません。米友が何故に遽にわかに真劍になつて槍を構えたか、米友自身もそれは知ることができませんでした。ことにその通りの五里霧中であつて、鼻の先に

現わるるものさえわからない時に、そこに何者かがあつて米友を驚かせたものとすれば、それも不思議ではありませんか。

ただ米友の槍を構えたその形だけを見ていれば、例の運慶の刻んだ十二神将のような形が、さまざまに変化するのを認めます。十二神将が十二神将にとどまらず、二十八部衆にまで変化するのを認めます。

槍を挙げて、あ、と言つて散指さんしの形をして見せました。やや

遠く離れて槍を抱えては摩醯まけいしゅら首羅の形をして見せました。また

そろそろと懸かかりの槍を入れたその眼は、難陀竜王なんだりゅうおうの眼のように光

ります。「エエ」と言つて飛び上る時は、雷神が下界を驚かすよ

うな形をして見せます。して見せるつもりではない、米友にお

いては、実に容易ならぬ生死の覚悟が、眼にも面かおにも筋肉にも

充ち満ちているのだが、相手が例の如法闇夜の中にあるから、

離れて見れば一人相撲を取っているとしか見られません。ややあつて、米友はものの五間ほど一散に飛び退りました。

飛び退つて、槍を下段に構え直して、や、やや、と言って、口から咄々^{とつとつ}と火を吐くような息を吐いて、もう一寸も進みませんでした。

平常^{ふだん}における米友は跛足^{びつこ}でありますけれども、槍を持たした米友は少しも跛足ではありません。

猿のような眼をクリクリとさせて、槍を下段へ取つたままの米友は、油汗をジリジリと流していました。

これもまた平常における米友ならば、ここで得意の米友流の警句^{たんか}と啖呵^{たんか}とが口を突いて、相手を罵^{ののし}るはずであつたが、この時は、エとか、ヤとか言うほかには言句の余裕がないようであります。

それよりも大事なことは、その棒の頭へ槍の穂をすげる隙がないことであります。いつも懷中へ忍ばせて、必要ある場合には取つてすげる、自分一流の工夫の槍の穂を頭へつける余裕すらないのであります。多くの場合において米友は、その槍の穂をすげる必要を認めません。棒だけを持つて槍の必要にかえるのであります。

それにまた、穂をすげれば血を見ずしては納まらないのも、穂がなければ単に敵を懲らすだけで済む、という理由もありました。

今は穂をすげなければならぬ場合になつてきたと見ゆるにかかわ拘らず、なお米友は、それを敢てするの余裕を持たないと見えます。

ものの五間ほど飛び退つてから、やや暫らくして、

「やい、出て来い、かかつて来い、隠れていちゃあ相手にならねえ」

ようやくのことで米友は、これだけの言葉を出すの余裕を持つことが出来ました。これだけの言葉を出したけれども、その構えは少しも弛めることをしませんでした。やはり米友は、この中で誰をか相手に戦い、今その相手呼びかけたものであります。

しかしながら、如法闇夜の中に何者も見えないように、何者の返事ありません。

「うむ、掛つて来ねえのか、掛つて来なけりやあ、何とか言つてみる、何とか言えば、俺らおいの方から掛つて行く、返事をしてみる、やい、一言ぬかしてひとことみる、やい」

米友は続いてこう言いましたけれども、掛つても来らず、一

言の返事ありません。

「おかしな奴だな、斬りたけりや斬られてやるから出て来いよ、
憚りながら宇治山田の米友だ、斬って二ツになつたら大い方を
くれてやらあ」

そろそろ米友の啖呵が始まりそうな形勢です。

「うむ、何とか吐せやい、俺らの方から出て行つてやりてえの
だが、理詰の槍になつてゐるからそうはいかねえのだ、ここは
手前の方から出て来るところだ、盲目なら仕方がねえが、盲目
でなかったら出て来いやい」

と米友は啖呵を切りました。盲目なら仕方がないが、盲目でな
かつたら出て来いと米友が言つたのは、故意に出たものではありません。
しかしながら相手は決して出て来ませんでした。自然、
米友は力抜けがしました。

「どうもおかしな奴だな、今、ああして俺らが後ろへ飛んだ時に、手前がもう一太刀追つけて来ると、実は俺らも危あぶなかつたんだ。ナニ、身体からだを斬られるまでのことはねえが、槍は二つに斬られていたかも知れねえのだ。俺らにとつちやあ身体を斬られるより、槍を斬られるのが恥かしいくれえのものなんだ。それを手前が追っかけずにいるのが気が知れねえよ。いつたい、俺らの腕を試すつもりで斬りかけたのか、またホンとに俺らを斬るつもりで斬りかけたのか、そこんところがどうも解げせねえやい、何とか挨拶をしろやい」

米友はこう言いながら、槍を左の手に持ち直して身を屈かがませました。もう先方が確かに斬ってかかる気遣いがないから、それで形をすっかり崩してしまつて、そうして右の手を伸べて往來の地面を掻きさがしました。ちょうど手頃の石があつたのを

拾い取つて、腰をのばしました。

「それ！」

ヒューと風を切つてその礫つぶてが米友の手から暗夜の宙に飛びました。投げたものを受け留めることを商売にしていた米友は、また同時に投げることも巧みでありました。暗夜の宙に飛ぶ礫は聖人もまたこれを避けることができないはずであつたけれど、幸いにして米友の投げた礫まの的まとには、聖人も凡夫もいなかったと見えて、向う側の古池かなにかに飛んで行つてパツと水音を立てただけです。

礫は空むなしく飛んだけれども、

「合点だ！」

米友はけたたましく叫びました。叫ぶと共にその棒を一振りして水車のように廻し、

「危ねえものだが、その方はお手の物よ、餓鬼がきの時分からそれで飯を食つていたんだ」

水車のように廻した棒の七三のあたりへ、カッシと立つたのは刀の小柄こづかであります。それを受けとめるべく米友は、前のよさんたんうな惨憺たる苦心に及びませんでした。南禅寺の楼門でする五右衛門の手裏剣を柄杓ひしやくで受けた久吉ひさよし気取りに、棒に食い付いた小柄を抜こうともせず、再び身を屈めて小石を拾いました。拾い取るとヒューと手の内から飛びました。手の内から飛ぶと、矢継早やつぎばやにまた拾いました。拾つては投げ、拾つては投げる米友の礫、それは上中下の三段から、槍を遣つかう如く隙間すきまもなく飛ぶのでありました。

礫ついでは隙間なく飛んだけれども、やはりその手答えはなくている途端に、

「破牢！ 破牢！」

この声が闇を圧して物凄く響き渡ります。

それを聞くと米友は、礫を打っていた手を少しく控えて耳を傾ける。このとき早く、

「あつ！」

と言つて米友は、また後飛びに五間ほど、今度は腰を立て直す隙^{ひま}がなくて、仰向けに大地へ倒れてしまいました。仰向けに倒れたけれど米友は、倒れながらその槍を構えることを忘れませんでした。そしてやや暫くその形で、すなわち倒れたままで槍を構えた形でじつと身動きをしません。米友がこんな形をしてじつとしているのはかなり長い時間でありました。しかしながら事はそれだけで、それ以上の破綻^{はたん}を示しませんでした。すべてこれは米友の一人芝居であります。五里霧中の中で米友は、

始終こうして一人芝居を打っていました。しかしながら米友は、まだまだこの構えから起き上ることはできません。四方しほうころ転びの腰掛をひっくり返したような形をしたままで、いつまでも大道の真中に寝ているのは、他よそから見ればかなりおかしい形でないことはないけれど、米友自身になつてみれば、油汗を流しているのです。今の時間で言えば、ほとんど三十分ばかり、米友はこうして油汗を流して唸うなつて槍を構えていました。そうしていた時分に米友は、

「エイ」

と言つてその槍を、やつぱり寝ながらにして横に一振り振ると、今度はたしかに手答えがありました。

「ワン！」

米友の横に振つた棒を飛び退いてまた飛びついて、ワン！と

いったのは人間ではない、かなり大きな形をしている犬の声でしたから、米友は勃然^{むっく}としてはねおきました。

「ばかにしてやがら」

「ワン！」

「こん畜生」

「ワン！」

「まだ逃げやがらねえ」

「ワン！」

「殴^{なぐ}るぞ、こん畜生」

「ワン！」

「それ！」

「ワン！」

さすがの米友も呆^{あっけ}気に取りられてしまいましたのです。今まで

必死になつて相手にしていたのは、こんな犬ではないはずであります。相手が犬であるくらいであつたならば、米友は惜おしげ気もなく十二神将や二十八部衆の形をして見せたり、また縁台がさかさになつたような形をして、半時間も大道に寝ている必要はなかつたのであります。

五里霧中とは言いながら、その中にはまさに米友をして怖れしむべき敵があつたればこそ、彼はさんざんの苦心をして、一人相撲や一人芝居を打つて見せていたものを、その大詰に至つて犬が一匹出て来て、舐なめてかかろうとは、いかな米友といえども力抜けがして、呆然ぼうぜんとして起き上つたのも無理のないところでありました。

「こん畜生！」

米友は業腹ごうはらになつて、犬をこつぴどく打ち据えようとしまし

た。しかし、この犬がまた追つても嚇おどしても容易に逃げないで、いよいよ米友の近くに飛びついて縋すがりついて来たがるというのが、よくよくの因果であります。

米友が棒を振り廻せば犬は心得てそれを避け、棒を控えていれば懲こりずまたすぐに傍へ寄つて来て、吠えてみたり、鼻を鳴らしてみたり、身体を擦りつけようとしてみたり、ずいぶん人を食った犬としか思われません。米友はばかばかしいやら腹が立つやらしてたまりません。

「狂犬やまいぬだろう、打ち殺してくれべえぞ！」

打ったり払ったりするだけでは我慢がなり難くなつたから米友は、殺気を含んで棒を振いました。その棒の下にあつて犬はいつそう声高く吠えました。

「おや？」

米友は振り上げた棒を振り下ろすことなしに、この時ようやく犬の声音こわねを聞き咎とがめました。犬は透すかさずその米友の足許へ寄つて来ました。

「待て待て、手前の声は聞いたことのあるような声だ。ムクじやあねえか、ムク犬じやあねえか」

犬はこのとき鼻息を荒くして、米友の腰へ絡からみつきました。「いま提灯をつけるから待つていろ、もし手前がムクだとすれば、俺おいらは嬉しくてたまらねえんだ」

米友の腰につけた小田原提灯は消えていましたけれど、幸いにこわれてはいませんでした。その中には火打道具も用心してありました。

果してその犬はムクであります。

ほどなく宇治山田の米友とムク犬とは、嬉うれし欣よろこんでその場を

駈け出しました。

しかし、例の靄もやは少しも霽はれる模様はなくて、いよいよ深くなつてゆきそうであります。その靄の中で、あつちでもこつちでも、破牢、破牢、という声が聞えるのであります。

今や、米友にあつてはそれらの声は問題でなくなりました。辻斬も牢破りも今はさして米友の注意を惹ひくことがなく、ただムクの導くところに向つて一散いっさんに走るのみでありました。

ムクの導くところ——そこにはお君がいなければならぬのであります。

町筋はどうで、道中をどう廻つたか、米友はトンと記憶がありません。米友にあつては、ただムクを信じてトツトと駈けて行くばかりであります。

「ムクやい、どうした」

暫くして米友は足を止めました。それは今まで先に立つて走っていたムク犬が、急にあるところで立ち止まったからであります。

立ち止まったムク犬は、しきりに地を嗅ぎはじめました。地を嗅いでいたが何と思つたのか、真直ぐに行くべきはずの道を横の方へと鼻先を持つていくのであります。

「ムクやい、どこへ行くんだ」

はず

米友は腰なる小田原提灯を外して、ムクの行く先を照して見ました。もちろん、その通りの靄でありましたから、提灯の光も、足許だけしか利きませんでした。利かないけれども、米友はその提灯を突き出しながら、地を嗅ぎ嗅ぎ横へ外それて行くムク犬のあとを監視するように跟ついて行きました。これはどっちも前のように勇み足ではありません。

「ムクやい、手前、道を間違えやしねえか、これ見ねえ、ここはどっちも松並木で、それ並木の外は藪やぶで、その向うは畑になつてゐるようだぜ、いいのかい、こんなところに君ちゃんがいるのかい、道を間違えちやあいけねえぜ」

米友は、小田原提灯の光の許す限り、前後左右を見廻しました。それにも拘らずムクは、やはり地を嗅ぎながら、その松並木の横道を入つて行くことを止めないから、米友もぜひなくそのあとを跟いて行きました。

暫くすると、一つの祠ほくらの前へと米友は導かれて行きました。

その祠は荒れ果てた小さなものであります。社殿の前までムク犬に導かれて来た時に、米友は小田原提灯を差し上げて、

「こりや天神様だ、天神様の社やしろに違えねえが、その天神様がどうしたんだ」

米友は小田原提灯を翳かざしていると、やつぱり土を嗅いでいたムク犬は、急にその巨大な体軀からだを跳上はねあげて、社の左の方から廻つて裏手へ飛んで行きました。

「ムク、待ちろやい」

米友は急いでそのあとを追いかけて、この荒れたささやかな天満宮の社の後ろへ廻つて見ると、後ろは杉の林であります。

米友はムクを信じています。ムクの導いて行くところにはいつも重大の理由も事情も存するということを、米友はよく信じているが故に、五里霧中の上の闇の夜の杉林の奥をも、疑わずに踏み込んで行き得るのであります。

ほどなく宇治山田の米友が、この杉の林を出て来た時には、背中に一人の人を背負つておりました。小さい米友の身体からだに大

の男を一人背負つて、濛々たる霧と靄と闇との林を出て来ると、例のムク犬は勇ましく、またも前の天神の祠から松並木を、先に立つて案内顔に走つて行くのであります。

「待てやい、ムク」

道の傍に井戸を探し当てた米友は、その前へ棒を突き立てて、「この人に水を飲ませてやりてえんだ、俺らも咽喉が乾いたわい」

米友は釣瓶つるべを投げて水を汲み上げてから、背中の人を卸おろして、「どうだい、水を一杯飲んで、氣を確かに持つて、一言名乗つて聞かしてくんねえな、お前はどこの者で何という名前だか、それを一言ひとこといつて聞かしてもれえてえんだ」

いま、米友が背中から卸して水を飲ませようとしているその男は幸内でありました。けれども幸内は、米友の知合いではあ

りません。ムクはよく知っているけれども、口を利くことができません。

幸内はまだ生きていました。生きている証拠には水を飲めと言われて、しきりに口を動かしているのでもわかります。またその水を飲みたがっていることは、咽喉の鳴る音でも推察することができます。けれどもその水を飲むべく気力がありません、手も利きません、身体も動かすことさえできませんでした。

「仕様がねえなあ、それじゃ俺らが今、口うつしに飲ましてやるから」

米友は口うつしに幸内の口へ注ぎかけました。幸内はふるえつくようにしてその水をゴクリゴクリと飲みました。

「待っている、もう一杯飲ましてやる」

米友はまた口うつしにして幸内に水を飲ませました。幸内の

口が、もうたくさんだという表情をして米友の口から離れるまで、水を飲ませてやりました。

「ちつとは元気がついたかい。いくらか元気がついたら、お前の所番地を言ってみねえな、そうすればそこまで俺おいらが送つてやるよ」

しかしながら、幸内はその返事をしたくて咽喉をビクビクと動かすのだけでも、ついに言葉を聞き取らせることができません。

「まあ、いいや、ムクが知ってるだろう、ムクがお前の家を知っているだろうから」

と言つて、米友は幸内を抱き直して、またも自分の背中へ廻そうとしました。米友が幸内を負おぶつて来た帯は、神社の鰐口わにぐちの綱をお借り申して来たものであります。米友はその綱を探つて背

負い直そうとした時に、

「あッ、冷たくなっちゃったぞッ、冷たくなっちゃったぞッ」

と叫びました。そうして幸内の手首から、あわただしく胸元へ手をやって、

「いけねえいけねえ、咽喉へ痰が絡まつてらあ、さあいけねえ」

米友は狼狽うろたえました。

「おいおい、冗談じやうだんじゃねえ、死んじまっちゃいけねえよ、せつ

かくムクと二人で助け出して来たんだ、いま死んじまっちゃあなんにもならねえよ、もう少し生きてろやい、もう少し生きてろやい、おーい、おーい」

米友は幸内の耳元へ口をつけて大声で呼びました。それにもかかわらず幸内は返事をしませんでした。返事をしないのみならずそのままで、だんだん冷たくなつてゆくばかりでありまし

た。

「冗談じゃあねえ、死、死、死んじまっちゃあいけねえよ」

米友は何と思つたか、棒を腰に挟んで、幸内を引担いでドン
ドンと駆け出しました。無論ムクはそれに劣おとらず走はせ出しまし
た。

十

その夜の騒ぎが、駒井能登守の許もとへ注進されると、能登守は
衣裳を改めて出勤し、役向の差図をしました。

それが済むと能登守は自分の邸へ帰つて来ました。邸に帰つ
て、客間の中に柱を負うて一人で坐っていました。前には桐の火
鉢を置いて、それには炭火がよく埋いけてあります。そこへ坐つ

て無然^{ふぜん}としていた能登守の面^{かお}には、なんとなく屈托の色が見えます。なんとなく心の底に心配が残っているものようです。

「君、お君」

と、やがて能登守は、あまり高からぬ声でお氣に入りのお君の名を呼びました。いつもならばその声を聞いて、直ぐに次の間から返事のあるべきお君の声が聞えませんでした。

能登守は重ねて呼びはしませんでしたけれども、所在なさそうにホッと息をつきました。斯^か様に物案^{よう}じ顔に頼りのない様子は、能登守としては珍しいことであります。

破牢の責任をそれほど強く感じたものか、それとも江戸表に残し置いた奥方の病氣が急に重くなったのでもあるか、そうでなければほかに何か軽からぬ心配事が起るでなければ、こうまで打沈むはずはないのであります。

と言つても、そのほかに能登守を憂^{うれ}えしむべきほどの大事は思い当らないのであります。神尾主膳の一派は最初から能登守を忌^いみ嫌うて、これが排斥運動を企てつつあることは、能登守も知らないではありませんでした。けれどもそれは能登守が決して相手になりませんでした。相手にならない者に喧嘩を売^うりかけることもできません。

甲府に来て以来の能登守は、政治向きのことにはほとんど口を出しませんでした。旧来の組織に一を加えようと二を引こうとも何ともしませんでした。支配は先任の太田筑前守の為すがままで、自分はただ調練と大砲の研究ばかりやっていました。それですから、かえつて無能呼ばわりをされようと、出過ぎた仕事は一つもしていませんでした。それ故に神尾主膳らが、能登守を忌み嫌うというのも単に感情の問題のみで、仕事の上

では嫉視しつしを受けるような成功もしなければ、弾効だんがいを受けるような失態もしていませんでした。

名は勤番支配というけれども、実はその見習いのような地位に甘んじて、能登守は別にその新知識を振り廻したり、冴さえた腕を振おうとしたりしませんでした。家来の若い武士はそれを物足らず思つて、多少は献策をしたりすることもあつたけれど、能登守は、さっぱりそれを用いてみようという模様がありません。それでただ自分の連れて来た比較的少数の家来だけを進退して、まるで島流しにでもなつたような心持であるらしくあります。

やや手強く言つたことは、この間の神尾主膳の結婚問題の時のぐらいのものでありました。能登守のあの一言のために、神尾と藤原家との縁談はまだ行悩んでいるようでありますけれど、

そのほかには能登守が人の意見を妨げたり進路を塞いだりしたような挙動は一つありませんから、やはり無能と侮られようと、恨みを受けるような形跡は一つもないのであります。あなど

人を取立てたために、その競争者から恨まれるというようなこともまた、一つもないのであります。

ここへ来てから能登守が取立てた人といえ——それはお君を、有野村の藤原家から迎えて来たくらいのものであります。

そのお君でさえ、どうしたものかいま主人に呼ばれたけれども返事がないのであります。お君のいるところにはムクもまた在あらねばならぬはずでありましたけれど、今宵のような騒ぎの晩に門を守っていないから、ムクもまたこの邸にはいないものと思われても仕方ありません。

ややあつて能登守は立つて、この客間を出て廊下を通りまし

た。

「君」

能登守が足を留めて障子を外から開いた部屋には、高脚たかあしの行燈あんどんが明るく光っております。

能登守はこの部屋の障子をあける時に、お君の名を呼びましたけれど、お君の声で返事はありませんでした。

お君の返事こそはなかったけれど能登守は、その部屋の中へ隠れるように入って、障子を締めてしまいました。

「お君」

と言つて行燈の下に立つた能登守は、そこに面かおを蔽おおうて泣き伏しているお君の姿を見たのであります。

お君は泣き伏したまま、返事をしないのであります。先にも返事をしなかったし、今も返事をしないのであります。主人

が入つて来た時も面を上げてそれを迎えることをさえないで、かえつてその打伏した袖の下から歔歔すすりなきの聲が、ややもすれば高くなるのでありました。

「お前は、また泣いているな」

と言つて能登守は眉をひそめて、お君の姿を可憐いじらしげに見下ろしたまま立っているばかりであります。

「お殿様」

お君は泣きじやくりながら、やはり泣き伏したままこう言いました。

「どうぞ、あちらへいらしつて下さいまし、ここへおいでになつてはいけませぬ」

精一杯にこう言つて、あとは喚わつと泣き出すのを堪こらえるために、ワナワナと肩が揺れるのが見えます。

「わしが呼んでもお前が来ないから、それでお前のところまで来た」

と能登守は言いわけのように言つて、立去ろうともしません。

ごぜんさま
「御前様」

お君は^{すすりなき}歔歔の声で再び主人を呼びました。そうしてこころもちあちらを向いて、

「わたくしはお暇をいただきとうござりまする」

「暇をくれい？」

能登守は、さすがにお君の突然の言いぶりに驚かされたようであります。

「お前はいつまでもこの邸にいたいと言うたのではないか」

「わたくしは……わたくしはいつまでもお殿様のお傍に置いていただきとうござりまする、そのつもりで喜んでおりましたけ

れども、今となりましては……」

お君はこれまで言つて情が迫つたように、もう言葉がつけな
いで、身を震わして泣いているばかりであります。

「さあ、今となつてはお前が切れたくても、わしが許さぬ」
能登守の言葉にも顫えふるを帯びていました。

「いいえ」

とお君の返事は存外に冷やかでありました。そうして頭を左右
に振つたのは、それは前のように感情が迫つたのではなく、明
らかに拒否の意志を含めたものでありました。

「どうぞ、あちらへおいであそばして下さいまするように。こ
こは殿様のおいであそばすところではござりませぬ」

「わしはお前にまだ話したいことがあつて来た」

「いいえ、もう何もお伺いうかが申しますまい、わたくしはお暇をい

ただく身分の者でござりまする、お暇をいただければ、御主人でもなく召使でもないのでござりまする」

「君、お前は聞きわけがない」

「どう致しまして、わたくしは、もう何もお伺い申すことはござりませぬ……わたくしはお暇をいただきとうござりまする、わたくしはお暇をいただいて帰りまする」

お君はついに堪えられず喚^{わづ}と泣いてしまいました。

ほどなく能登守は悄悄^{しおしお}として、お君の部屋を出て帰りました。もとの一間へ来て、火鉢の上に片手をかざして、前のように物思わしげに、まだ寝ようとしません。

今の有様は、主従のところを換えたような有様であります。能登守としては思いがけない弱味でありました。お君としても思いきった我儘^{わがまま}の言い分のように聞えました。

能登守はかえつて、お君に向つて申しわけをし、或いは哀求するような物の言いぶりは齒痒はがゆいものであります。お君は始終泣いて泣きとおしていました。見様によつては拗すねて拗すね通しておりました。さすがに、能登守ほどのものが、そのお君の張り通した我儘いっしに、一矢ひとかどを立てることができないで、悄悄しおしおと引返すのは何事であらう。一廉ひとかどの人物のように言い囃はやされた能登守、それをこうして見ると、振られて帰る可愛い優男やさおとことしか思われないのであります。

それと思い合わすれば、このごろお邸うちのうちに噂うわさのないことではありません。殿様がお君さんを御寵愛ごちようあいになる……という噂が誰言うとなく、口から耳、耳から口へと囁ささやかれていますのであります。

けれども、それがために誰も主人の人柄を疑う者はありません。

んでした。その地位から言えば諸侯に準ずべき人なのですから、幾多の若い女を侍女として左右におくことも、また妾としてお部屋に住まわしておくことも、更に不思議なこととは言えませんが。寧ろむしそういうことをせぬのが、その周囲の人から不思議がられるのでありました。

能登守は一人の奥方に対してあまりに貞実でありました。その奥方が病身なために能登守は、女房がありながら鰥やもめのような暮らしに甘んじていることは、家名を大事がる近臣の者を心配がらせずにはおきません。

妾をおくことを、お家のための重大責任として家来が諷諫ふうかんしたものでありました。けれども能登守は、それを悟らぬもののようにあります。

お君を有野村の藤原家から呼び迎えたことが、誰からも勧めすすめ

ずに、能登守自身の発意に出たことは、家来の者を驚かすよりは、かえつて欣よろこばせたのでありました。

そうして日を経て行くうちに、お君がいよいよ殿様のお気に叶かなつてゆくことを、家来の人たちは妬ねたみも烟けむたがりもせず、恐悦してゆくのでありました。

そのお君が、この若くて美しくて聡明の聞えある殿様の前へ出ることを戦おのくようになったのは、ついこの二三日来のことでありました——それと同時に能登守の美しい面かおに重い雲がかかつて、憂愁の色が湛たたえられるようになったのも、ふたつながら目に立つ変化でありました。

人に面を合せない時は、お君は部屋に入つて泣いているのであります。能登守は茫然として、何事も手につかずに考え込んでいることが多いのであります。

今もこうして能登守は、同じような憂愁の思いに沈んで寝ることを忘れていました。この時、廊下を急ぎ足で忍びやかに走る人の気配けはいがありました。

能登守が低たれた首を上げて、その人の足音を気にすると、

「殿様」

障子を押しあけてこの一間へ入って来たのは、今まで泣いていたお君でありました。お君の振舞ふるまいはいつもとは違って、物狂わしいほどに動いてみえました。それでも入って来たところの障子は締め切つて、そして能登守の膝元へ崩折くずおれるように跪ひざまずいて、

「どうぞ御免下さりませ」

と言つて、やはり泣き伏してしまいました。

「お殿様、わたくしが悪うございました、わたくしが悪いこと

を申し上げました、わたくしがお暇をいただきたいと申し上げたのは嘘でございます、わたくしはいつまでも……いつまでもお殿様のお傍にいたいのでございます、どうぞ、お殿様、よきようにあそばして下さいませ」

お君は泣きながらこう言いました。こういった能登守の膝の下に全身を埋めるほどにして身を悶えながら、もだ、もだ、またも泣きました。

この時まで能登守の面かおに漲みなぎっていた憂愁の色が一時に消えました。そうして炎々と燃えさかる情火に煽あおられて、五体が遽にわかに熱くなるのでありました。

「よく言うてくれた、お前がその気ならば、拙者わしはいつまでもお前を放すことはない、お前もまた誰に憚ることもあるまい、今日からは召使のお君でなくて、この能登守の部屋におれ」

「……………」

「そうして、お前は好きな女中を傭^{やと}うて、その部屋の主^{あるじ}となつてよいのじゃ、人に使われるお前でなくて、人を使う身分と心得てよいのじゃ」

「……………」

お君には何とも返事ができませんでした。殿様にこう言われたことが嬉しいのならば、もつと先になぜあんなに拗^すねるようなことをして見せたのだ。またこう言われることが嬉しくないのならば、今この場でそれはお言葉が違いますとキツパリ言わないのだ。

どちらともつかないお君は、何とも返事をするのができないで、やはりこの殿様の膝元に泣き崩れているのを、能登守はその背中へ軽く手を当てました。

「殿様、それでも……あの、奥方様がこちらへおいでになりました時は、わたくしの身はどう致したらよろしいでござりましたう」

「ナニ奥が？ あれは病気で、とても、もう癒^{なお}るまい」

「おかawaii そうなことでござりまする、どうぞお癒し申して上げたいことでござりまする」

「癒してやりたいけれども、病が重い上に天性あのような纖弱^{かよわ}い身で……」

「さだめて御病氣中も、お殿様のことばかり御心配あそばしてでござりましょう、それがためによけい、お身体にも障^{さわ}るのでござりましょうから、おいとしいてなりませぬ」

「あれは存外冷たい女である——自分の病のことも、我等が身の上のことも、さほどには心配しておらぬ、物の判断に明らか

な賢い女ではあるけれど……」

能登守の述懐めいた言葉のうちには、その奥方に対する冷静な観察と、自然何か物足らない節ふしがあるように見えます。

「どうして左様なことがありますものでござりましょう、奥方は、どんなにか殿様を恋しがっておいであそばしますことやら」

「いやいや、あの女は恋ということ知らぬ、恋よりも一層高いものを知っているけれど……それはあの女の罪ではなくて堂上に育った過あやまちじゃ、過ちではない、それが正しい女であろうけれども」

「殿様、奥方様の御身分と、わたくしの身分とは……違うのでござりまする」

「それは違いましょうが」

「奥方様のお里は？」

「それはいま申す通り堂上の生れ」

「堂上のお生れと申しまするのは」

「それは雲上うんじょうのこと、公卿くけの家じゃ」

「まあ、あのお公卿様、禁裏きんり様にお付きあそばすお公卿様が、奥方様のお里方なのでござりまするか」

「父は准大臣じゅんだいじんで従一位の家、兄に三位さんみ、弟には従五位下じゆごいのげの兵衛権佐ひようえごんのすけがある。その中で育った女、氏うじと生れとには不足がないけれど……」

お君は能登守の奥方の門地もんちというものを、初めて能登守の口から聞きました。

その晩、おそく自分の部屋へ戻ったお君は、しばらく鏡台の前へ立ったままでおりました。その身には大名の奥方の着るよう

な打掛うちかけを着て、裾を長く引いておりました。その打掛は、縮緬ちりめんに桐に唐草からくさの繡ぬいのある見事なものでありました。鏡台の前を少し離れて立つて、自分の姿に見惚みとれているお君の眼には、先の涙が乾いてその代りに、淋しい笑えみが漂うていました。淋しい笑みの間には、堪こらえ難い誇りが芽を出しているようにも見えませんでした。

ことに鏡の前に立てかけてあつた写真の面かおと、自分の打掛姿を見比べた時に、お君の面には物に驕おごるような冷たい氣位を見せていました。

「奥方様はどんなに御身分の高いお方でもわたしは知らない、わたしはまたどんなに賤いやしい身分のものであつても、今となつては知らない。お殿様がわたし一人をほんとうに可愛がつて下さるから、わたしはお殿様お一人を大切にする。わたしのような

者がお殿様に可愛がられることが、わたしのために善いか悪いか、今、わたしにはそんなことは考えていられない。それでは御病中の奥方様に済むものか済まないものか、それもわたしにはわからない。わたしは本当にもうあのお殿様が恋しくて恋しくて、わたしは前からあんなにお殿様を恋しながら、なぜ泣いたり逃げたりしていたのだろう、ああ、それが自分ながらわからない。わたしはお部屋様になりたいから、それでお殿様が好きなのではない、わたしにはもうどうしたつてあのお殿様のお側は離れられない、お殿様のおつしやることは、どんなことでも嫌とは言えない。わたしの身体をみんなお殿様に差上げてしまえば、お殿様のお情けはきつとわたしにみんな下さるに違いない。奥方様には本当に申しわけがないけれども、お殿様をわたしの物にしてしまわなければ、わたしはのけものになつ

てしまう」

お君の写真を見ている眼は、火が燃えるかと思われます。その口から言うことも、半ば呪いのろのような響でありました。お君が見ている写真というのは、最初にこの邸へ訪ねて来た時に、心あつてか能登守より貰った奥方と二人立ちの写真でありました。能登守の立っている姿よりも、奥方の立ち姿がお君の的まとになつていたのであります。

お君の姿がこの奥方の姿に似ているということは、能登守もそう思うし、家来たちもそう思うし、お君自身もまたそう思わないではないし、ことにお銀様の如きは、これがためにあらぬ嫉妬しつとを起して、それは弁解しても釈とけないことにまでなつてしまいました。

「わたしも、明日からこの奥方様の通りに、片はずしに結ゆつて、

この打掛を着てもよいと殿様がおっしゃった。奥方様がいらつしやれば、奥方様の方からお許しをいただくのだけれども、ここでは殿様のお許しが出さえすれば、誰も不承知はないのだから、わたしは明日からそうしてしまおう。でも人に見られるときまりが悪い、御家来衆はなんと思いなさるだろう。そんなことはかまわない、この家来衆よりもわたしの方が身分が重くなるのかも知れない。ああ、わたしが片はずしの鬘まげに結って打掛を着て、侍女を使うようになったのを、伊勢の国にいた朋輩ほうばいたちが見たらなんというだろう。わたしは出世しました、わたしは恋しい恋しいお殿様のお側で、お殿様の御寵愛を一身に集めてしまいました、わたしのお殿様は世間のお殿様のような浮気ごころで、わたしを御寵愛あそばすのではありません、奥方様よりもわたしを可愛がって下さるのです。わたし、もうお殿

様が恋しくて恋しくて仕方がない、わたしの胸がこんなにわくわくしてじつとしてはいられない」

お君は鏡台の前に立つて悶^{もだ}えるように、手を高く後ろへ廻して髪^{かみ}の飾りを取つて捨てると、髪を振りこわしてしまいました。たつた今、片はずしに結^ゆつてみたくてたまらなくなつたからです。

お君はついに髪を解いて、そこで自分から片はずしの鬘^{まげ}を結つてみようとなりました。櫛箱^{くしばこ}を出して鏡台に向つたお君の面^{かお}には、銀色をした細かい膏^{あぶら}が滲^{にじ}んでいました。お君の眼には、物を貪^{むさぼ}る時のような張りきつた光が満ちていました。

無教育な故にこの女は単純でありました。賤しい生れを自覺していたから、物事に思いやりがありました。今となつてはその本質が、ひたひたと寄せて来るほかの慾望に圧倒されてしま

いました。可憐な処女の面影が拭い消されて、人を魅するよう
な笑顔えがおがこれに代りました。お君は鏡にうつる自分の髪の毛の黒い
ことを喜びました。その面かおの色の白いことが嬉しくて堪りませ
んでした。それから頭へ手をやるたんびに、わが腕の肉が張り
きつていることに自分ながら胸を躍らせました。お君はこうし
て、その写真を見ながら髪を結つては、また写真を見比べるの
でありました。おそらくはその姿を能登守に見せたいからでは
ありません。ただこの場で今宵限りこの打掛を着て、この奥方
の通りに片はずしに結つて、ひとりでながめていることだけに、
このわくわくと狂うような胸の血汐ちしおを押鎮めようとするに過ぎ
ないらしいのであります。

お君は、どうやら自分の手で、それを本式の長髯ながづとの片はずし
に結んでしまい、ばららふの長い笄こうがいでとめて、につこりと媚なまめか

しい色を湛^{たた}えながら、例の奥方の写真を取り上げました。眉を
払^おつてあの奥床^{おくゆか}しい堂上のぼうぼう眉を染めることだけは、奥
方のそれと並ぶわけにはゆきませんけれども、お君はわざわざ
そんなことをしないで、これで充分に満足しました。燈火の
下で合せ鏡までしてその髪の毛の出来具合をながめたり、また立っ
てその打掛の裾を引いてみたり、立ってみたり居てみたりして
堪^{たま}らない心です。

お君がこうして夢中の体^{てい}でいる時分に、その窓の外で風の吹
くような音がしました。夢中になつていたお君には、その音な
どは耳に入ることがありません。つづいて刷毛^{はけ}を使つてみたり
鬚^{たば}をいじつてみたり、どこまで行つてこの奥方ごつこに飽きる
のだから、ほとほと留度^{とめど}がわからないのであります。

しかしながら、その風の吹くような音が止んで直ぐに、それ

ほど夢中であつたお君が、その夢を破られないわけにはゆかなくなつたのは、それが風の音だけでなかつたからであります。

「ワン！」

というのは犬の声、愛すべきムク犬の声でありましたから、この声だけには、お君もその逆上のぼせて逆上とめどせて留度を知らない空想から、今の現在の世界へ呼び戻されないわけにはゆきません。

「ムクかい」

お君はあわてて立ちました。

「お前、今までどこへ行つていたの、こんな晩にこそお邸にて御門を守らなければならぬのに、今夜に限つて外へ出歩いて、いくら呼んでも出て来ないのだもの、いくら心配したか知れやしない」

庭の方へ向つた障子を押し開きました。それと共にこの時ま

でまだ戸を締めておかなかつた不用心を、お君は気がついて悔ゆるような心になりました。

邸の外は庭の中までもいつぱいに例の闇と靄もやとで、その中にいる真黒な犬の形は、とてもこちらからは見る事ができません。その鼻息で充分にわかります。

「帰つて来たらいいから、もうお寝、これからこんな晩には外出そとでをしてはなりませんよ」

お君はムク犬に寝よとの許しを与えました。それはいつもムク犬がするように、今夜は少し晩おそくなつたけれども、やはりその例で挨拶に来たものとばかり思ったからであります。

けれどもまたムク犬は、今夜に限つてその許しを柔順そふりに受けないで、縁先へ首をつきだして物を訴えるような素振そふりであります。

「どうしたの」

ムク犬はその巨大な面と優しい目で、お君の面を見上げたのは、自分はよんどころない用事が出来て外出致しました、こんなことは滅多にありませんから、今晚のところはどうぞ悪しからず御免下さいまし、と申しわけをするように見えました。そうしておいて自分の首をグルリと半分ばかり外の方へ廻して、また主人の面を見上げました。それだけでお君にはムク犬の心持がよく呑込めました。

「お前、誰か連れて来たのだね」

見廻した外の方には板塀があつて、そこには木戸があるはず。

「困ったねえ」

とお君は、その木戸の方とムク犬の面とを等分にながめて、

しばらく思案に暮れました。

「お前、あの木戸をこの夜中にあけられるものかね。それに今夜はお前、牢破りの悪人があつたりなんぞして、怖い晩ではないか。こんな怖い晩に、お客様なんぞを連れて来られては、わたしも迷惑するし、連れて来られたお客様だって、どんな疑いをかけられるかわかりやしないじゃないか」

お君はこう言つてムク犬を詰なりました。けれども強く叱ることはできません。ナゼならば今までムク犬のしたこととで、その時はずいぶん腹が立つても、その事情がわかつた時は、なるほどと感心することばかりでありましたからです。ムクのする通りにしなければ、取返しをつかないことになったものをと、あとでホッと息を吐いて感謝することが幾度あつたか知れないからであります。それでここでもまた同じように、あの木戸をあ

けろという無言のムク犬の合図を、お君は何事とも知らずに無条件で信用しなければならなかったのであります。

けれども、この木戸は、すんなりとあけられない理由も充分にあります。今宵のような物騒な晩であることと、主人の居間近くであるということと、女一人の部屋であるということと、それらの用心は、お君としては或る場合には身を以ても守らねばならないのであります。それ故お君は当惑しました。

しかし、ムク犬は主人の当惑に同情する模様がなくて、その縁に引いた打掛の裾をくわえてグイグイと引きました。その挙動は、主人をして退引させぬ手詰のつびきの催促てづめに見えます。ここに至るとお君はどうしても、すべての危険を忘れてムク犬を信用せねばならなくなりました。よしこの木戸をあける瞬間において、いかなる危険が予想されようとも、ムク犬の勇敢はそれを防い

で余りあることを信ぜずにはられません。

「待つておいで、いま燈火あかりを点けるから」

お君は、やがて雪洞ばんぼりに火を入れて庭下駄を穿はきました。打掛の裾をかか^はげて庭に下り立つて、ムクを先に立ててほど離れた木戸口の錠前を外はずすべく、静かに靄の中の闇を歩いて行きました。

ムク犬を先に立てて、お君はついに木戸の鍵かぎを外してしまいました。用心して戸をガラリと開いて、

「どなた」

ムクの後ろの方からお君は、雪洞ばんぼりを遠くさし出して塀の外を見やりました。塀の外も、やつぱり例の闇と靄とでありましたから、雪洞の光もさつぱり届き兼ねて、そこに何者が来ているかということがお君にはわかりません。

「今晚は」

いまあけた木戸口の前に立っているものがあります。

「どなた」

お君は二度問いかけました。ムク犬は鼻を鳴らして、何者とも知れない外の者に向つて、入れ入れと促うながしているように見られます。

「今晚は」

外に立っているものは、入つていいのだから悪いのだから計り兼ねて、遠慮をしているような塩梅あんばいでありました。

「どなたでございます」

お君は三たびこう言つて外なる人に問いかけました。合点がてんのゆくほどの返答を聞かないうちには、入れということを言わないのであります。

「今晚は。どうも遅くなつて済まねえが、入つてもようござんすかい」

と言つて、外なる人が駄目を押しました。

「いつたい、あなたはどこのお方で、このお邸へこんなに遅く、何の御用があつて来たのでございます」

「俺^{おい}らはこの犬に引張られて来たんだ。もしこのお邸に、君ちやんという女の子がいやしねえかな。俺らは米友というものだよ」
「友さん？　ほんとにお前が米友さんなのかい。お前が本当に米友さんならば、わたしはお君に違いありません」

「そうかそうか、どうも声がよく似ていると思つたが、もし間違ふといけねえから、よく聞きすましていたんだ。俺らの声もよく聞き分けがつくだらう、声だけ聞いても米友の正物^{しょうぶつ}だといふことがわかるだらう、第一ムクがここまで俺らを引張つて来

たということが何よりの証拠だ」

「ああああ、ちつとも違くないよ。どうしてまあ友さん、この夜中にここへ尋ねて来たの。まあ早くお入りよ。ムクがわたしにこの木戸をあけろあけろというから、何か大切な^{だいじ}ことがあるとは思つたけれど、友さん、お前が尋ねて来ようとは思わなかつた、さあ早くお入り」

「入つてもいいかい、御主人に悪いようなことはないのかえ」
「そんなことはありやしない、あつたつてお前さんのことだもの」

「俺らはいいいけれど、連れが一人あるんだぜ」

「お連れが？」

「その連れが、いま生きるか死ぬかの境なんだ、俺らのことは後廻しでいいから、この背中に背負^{しょ}っている人を助けるように

してもれえてえのだ、君ちゃん頼むぜ」

「そりや大変。なんにしても、まあ早くお入り」

米友は、ぬつとその潜り^{くぐ}木戸へ頭を突込みました。お君が雪洞^{ぼんぼり}を差しつけて、入って来た米友を見ると、自分の身体よりも大きな男を一人背負って、手には棒を杖について、

「君ちゃん、久しぶりだな」

「友さん、よく尋ねて来てくれたねえ」

お君にとつて米友が不意に訪ねて来てくれたことは、兄弟が訪ねて来たより以上の嬉しさでもあり頼もしきでもあります。米友をもてなす時のそわそわとした素振^{そぶり}を見れば、お君はほんとうに子供らしくなってしまうのでありました。

お君は打掛などは大急ぎで脱いでしまいました。それでも髪だけは片はずしであることが不釣合いだともなんとも気がつか

ないほどに、米友をもてなすことに一心になつてしまいました。

お君が米友を案内して来たのは、自分の部屋とは離れた女中
部屋の広い明間あきまであります。

米友の背負つて来た連れの大病人は大切に二人で荷になつて、蒲団
の上に寝かせて、薬を飲ませておきました。

「友さん、いつお前江戸を立つてどうして甲府へ来たの。来る
ならば来るように、飛脚屋さんにでも頼んで沙汰をしておいて
くれればいいに」

「冗談じょうだん言つちやあ困る、飛脚屋に頼むにもなんにも、からきり

お前の居どころが知れねえじゃねえか、それがためにずいぶん
俺おいらは心配したぜ。ほら、ほかの軽業かるわざの連中はみんな帰つて来

たろう、何かこつちで揉もめ事があつたとやらだが、でもみんな
無事に帰つて来て、両国でまた看板を上げてるのに、お前ばか

りは帰つて来ねえんだ。どうなったか、さっぱり様子がわからねえから、俺らはあの小屋まで聞きに行つたんだ。聞きに行くとお前、いつかの黒ん坊の失策しくじりがあるだろう、それがために今でもあの親方が俺らをよく思つていねえんだ、それで追ひ払われちまったから腹が立つてたまらねえけれど、我慢してあの宿屋へ帰つてよ、それからこつちへ来る人があつたから、その人のお伴ともをして連れて来てもらうまでの話はなかなか長いんだ」

「わたしだつてお前、ずいぶん苦勞をして死にかけたことが二度も三度もあつたのよ。それでもムクがいてくれたり、また親切な人に助けられたりして、今ではお前、このお屋敷でずいぶん出世……をしているのよ。その間だつて、友さんのことを心配していいない日と言つてはありやしない、どうかしてわたしの居所いどころを知らせたいと思つて、手紙を書いてもらつて二度ばかり、

両国のあの宿屋へ沙汰をしたけれども、さっぱりその返事がないから、わたしはどうしようかと思っていた」

「あれからの俺らというものは、あの宿屋にばかりいたんじやあねえのだ。まあ追々ゆつくり話すよ、こうして会ってみりやあ文句はねえのだが。そりやあそうと氣の毒なのはこの人だ、どこのどういう人だか知らねえが、口がまるきり利けねえのだ。ムクが案内するから俺らが天満宮の後ろの森の洞穴ほらあなの中から見つけ出して来たんだ、途中で冷たくなつたから死ぬんじやあねえかと心配して、俺らが急所へ活を入れてやつて来たおかげで、どうやら持ち直した、この分なら生命いのちは取留めるだろう。口が利けるようになりさえすれば占めたものだが」

「明日になったらお医者さんと呼んで上げましょう、今夜のところは寒くないようにして上げておいて……友さん、もう遅い

からお前さんもここへお寝なさい、わたしも部屋へ帰って休みます、また明日ゆつくり話をしましょうよ、明日と限ったことはない、いつでもこれから一緒にいて、あんまり離れて苦労しないことにしましょうよ」

お君はこう言つて、また寝ている人に蒲団をかけ直してやろうとして、思わずその寝面ねがおを見て喫驚びっくりして、

「おやおや、この人は、これは幸内さんではないか知ら」

十一

駒井能登守はこの時、何かに驚かされて夜具の中からねおきました。それはお君が米友を潜りの木戸から呼び入れた時よりも、ずっと後であつて、あの場面は一通り済んでしまった時

でしたから、無論それを聞き咎^{とが}めての驚きではありません。

それは能登守がいま寝ている屋根の上で、たしかに人の歩むような物の音がするから、それに耳を傾けたのであります。そう思えば、たしかにそうであります。屋根の瓦を踏んでミシリミシリと音がする。時としてはその瓦が、踏み砕けたかと思われる音がするのであります。

しかしながら、もしも怪しい者がその辺に來ているならば、能登守が驚く以前にムク犬が驚かねばならないのであります。しかるにムク犬はなんとも言わないで、今や寝入ろうとした能登守の耳を驚かしたものとすれば、ムク犬はまたしてもどこへか夜歩きをはじめて、この邸にはいなくなつたものと見なければなりません。

能登守がなおも屋根の上の物音に耳を傾けている時に、今度

は屋敷の外まわりでバタバタと駈ける人の足音が聞えました。その足音は一人や二人の足音ではなく、両方から来て走せ違^はうような足音でありました。

「や、これはこれは、御同役、お役目御苦勞に存ずる」

という出会いがしらの挨拶が聞えました。

「なんにしても深い靄^{もや}でござるな、鼻を摘^{つま}まれても知れぬと言うけれど、これは鉢合せをするまでそれとは気がつかぬ、始末に悪い晩でござるわい。それはそうとこのお屋敷は、これは御支配の駒井能登守殿のお屋敷ではござらぬか」

「いかさま、これは能登守殿のお屋敷じゃ。実は我々共、たつた今ここまで怪しいものを追い込んで参ったのでござるが、この辺でその跡が消えたのでござる」

「それはそれは。実は我々共も、お花畑の外よりどうやら怪し

げな人の足音を追いかけて、ここまで来てみるとその足音が消え申した」

塀の外におけるこれらの問答が、いま、屋根の上の物音だけで耳を澄ましていた能登守の耳へ歴々ありありと聞えました。屋根の上のは何者とも知れないが、この塀の外のはまさしく捕方とりかたの人数であります。捕方の人数というのは、今宵こよい破牢のあつたそれのために、まだまだこの辺を固めている役人の手配が、少しも弛ゆるまないことが知れるのであります。

「次第によつたら、この能登守殿のお屋敷の中へ忍び込んだかも知れぬ、御門番を起して案内を願うてみようか」

「この夜中やちゆう、お騒がせ申しては相済まぬ、もう暁方も間近いほどに、このあたりを蟻はも這い出ぬように固めて待とうではないか、暁方になれば風が出るでござろう、風が出たならば自然に

靄も吹き払われるでござろうから」

こんな申し合せの声も聞えます。そうして彼等はこの屋敷のまわりを固めているらしいのであります。

能登守はそれと頷うなずいている時に、暫らく静かにしていた屋根の上の足音がまた、ミシリミシリと聞えはじめました。つづいて挫どうと庭前にわさきへ落ちる物の音がしました。つづいて軒下を密ひそかに走る者がある様子です。暫らくすると、どこをどうしたかそれらの足音が、たしかにこの家の中へ入って来ているのであります。しかも能登守のいま寝ているところから僅かの廊下を伝つて行き得る、あの洋式の広間へ入り込んでいらしいのであります。

この時に能登守は起き上つて寝衣ねまぎの帯を締め直しました。寝衣の帯を締め直すと共に床の間にあつた、銃身へ金と銀と赤銅しゃくどう

で竜の象嵌どうがんをしてある秘蔵の室内銃を取り上げました。

室内銃というてもそれは拳銃ではありません。普通の火縄銃よりは少し短いものであつて、やはり火縄銃ではありません。

これはコルトの五連発銃というのによく似たものであります。けれども舶来のものではありません。能登守自身が工夫して作らせた秘蔵のもので、五連発だけは充分に利くのです。

能登守はこの室内銃を携えて、寝間を抜け出して廊下伝いに離れの洋式の広間へと、そつと忍んで行きました。

廊下を突き当つて、その洋式の研究室へ入るには、やはり洋式の扉ドアであります。扉の傍の窓の隙から能登守はまず室内の様子を覗いて見ました。

火の気のなかるべきところに意外にも燈火あかりが点ついています。それは真中の卓子テーブルの上へ裸蠟燭はだかうそくを一本立てて置いてあるのであ

ります。その裸蠟燭の光で朦朧^{もうろう}としてそこに二箇^{ふたつ}ばかりの人影が、卓子を囲んでいることを能登守は認めることができました。その何者であるかを、一見しては見極^{みきわ}めることはできませんでしたけれども、二度目によく眼を定めて見れば、それが破牢人の片割れであることは直ぐに知れたのであります。

能登守は微笑しました。逃げ込むのにことを欠いて、この室内へ逃げ込んで来るとは、飛んで火に入る虫よりも無謀な者共であるわいと、腹の中でおかしいくらいに思いました。

しかしながら、それにしても彼等が存外、落着き払っていることが、能登守をして多少感心させないわけにはゆきません。それと知るや知らずや彼等は、世の常のお客に來たような心持で、椅子へ腰をかけて、物珍らしそうにこの室内を見廻しているものであります。

「ははア、なんとこれは珍らしい一室である、見給え、壁の間には大きな黒船の額がかかっている、ようい洋夷の調練している油絵がある、こちらの棚に並べてあるのはありや大砲の雛形ひながたで、五大洲の地図もあれば地球儀もある、本箱に詰っているのはありやみんな洋書で、あの机の上のは舶来の理学の器械や外科の道具と見ゆるわい、それにまたこの一室の全体が日本の造りではないわい、この板の間に敷きつめてあるのも、こりや和蘭オランダあたりの代物しろものらしい。いったいこの部屋の持主はこりや何者だろう。こうして見ると我々は南蛮の国へでも流れついたようで、トンと甲州にいる気はしない。もし日本の者ならば、長崎の高島秋帆たかしましゅうはん先生か、信州の佐久間象山先生あたりの部屋を見るようだわい」

こう言こつてしきりに室内を見廻して興がついていたのは、それは獄中こよりで紙撚こよりをこしらえていた奇異なる武士、すなわち仮りの

名を南条と呼ばれていた破牢者でありました。彼は多年獄中にあつての蓬々たる頭髮ぼうぼうと茫々たる鬚髯しゅぜんの間から、大きくはないが爛々らんらんと光る眼に物珍らしい色を湛たえて、しきりにこの室内を見廻してゐるのであります。

「なるほど、これは妙なところへ落着いた。昔大江山の奥にしゅてんどうじ酒呑童子が住んでいた、それを頼光らいこうが退治した。酒呑童子は鬼の化身けしんだと俗説に唱えられていたが、近頃それはポルチュガルの漂流人が、あの山へ隠れていたのだと新奇な説を唱え出した学者がある。してみればこの部屋も、これは舶来はく来の酒呑童子が甲州へ分家を出したのかも知れぬ、してみると我々は、さしむき渡辺の綱であり坂田の金時であるわけだが、実はうっかりすると退治される方で、退治る方の役廻りでない」

卓子テーブルの上へ頬杖をつきながらこう言つて笑つてゐるのは、二

番室にいた破牢の先達^{せんだつ}で、これもその名を仮りに五十嵐と呼ばれていた壮士でありました。

この南条と五十嵐と二人の話しぶりは傍若無人^{ぼうじやくぶじん}でありました。實際^{かたわら}傍に人はないのであつたが、それにしてもこの夜中に人の家へ忍び込んだ者の態度としては、あまりに傍若無人でありました。

しかしながら駒井能登守は、この傍若無人をかえつて興味を以て見、かつその会話を聞かないわけにはゆきません。彼等がこの上どんな挙動に出るかを究^{きわ}めてみなければならなくなりました。それ故に能登守は扉をあけることもせず、鉄砲を携えたまま、例の隙間^{すきま}から窺^{うかが}つていたのであります。そうすると南条は立ち上りました。立ち上つて書棚の方へ行つて、並べてある書物を一通り見て廻りましたが、最後にその中の一冊を抜

き取つて前の裸蠟燭のところまで持つて来て、

「蘭書だ」
らんしょ

と言いました。

「何が書いてあるのだ」

と五十嵐が尋ねました。

「スメルトクルース、つまり鎔^{るつぼ}坩のことだ、鉋物を鎔^とかす鎔坩

のことを書いてある和蘭^{オランダ}の原書だ」

と南条が説明しました。

「それはますます珍^{ちん}だ、ここの主人は洋行した鍛冶^{かじ}屋でもある

のか」

「こりやあ高島先生のお弟子か或いは江川^{えがわたんあん}坦庵の門下であろう。

それにしても今時こんな書物を、甲州の山の中で読んでいると
いうのが変っている」

南条は首を捻りながらその蘭書を開いてパラパラと二三葉飛ばして見ていました。これによつて見れば、ともかくもこの南条は蘭書が読める人らしいのであります。五十嵐の方は覚束ない^{おぼつか}と見えて、本をひっくり返している南条の手元ばかりをながめていましたが、

「とにかく、火を熾^{おこ}そうではないか、そこに火鉢がある」
能登守が平常用^{ふだん}ゆる大火鉢へ眼をうつしました。

「うむ」

南条の方は、まだ蘭書から眼をはなしません。五十嵐は立つて火鉢のところへ来ました。そこにあつたたきつけと炭とを利用^{りよう}して、

「ちよつと、燈火^{あかり}を借りるぜ」

テール^{テール}卓子^{はだかろうそく}の上の裸蠟燭^{はだかろうそく}を取つて火を焚きつけて、また元のところ

へ立てて置きました。

まもなく焚付の火が勢いよく燃え上ると、炭火もそれにつれて熾おこりはじめました。五十嵐はその火を盛んにするようにつとめていましたが、南条は足を踏み延ばして火鉢の縁へかけ、片手を翳かざしたままでその蘭書をながめていました。

「面白いか」

五十嵐がまた尋ねました。

「別に面白いというべきものではない、ただ鉄を鎔とかす方法が書いてあるのだ。イギリスの鎔るつば坩は鋼鉄を鎔かすことができるとか、イプセルとはどうだとかいうことが書いてあるのだ」

「さあ、いい塩梅あんばいに火が熾つた、宇津木にもあたらせてやれ」

一方を顧みると、そこに何人なんびとかが寝かされていて、その上には、能登守がここで日頃用ゆる筒袖つつそでの羽織が覆いかけてあるの

でありました。

能登守はそれと知って苦笑いし、いまさらにその室内の隅々までよく覗いて見ましたけれども、そのほかには人らしい影は見えません。つまりこの室内にあるのは、前から傍若無人に話していた二人と、別に寝かされている一人と、都合三人だけであることを確めました。

「それはそうと、南条、これから我々はどうするのじゃ」と五十嵐は、火にあたりながら蘭書を見ている南条の横顔を覗きました。

「そうさなあ」

と南条は本を伏せて五十嵐と顔を見合せました。

南条と五十嵐とは椅子に腰をかけたまま、火鉢の火にあたつて膝を突き合せて話をはじめました。

その話というのは、これからの身の振り方であります。

彼等はその挙動の傍若無人である如く、言語もまた傍若無人でありました。それは高談笑語でこそなけれ、ややはなれた能登守の立聞くところまで、尋常に聞える話しぶりでありました。

「実は、おれも弱っているのだ」

と言つて、本を伏せた南条が弱音を吐きました。けれども格別弱つたような顔色ではありません。

「あの贋金にせがねづか使いが万事を取りしきつて、山へ逃げさえすれば、

衣裳も着物も用意がしてある、食糧も充分で、直ぐに信州路へ立退くようにしてあると言うから、それを信用していたのだ。あの贋金使いという奴は心の利いた奴だから、それを信用して間違いないと思つていた、また事実、間違いはなかったのだろうけれど、途中で犬に吠えられたのが運の尽きでこんなことに

なつてしまつた。これから先はどうと言うて、拙者にもいつこ
う考えがつかぬ、五十嵐、君に何か思案があれば聞こうではな
いか」

「君に思案のないものを拙者において思案のあらうはずがない、
ともかくも杖と頼んだあの贋金使いとハグれたのが我々の不運
じゃ、悪い時に悪い犬めが出て来て邪魔をしたのがいまいまし
い」

「闇と靄との中から不意に一頭の猛犬が現われて出て、我々に
は飛びかからず、あの贋金使いに飛びかかった、贋金使いも身
の軽い奴であつたが、あの犬には驚いたと見えて逃げたようだ、
それを犬が追いかけて行つたきり、どちらも音沙汰おとさたがない、声
を立てて呼ぶわけにはいかず、跡を追いかけるにもこの通りの
闇、そのうち前後左右には破牢！ 破牢！ という捕手の声だ、

それを潜^{くぐ}つて、やつとここへ忍び込んだけれど、これとても鮫鰐^{こうがく}の淵^{ふち}の中で息を吐^ついているのと同じことだ」

「さあそれだから、いつまでもこうしてはいられぬ、まだ夜の明けぬうち、この靄と闇との深いうち、ここを逃げ出すよりほかに手段はあるまい。この場合ぜひもないから、この室に金銀があらば金銀、衣服があらば衣服、大小があらば大小、それらのものを借受けて出立致そうではないか」

「待て待て、外の様子に耳を傾けてみるがいい」

それで室内が森^{しん}として静まると、外でする喧^{やかま}しい声が、鳥の

羽音のように聞え出しました。それは能登守が前に聞いたのと同じく、この屋敷のまわりを走り廻る捕手の者が罵り合う声であります。それに加うるに、この屋敷の長屋に住んでいた者までが、起きて加わつて罵り噪^{さわ}いでいる様子であります。

「なるほど」

五十嵐はそれを聞くと、観念をしたものらしくあります。

「これでは、外へ出られぬ」

二人は、またも暫く沈黙して室の中が静かになりました。

「よしや、斯様かように捕方に囲まれずとも、このままで逃げ了おせる

ものではない、山野を駈けめぐっているうちに、飢えと疲れが
眼の前へ来て、やがて見苦しいザマで引戻されるにきまつてい
る、どちらにしても袋の鼠ねずみになつてしまったのだ。と言うて手
を束つかねて捕われるのも愚ぐな話、窮鼠きゆうそかえつて猫を囓かむというわ
けではないが、時にとつての非常手段を試みるよりほかはない。
その非常手段というのは、ここへ逃げ込んだのが縁、何者か知
らないが当家の主人を叩き起し、手詰てづめの談判をしてみるのだ」
南条はこう言つて、強い決心を示して五十嵐を見ました。

「手詰の談判というのは？」

五十嵐もまた、南条のいわゆる非常手段の決心を吞込んでいるのでしよう。ただ手段の細かい方法を聞かんとするらしくあります。

「当分の間、我々を当家にかくまってくれるように、事をわけて歎願してみるのじゃ」

「しかし、それを聞き入れてくれぬ時には？」

「その時には、この宇津木だけを当家にかくまってくれるように頼み、我々は相当の路用と衣類とを借用して尋常に逃げてみるのだ」

「もしまた、それを聞き入れなかったその時には？」

「その時には気の毒ながら、最後の手段を取るよりほかはない、最後というのは血を見ることだ」

「よろしい、その決心で働こう。当家の主人という者はどこに寝ている、ほかの者には取合わず、まず用心して忍び、その主人の寝間を突留めねばならぬ」

「さあ、その用意をしろ、何か得物えものはないか、あたりを探してみるのがよい」

二人は同時に立ち上りました。そうして裸蠟燭はだからうそくは卓子の上から南条の手に取り上げられて、

「おい、宇津木、聞いていたろう、いま話したようなわけで我々は、これから非常手段の実行にかかるのじゃ。うまくいけばよいけれど、多分うまくはいくまいと思う。仕損じたらそれまでだ、我々は斬死きりじにするか、或いは身を以て逃れるか二つに一つじゃ。自然、君にも充分に手が届かぬかも知れぬ。ともかく、君はこうして待つていろ、病気でもあるし、本来、君には何の罪もない

のじゃ、君を捕えに來たものがあつたら、その時、この場でよく申し開きをするがよい。いいか、眠っているうちに何者にか連れ出されたと、こう言つてしまえば理も非もない。また我々が首尾よく抜け出しさえすれば、明日とも言わず迎への工夫をする、どつちにしても落着いて寝ていることが肝腎かんじんじゃ」

この声を聞いて、寝台の上に能登守の筒袖羽織を被かぶせられて寝ていた宇津木兵馬が、起き直ろうとして動きかけましたが、かの廊下の扉の方にあたつて、トーンと一つの物音が聞えたのもその時です。この物音はさして大きな物音ではなかつたけれど、さすがの二人の壮士を悸きよつとせしめて、その音のした扉の方を見つめさせ、

「叱しッ」

いま、起き上ろうとする宇津木兵馬を抑えてしまいました。

「今の物音は？」

「……………」

二人の壮士は面を見合せました。それは彼等を気にさせるのも道理で、その物音は能登守が鉄砲の台尻を板の間に軽く落した物音でありました。やがて室内の四方へ眼を配った二人のうち南条は、能登守の机の抽斗から白鞘の短刀一口を探し出しました。五十嵐は能登守が鎔鋌の試験用に使う三尺ばかりの鉄の棒を一本探し出しました。南条はその短刀の鞘を払って、それが充分用に堪えることを知っての上で、二人はその裸蠟燭を前にかざして進んで行きました。二人の進んで行く方向は、無論、能登守が立聞きをしているはずの廊下へ通う扉の方向でありました。

「狼藉者！」

「あ！」

と驚いた二人の壮士は、その行手の扉が風もないのに向うから開いて、そこから狼藉者呼ばわりの凜々しい声を聞きました。

不意に能登守の一喝いっかつに会うた時には、さすがの壮漢もピタリそこに足を留めてしまいました。

足を留めてから先に進んだ南条は、その手に持った裸蠟燭を高くさしかざして、その扉の方をじつと見つめました。後ろから進んだ五十嵐は鉄の棒を構えながら、同じく蠟燭の光で南条の袖の下から向うを見込んでおります。

扉を開いて能登守はそこに立っていました。例の五連発の室内銃を胸のあたりに取り上げて、銃口をこちらへ向けていました。が、その銃身に象嵌ぞうがんした金と銀と赤銅しやくどうの雲竜が、蠟燭の光でキラキラとかがやきます。

双方は暫らく無言で睨め合っていました。

「其方たちは破牢者はろうものだな」

能登守にこう言われて、

「お察しの通り」

南条は落着いたものです。

「神妙に致せ」

能登守は彼等が、無事に屈服することを待つかの如き言いぶりであります。

南条はその迫らざる様子を見て、自分も敢て進むことをせず
に、能登守の人品を、なおしばらくうかがっていないければなら
ないのです。

けれども、南条の後ろに控えていた五十嵐はそれをもどかし
く思いました。鉄砲だとしてなにほどのことかあらん、この場合

においては機先を制して彼を打ち倒すよりほかはないと覺悟を
しました。それで南条の後ろから、ひそかに鉄の棒を取り直し
て、

「や！」

と言つて能登守めがけて打つてかかろうとすると、

「まあ待て」

南条はあわててそれを抑えました。

その時に能登守は銃を本式に構えて、いま飛びかかろうとす
る五十嵐の肩のあたりに覗ねらいを定めながら、

「一寸も動くことはならぬ、何者であるか、そこで名乗れ」

この時、南条は急に言葉を改めて、

「お察しの通り、我々は余儀なく甲府の牢を破つて、追い詰め
られ、心ならずも御当家へ忍び入り申したる者、貴殿は当家の

御主人でござるか」

「いかにも拙者が当家の主人」

「当家の御主人ならば、もしや……駒井甚三郎殿ではござらぬか」

「ナニ？」

「駒井甚三郎殿ならば、御意得たいことがござる、よく拙者が
おもて
面を御覧下されたい」

と言つて、南条は蠟燭ろうそくで自分の面かおを焼くばかりにして、じつと
能登守に振向けていました。

「おお、御身は亘理わたり」

能登守は篤とくと南条の面を見つめた後に、言葉がはずみました。
それと共に構えていた鉄砲てりおろを取卸して、

「君はここにいたのか、この甲府の牢内にいたのか、それとは

少しも知らなかった、今宵牢を破った浪士の頭は南条、五十嵐という兩人の者とは聞いていたが、その一人が君であろうとは思わなかった。君もまた、駒井甚三郎が能登守といつてこの甲府の城にいるということは気がつかなかったろう。しかも知らずしてその屋敷まで逃げて来たことが、いよいよ奇遇じゃ。ともかくもこつちへ来給え」

この打つて変つた碎け様は、南条を驚かしたより多く五十嵐を驚かしてしまいました。呆氣に取られていた五十嵐を無雑作に拉して、能登守が招くがままに、南条は旧友に会うような態度でその方へと進んで行きました。外はやつぱり靄で巻かれているのに、ここでも煙に巻かれるような出来事が起りました。

南条、五十嵐の二人は、宇津木兵馬をも携えて、能登守に導

かれてこの廊下を渡つて行つてしまつた時分に、廊下の縁から黒い者が一つ、ひよつこりと現われました。

縁の下の役廻りは斧九太夫以来、たいてい相場がきまつているのであります。これは手拭で頬被りほおかぶをしていましたけれど、その挙動によつてもわかる通り、さいぜんからこの辺に忍んで、何か様子を探つていたものらしくあります。廊下の下から本邸の方を見上げて、なおキョロキョロしている面を見れば、それは役割の市五郎の手先をつとめている金助という折助でありました。

金助は廊下の縁の下から顔を出したけれども、また暗の中へ消えて姿が見えなくなりました。しばらくすると奥庭の方へそつと忍び入つて、また縁の下へ潜ろうとする気色けしきであります。首尾よく縁の下へ潜り了おおせたか、それともその辺に忍んで立聞き

をしているのだからわかりませんが、とにかく、それつきり姿を消してしまいました。

ややあつて、ウーとムク犬の唸^{うな}る声がしました。いったん米友をつれて帰つて来たムク犬が再びどこかへ行つて、また立戻つて来たものと見えます。この唸る声を聞くと、あわてふためいて縁の下から転がり出したものがあります。それは以前の金助でありました。

金助の狼狽の仕方は夜目にもおかしいくらいであります。二度三度ころがつて、やっと塀まで行くと、塀際の柳の木へ一生懸命で走せ上つてしまいました。柳の木へ登ると共に、塀へ手をかけて飛び移つて、塀を乗り越えて往来へ出て、それからあとをも見ずに一散に闇と靄との間を走りました。その勢いは脱兎の如くであります。

「ああ危ねえ、今夜という今夜は、犬もいねえし、首尾も大分いいから、思い通り忍び込んで、さあこれからという時分に、また犬が出やがった。ほんとにあん畜生、俺の苦手だ^{にがて}」

五六町も走ったあとで、とある町の角の火の見梯子の下に立つて、金助はホッと胸を撫^なで下ろしました。胸を撫で下ろしながら、またムク犬が追っかけて来やしないかと、キョロキョロと逃げて来た方向を見廻して、万一その辺からワツと面を出した時分には、直ぐにその火の見の半鐘のかかった梯子へかけ上ろうとする用心は、かなり抜からないものです。

「はははは、まず人に見られなくってよかった。夜這^{よばい}に出かけて犬に追っ飛ばされた図なんぞは、あんまりみつともいいもんじゃあねえ、仲間の折助どもに見られでもしてみろ、いいかげんお笑いの種だ」

と言つて、金助は自分で自分を嘲笑いあざわらをしました。この独白によつて見ると、金助は誰かの頼みを受けて駒井能登守の挙動を探りに来たものではなく、その目的は全く別なところにあることがわかります。全く別なところというのは、つまりこの屋敷へ夜這に來たものなのでありましょう。毎晩のように夜這を目的に來てみたけれども、犬がいるために近寄れないのを、今夜は犬がいなかったために、屋敷の中へ忍び込むことにおいてある程度まで成功したものらしくあります。ところがその成功の途中で、また犬に追つ飛ばされたものと見なければなりません。

「ちよつ」

金助は舌打ちをして多少いまいましたが、つたけれども、

「それでも何が仕合せになるか知れねえ、捨てる神があれば拾う神もあるので、このおれに飛んだ拾い物を授けて下すつた

というのは、あの駒井能登守が牢破りを引張り込んで知らん面でかくまった一件を、すっかり見届けてしまったんだ、こいつをひとつ神尾様あたりへ売り込んでみる、安い代物しろものじゃあねえ」
こう言つて金助は、前の嘲笑あざわらいと変つたホクホク笑いをしました。

底本：「大菩薩峠 4」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成 8）年 1 月 24 日第 1 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 二」筑摩書房

1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※「躑躅ヶ崎」「天子ヶ岳」「駒ヶ岳」の「ヶ」を小書きしない扱いは、
底本通りにしました。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2002 年 9 月 21 日作成

2003 年 6 月 1 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。